

研究報告書第79号

9年間の子どもの成長を支える小中連携の在り方

2013. 3

山形県教育センター

は し が き

震災後、私たちにとって、「絆」「つながり」「かかわり」「連携」「協力」などが世のキーワードとしてことのほか意識されるようになってきた。私たちの日本は、個々の力だけでは、物質的にも精神的にも生活が支えられない時代に入ってきていることを物語っているかのようである。

振り返って、学校教育について考えてみると、「学力低下」「不登校」「特別支援教育の充実」「生きる力不足」「コミュニケーション不足」など、課題は枚挙にいとまがない。具体的な課題としては、「小1プロブレムの解消」「中1ギャップの防止」「学力の充実」など、目の前には解決すべきことが多い。

では、これらを打開し、本県教育の目標である『知徳体が調和し、「いのち」輝く人間の育成』を進めていくには、どのような視点で教育を見直していけば解決の糸口が見えるのだろうか。

本県教育の先達である澤井昭男氏が、20年以上も前に、これから求められる授業や教育活動の在り方として「ともに〇〇し合う」ことの大切さについて説いている。

近年の教育界でよく使われる「コミュニケーション」「コラボレーション」「ノーマライゼーション」「インクルーシブ」などのキーワードは、この考えに通じるものと捉えることができる。閉塞感の漂う教育の今日的な課題を改善していくための視点になりうるものとする。

そこで、私たちは今日的な課題解決を図り、健やかな子どもたちの育ちや学びを支えるために、いつ、どのような「ともに〇〇し合う」ことが重要なのかを探ろうと考えた。

そうした時に、「ともに〇〇し合う」ことを、すでに使われて久しい「連携」という言葉に置き換えることができる。この「連携」を、学校における教育活動改善の大きな視点と捉え、研究課題に位置付けたとき、異校種間の連携として「幼保小連携」や「小中連携」、「中高一貫（連携）」などがあり、「小小連携」など同校種間の連携も考えられる。

本研究においては「小中連携」に焦点を絞り、研究を進めてきた。

本報告書は、本県における小中学校9年間の児童生徒の成長をよりよく支える小中連携の実態を2か年にわたって探り、総合的な小中連携の在り方を考え、学校経営に生かせる研究報告をめざして編集した。本書が、今後の教育実践に活用されることを願う。

平成25年3月

山形県教育センター

所 長 吉田 敏明

報告にあたって

山形大学大学院教育実践研究科
准教授 三浦登志一

■「小中連携」の要請

子どもたちの側に立ってみると、小学校と中学校との間には決して低くはない壁が存在していると言えるだろう。かつて中学校における不登校生徒の増加が問題となった時期に指摘されたのが、子どもたちにとっての高い壁の問題であった。小学校から子どもたちを迎える中学校の教員からすると、特に壁を作ろうとしているわけではない。中学校としてごく自然な形で教育活動を行っているだけだと思われるものが、子どもたちには、抵抗を感じさせるものになっていったということである。「中1ギャップ」の問題は当然のことながら、中学校の教育活動に何らかの変化を要求することになる。しかし、このような学校間の接続の問題を考える場合には、原因を一方の側にのみ限定して考えることは避けなければならない。送る側と迎える側との両者の英知を結集していくことが大切である。

山形県の場合、小中学校をめぐむ問題の一つに学校の統廃合がある。「山形県学校名鑑」によれば、平成19年度から平成24年度までの6年間で、小学校で30校、中学校で15校ほどの学校数の減少が見られる。それぞれ10%前後に当たる数字である。その結果、町に小学校と中学校がそれぞれ1校という地域も見られるようになっていく。このような学校数の減少の過程で問われるようになっていくのが、小学校と中学校の接続の在り方である。そして、そのことを通して小学校、中学校、それぞれの教育をどのように充実させるのかを改めて考えていくことである。

小中の連携は、小学校の教育と中学校の教育の互いの良さの発見・再確認ということにもつながる。小学校と中学校が連携して教育活動をするものの良さは、それぞれが認識してはいるものの、小学校の教員も中学校の教員も、プロとしての意識をもっている。その意識は望ましいことであるのだが、時として他者に対する厳しさとなることもある。小学校の教員から見れば、「小学校で大切に育てたことを中学校では生かしていない」という声になったり、中学校の教員からは、「小学校では十分に育てていない」という非難になったりする。子どもたちをめぐって、教員間の思いの行き違いが生じることになる。これは、結果として子どもたちにプラスにならない事態である。教員たちが互いに関わり合う実践的な場を通して、教員間の共通理解を形成していくことが大切である。そうした理解を土台にして、小学校と中学校の良さを改めて発見し合うような関係の構築が望まれる。

■地域や学校の実情の違い

小中連携に関して、連携の典型的なモデルの一つを取り上げて示すことは難しい。学校がある地域の実情に違いがあり、小学校と中学校の接続のスタイルに違いがあるためである。一つの小学校と一つの中学校との間で実践できていることが、複数の小学校と複数の中学校が複雑に絡む形で接続している学校間で実践できる可能性は低いと考えるのが妥当であろう。したがって、どのような「小中連携」が望ましいのかは、それぞれの学校が置かれた状況に応じて判断していかなければならない。連携を築き上げていくためには、その実情をしっかりと把握することが大切になる。

これは、連携の在り方についての情報を提供する側が留意しなければならない点でもある。多様な状況に応じて選択できるような情報提供を行うことが求められるということである。いろいろな実践についての情報を提供するとともに、どのような取組をするのか、実情に応じて選択していくための効果的な情報提供の方策も工夫する必要がある。

■実践についての評価

教育におけるどのような取組についても言えることであるが、「100%の実践」はない。私たちが教育活動に取り組む中では、これで万全であり直すべきところはないという感覚をもちにくい。もっといいやり方があるのではないかという感覚がどこかに残るものである。このような感覚は、よりよいものを求めようとする志向を生み出す原動力となる。現状に満足せずに、一歩でも進もうとする教員や子どもたちの意欲を生かすものである。しかし、気を付けなければならないのは、それが恒常的な「不足感」につながることである。多くのことを実践しなければならないと考えすぎるのは危険である。学校として取り組めることには限りがある。他校で実践しているよいものを全て取り入れることが、よりよい教育活動になるとは限らない。取組をプラスしていくことが、結果としてのプラスになるのかどうかかわからない。そこで、「評価」を充実させることが大切である。学校評価の中に小中連携に関する項目を設けて、継続的に成果と課題を捉えていくようにしなければならない。さらには、関係する学校間で互いの評価を交換し合うなど、評価を運動させることも効果的である。

今回の調査研究の特徴の一つとして、「学校の実践」が具体的に県内各地から集められていることが挙げられる。実践の具体的な内容は、調査研究担当者が直接学校に出向いて、「生の声」として得た情報に基づいて整理している。その取材活動を通して、担当者たちは、調査研究を行う前の時点よりも「小中連携が実践されている」という感触・実感を覚えている。実践している学校としては、それほど高く評価していない活動が、他者の眼には非常に魅力的なものに見えたという事例があった。学校としては「小中連携」としてあまり意識していない活動に、小中連携の姿を発見するような事例もあったようである。新鮮な眼で見ることで新たな気づきが生まれたり、価値の再確認がなされたりしている。学校の教育活動について、広く情報を公開していくことの意義がそこにあると思われる。

■全体のデザイン

「小中連携」というキーワードから学校の教育活動を充実させようとする場合、第一に必要なのは、学区・学校が全体としてどのような目標を設定するのかを明らかにすることである。全体像のデザインを描くことである。小学校に入学してきた子どもが、義務教育段階を修了する9年後に、どのような姿となって卒業していくのかを描くことである。その目標に即して、小学校と中学校がどのように連携するのか、具体化を図っていくようにしたいものである。実践が先行する形で取り組まれているところも、どこかの段階でデザインを描いてみると、さらに充実した取組にしていけることができると思われる。大きな見通しをもつことで、実践の歩みはさらに着実なものになる。

今回の調査研究では、「まなび」「そだち」「そしき」の3つをキーワードとして実践例を紹介している。構想を描き、具体的な実践を展開していく上で、このような視点を参考にいただければと思う。そして、それぞれの地域や学校の実情に応じた切り口を探り、工夫していくことが大切であると考えている。

「9年間の子どもの成長を支える小中連携の在り方」の研究報告を行うにあたって、改めて感じたことは、山形県で展開されている教育活動の確かさである。県全体の取組として小学校と中学校の連携が強力に推し進められているわけではないにもかかわらず、県内の各地にそれぞれ地域の実情に沿った小中連携の姿を見ることができた。県の教育をリードする先生方による研究と構想に基づきながら、各学校の先生たちが地道に実践を展開していることがうかがえる。誠実な教育の在り方が、小中連携という一つの窓にも明らかなものとして映し出されている。

9年間の子どもの成長を支える小中連携の在り方

山形県教育センター

目次

はしがき

報告にあたって

第1章 研究概要 5

- 1 研究主題
- 2 主題設定の理由
- 3 研究の内容
- 4 研究の計画

第2章 アンケート調査と集計結果 6

- 1 アンケートの概要
- 2 項目別集計結果
- 3 連携の規模別にみる県内の現状
- 4 連携相関図

第3章 アンケートの分析（現状と課題） 22

- 1 特色ある小中連携の取組内容の分類
- 2 特色ある小中連携の取組方法の分類
- 3 取組の内容と方法との関連
- 4 小中連携で充実させたい取組内容と方法
- 5 考察のまとめ

第4章 実践事例の紹介 27

第5章 研究のまとめ 86

- 1 小中連携を推進していくための視点
- 2 小中連携を推進するための方法及びその成果
- 3 おわりに

第1章 研究概要

1 研究主題

義務教育9年間の児童生徒の学びと育ちを支える小中連携の在り方について、本県の現状と課題を把握し、中1ギャップの未然防止も含めた本県の豊富な実践事例を収集し、小中連携の充実を図るための取組について考察し提言する。

2 主題設定の理由

我が国の急速な少子化は、子どもたちの成長にも少なからず影響を与えていると考えられている。生活体験の不足や人間関係の希薄さは、子どもたちの学びの機会を減少させ、心身の発育・発達や自立を遅らせているといっても過言ではない。また、思春期を迎える小学校高学年から中学校にかけては、心身の成長や変化が著しい時期であり、精神的に不安定な時期でもある。その結果、不登校児童生徒の増加や、校種間の接続期に、小中学校間の様々な違いから、子どもに無用な戸惑いや不安を与える「中1ギャップ」といった現象が浮かび上がってきている。

そこで、小学校から中学校への発育・発達を踏まえ、小中学校間の違いによる戸惑いや不安を子どもたち自身が乗り越えていけるように、教師が支援することが必要になる。そのために、義務教育9年間の学びや育ちを一体のものと捉え、小学校と中学校がそれぞれの教育の特性を互いに理解しながら、連携して系統的で継続的な教育を進めることが重要である。

本研究は、本県の教育目標である『知徳体が調和し、「いのち」輝く人間の育成』に迫るために、学校が家庭や地域とかかわりながら、子どもたちに「確かな学力」を身に付けさせ、「豊かな心」を育み、「生きる力」を育成するための一助となることを目的としている。

本県の全小中学校の協力を得て、小中連携における小中学校の意識や現状、抱える課題を把握して分析や考察を試みるとともに、優れた実践事例を収集して紹介する。また、「まなび」「そだち」「そしき」をキーワードとして、本県の小中連携の実践事例を集約し、連携を推進するための視点、方法などを整理して示す。

3 研究の内容

- (1) アンケート調査による本県小中学校の現状把握
- (2) 小中連携に関する教員の意識調査
- (3) 特色ある実践事例の収集
- (4) 全国の先進的実践事例の取材

4 研究の計画

- (1) 1年次
 - ・ アンケート調査による本県小中学校の現状把握と分析及び考察
 - ・ 小中連携に関する教員の意識調査と分析及び考察
 - ・ 全国の先進的実践事例の取材
- (2) 2年次
 - ・ 本県小中学校の特色ある実践事例の収集、取材
 - ・ 報告書の作成

第2章 アンケート調査と集計結果

1 アンケートの概要

① 調査の目的

当センターでは、今年度からの2年計画で義務教育9年間の子どもの学びや育ちを支える小中連携の在り方について研究を行う。これにあたり、本県の小中連携の現状や課題を把握し、よりよい連携の在り方を考えるために本調査を実施する。

② 調査対象 県内全公立小中学校

③ 調査実施年月 平成23年10月

④ 調査内容

基礎データ

学校名			
記入者（職・氏名）	職	氏名	
学級数（特別支援学級を含む）	学級		
児童生徒数	名	教職員（県費負担職員）数	名
・小学校においては進学先の中学校名を、中学校においては進学元の小学校名をお書きください。			
	学校	学校	
	学校	学校	
	学校	学校	

質問1 小中連携は必要だと感じますか。あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。

ア 強く感じる イ ある程度感じる ウ あまり感じない エ 全く感じない

質問2 現在小中連携の取組を行っていますか。あてはまる方を○で囲んでください。

ア 行っている イ 行っていない

※「ア」の場合は以下の質問3～8に御回答ください。「イ」の場合は質問6～8に御回答ください。

質問3 現在の小中連携の取組がうまくいっていると思いますか。あてはまる方を○で囲んでください。また、その理由をお書きください。

ア うまくいっている イ うまくいっていない

（その理由）

質問4 小中連携の取組を今後どのようにしていこうと考えていますか。あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。また、その理由をお書きください。

ア 今より連携を強化していきたい イ 現状維持でよい

ウ 連携を縮小化していきたい。

（その理由）

質問5 特色ある（主な）小中連携の取組を御紹介ください。（3つ以内）

※取り組まれた実践をより詳しくお書きください。

取組名	ねらい	主な内容		取組にかかわる人	取組の成果と課題
		実施時期や年間回数			
		実施対象者			
		教育課程上の位置づけ			
		具体的な内容			
		指導の重点 ※○で囲んでください。	生徒指導 学習指導 保健安全指導 進路指導 その他		

質問6

・質問2において「ア 行っている」と回答した方は、

貴校における取組に照らし合わせて、今後充実していきたいと考えている連携を、下記のア～ケの中からあてはまるものを3つ選び、○で囲んでください。

・質問2において「イ 行っていない」と回答した方は、

小中連携を今後進めていく場合、どのような連携が大事だと考えますか。特に大事だと考える連携を、下記のア～ケの中からあてはまるものを3つ選び、○で囲んでください。

ア 学習指導の連携 イ 生徒指導の連携 ウ 保健安全指導の連携 エ 児童生徒間の連携
オ 教職員間の連携 カ 管理職間の連携 キ 地域との連携 ク 小学校間の連携
ケ その他（ ）

質問7 今後、新たに必要である（または充実させていく必要がある）と考えている小中連携の取組をお書きください。（構想段階のものでかまいません）

--

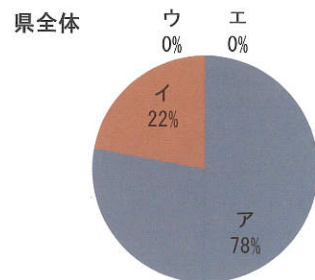
質問8 小中連携の取組についての悩み（現在苦勞していること）や他の取組について知りたいことをお書きください。（複数ある場合は複数お書きください）

--

2 項目別集計結果

質問1 小中連携は必要だと感じますか。あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。

ア 強く感じる イ ある程度感じる ウ あまり感じない エ 全く感じない

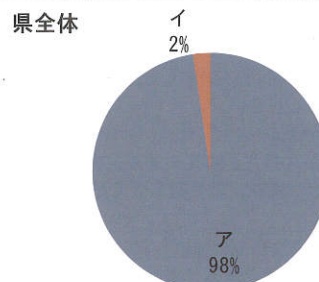


「強く感じる」が約8割、「ある程度感じる」が約2割である。

「あまり感じない」「感じない」は0%で、小中連携の必要性は十分に感じているようである。

質問2 現在小中連携の取組を行っていますか。あてはまる方を○で囲んでください。

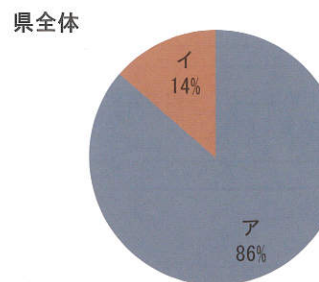
ア 行っている イ 行っていない



「行っている」と回答している学校がほとんどである。県内の学校は、何らかの形で小中連携に取り組んでいるようである。

質問3 現在の小中連携の取組がうまくいっていると思いますか。あてはまる方を○で囲んでください。また、その理由をお書きください。

ア うまくいっている イ うまくいっていない



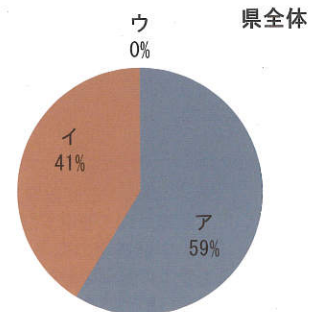
「うまくいっている」が8割を超えている。「うまくいっていない」が14%である。

取組を行っているが思うように効果が上がっていないという記載もあった。

質問4 小中連携の取組を今後どのようにしていこうと考えていますか。

あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。また、その理由をお書きください。

ア 今より連携を強化していきたい イ 現状維持でよい ウ 連携を縮小化していきたい

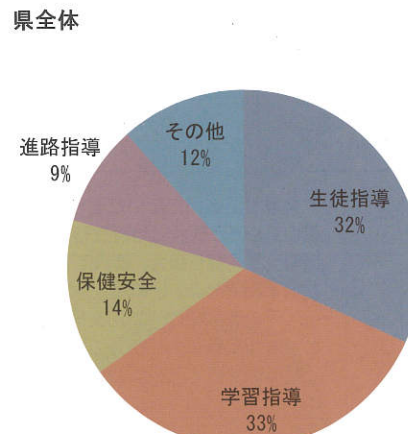


「今より強化していきたい」が約6割である。現状よりもさらに取組を向上させていきたいという意見が多いが、現時点でも取組がうまくいっていないために強化していかなければならないと回答した学校もある。

同じように「現状維持でよい」に関しても、現在の取組が効果を上げているために、このままの継続でよいという意見と、「多忙や時間設定の問題」から、これ以上は取組を強化できないために、現状維持でよいという意見もあった。

質問5 特色ある（主な）小中連携の取組を御紹介ください。

※ 取組を指導の重点（生徒指導・学習指導・保健安全指導・進路指導・その他）に着目して分析し、どの指導の重点が多いのか分析した結果を掲載している。



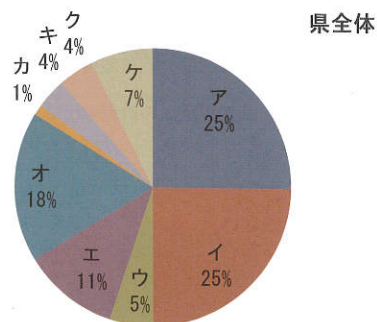
様々な取組がどこに指導の重点を置いて行われているかを分析した結果であるが、「生徒指導」「学習指導」がともに2大重点として3割を超えている。続いて「保健安全」「進路指導」と続く。1つの取組が「生徒指導と保健安全」の2つに重点をおいて行われているような取組もあった。

また、同じような取組でも、その学校のめざす目的によって、指導の重点は違う場合もあった。

質問6

- ・質問2において「ア 行っている」と回答した方は、
貴校における取組に照らし合わせて、今後充実していきたいと考えている連携を、下記の
ア～ケの中からあてはまるものを3つ選び、○で囲んでください。
- ・質問2において「イ 行っていない」と回答した方は、
小中連携を今後進めていく場合、どのような連携が大事だと考えますか。特に大事だと考
える連携を、下記のア～ケの中からあてはまるものを3つ選び、○で囲んでください。

ア 学習指導の連携 イ 生徒指導の連携 ウ 保健安全指導の連携 エ 児童生徒間の連携
オ 教職員間の連携 カ 管理職間の連携 キ 地域との連携 ク 小学校間の連携
ケ その他 ()



「学習指導」「生徒指導」が多い。続
いて「教職員間の連携」が多い。

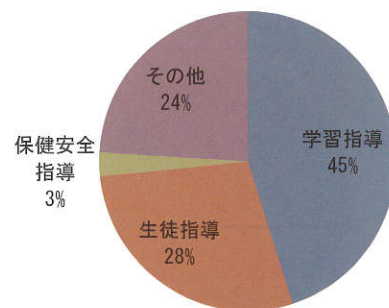
「ア 学習指導の連携」「イ 生徒指
導の連携」「ウ 保健安全指導」の3つ
は、質問5の取組の部分で出てきた「指
導の重点」ととらえ、「エ 児童生徒間
の連携」から「ク 小学校間の連携」ま
でを「指導の形態」ととらえることがで
きる。

この視点でみると、まずは「学習指導
と生徒指導」「教職員間連携と児童生徒
間連携」を充実したいと考えていること
がわかる。

質問7 今後、新たに必要である（または充実させていく必要がある）と考えている小中連携の
取組をお書きください。（構想段階のものでかまいません）

※ 質問7については質問6の選択肢を、①指導の重点（学習指導の連携 生徒指導の連携
保健安全指導の連携 その他）②指導の形態（児童生徒間の連携、教職員間の連携、管理
職間の連携、地域との連携、小小連携、その他）という2つの視点から分析を行った。

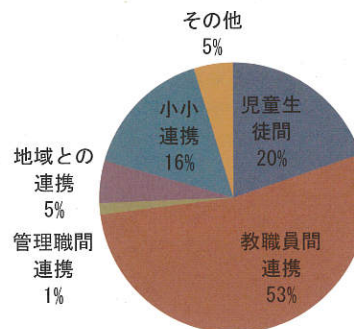
県全体 ①指導の重点



文章で記載いただいた回答を「指導の
重点」という視点で分析を行うと、「学習
指導」が4割を超え、続いて「生徒指導」
が約3割である。

「その他」には「特別支援に関するこ
と」や「教職員の意識」について、また
「組織について」の意見が出されていた。

県全体 ②指導の形態



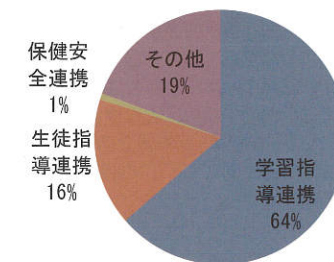
「指導の形態」という視点でみると約
半数が「教職員間連携」をあげている。
学習指導の連携や生徒指導の連携など
にも、まずは教職員間連携を充実させて
いく必要があると感じている学校が多
い。続いて「児童生徒間連携」が20%
である。

「小小連携」が16%を超えている背
景には、学習指導における外国語活動や
統廃合を見据えた連携が背景にあると
思われる。

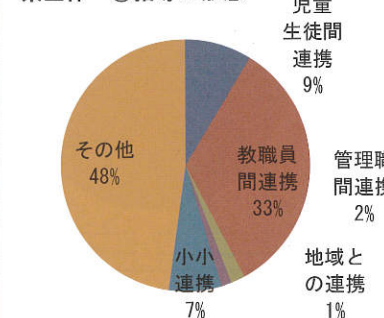
質問8 小中連携の取組についての悩み（現在苦労していること）や他の取組について知りたい
ことをお書きください。（複数ある場合は複数お書きください）

※ 質問8については質問7と同様に、①指導の重点②指導の形態という2つの視点から分析を
行った。さらに、③実践事例（学習指導、生徒指導、保健安全指導、その他）を知りたいとい
う回答が多いためどのような実践事例の要望が多いのかも併せて分析を行った。

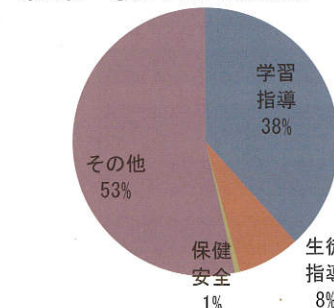
県全体 ①指導の重点



県全体 ②指導の形態



県全体 ③知りたい実践事例



①指導の重点では「学習指導連携」が6割
を超えている。

②指導の形態では「教職員間連携」が3割
を超えている。その他の48%の中には、悩
みという視点から、多忙感や時間設定の困難
などを回答する学校が多いため「その他」
の割合が多くなっている。

③知りたい実践事例では約4割が「学習指
導」のものである。その他は「学習指導」や
「生徒指導」などの具体的な内容はないが、
先進校や他校の特色ある取組を知りたいとい
う記載が多かった。

3 連携の規模別にみる県内の現状

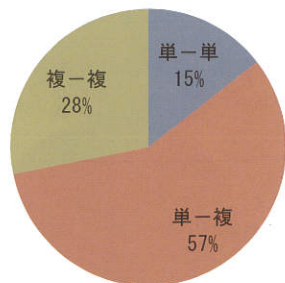
【連携の規模】

中学校区を1つのまとりとみた場合、①1つの中学校に1つの小学校から進学する、②1つの中学校に複数の小学校から進学する、③複数の中学校に複数の小学校から分かれて進学する、の3つに大きく分けることができる。これらのまとりを便宜上、①単一単連携(1中学校に1小学校)、②単一複連携(1中学校に複数の小学校)、③複一複連携(複数の中学校に複数の小学校)と定義して考える。

また、連携する学校数の多い中学校区を「連携の規模が大きい」と表現する。

※単位は中学校区数	単一単	単一複	複一複
県全体	16 中学校区	63 中学校区	31 中学校区
村山地区	5 中学校区	28 中学校区	13 中学校区
最上地区	4 中学校区	6 中学校区	4 中学校区
置賜地区	5 中学校区	13 中学校区	7 中学校区
庄内地区	2 中学校区	16 中学校区	7 中学校区

県全体



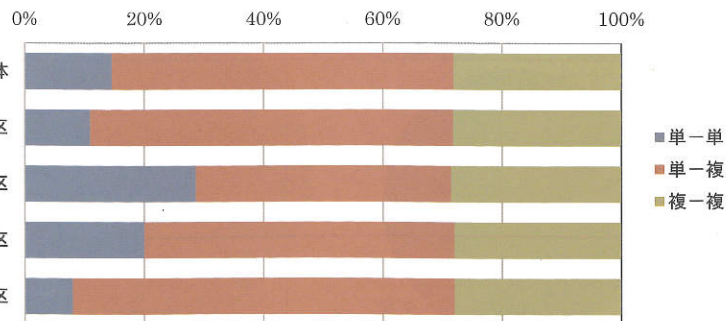
県全体をみると「単一複連携」が約6割程度、「複一複連携」は約3割程度である。

地区別にみると置賜、最上地区は「単一単連携」が約3割程度ある。その背景には市町村に1つの中学校だけ存在するという中学校区が多いことがあげられる。

どの地区も「複一複連携」の割合は2割を超え同じような割合ではあるが、山形市、天童市、米沢市、鶴岡市、酒田市などは同じ「複一複連携」でも、他の中学校区より複雑である。

この「複一複連携」が複雑であればあるほど、規模的にも時間的にも、小中連携の取組が難しくなる傾向がみられる。

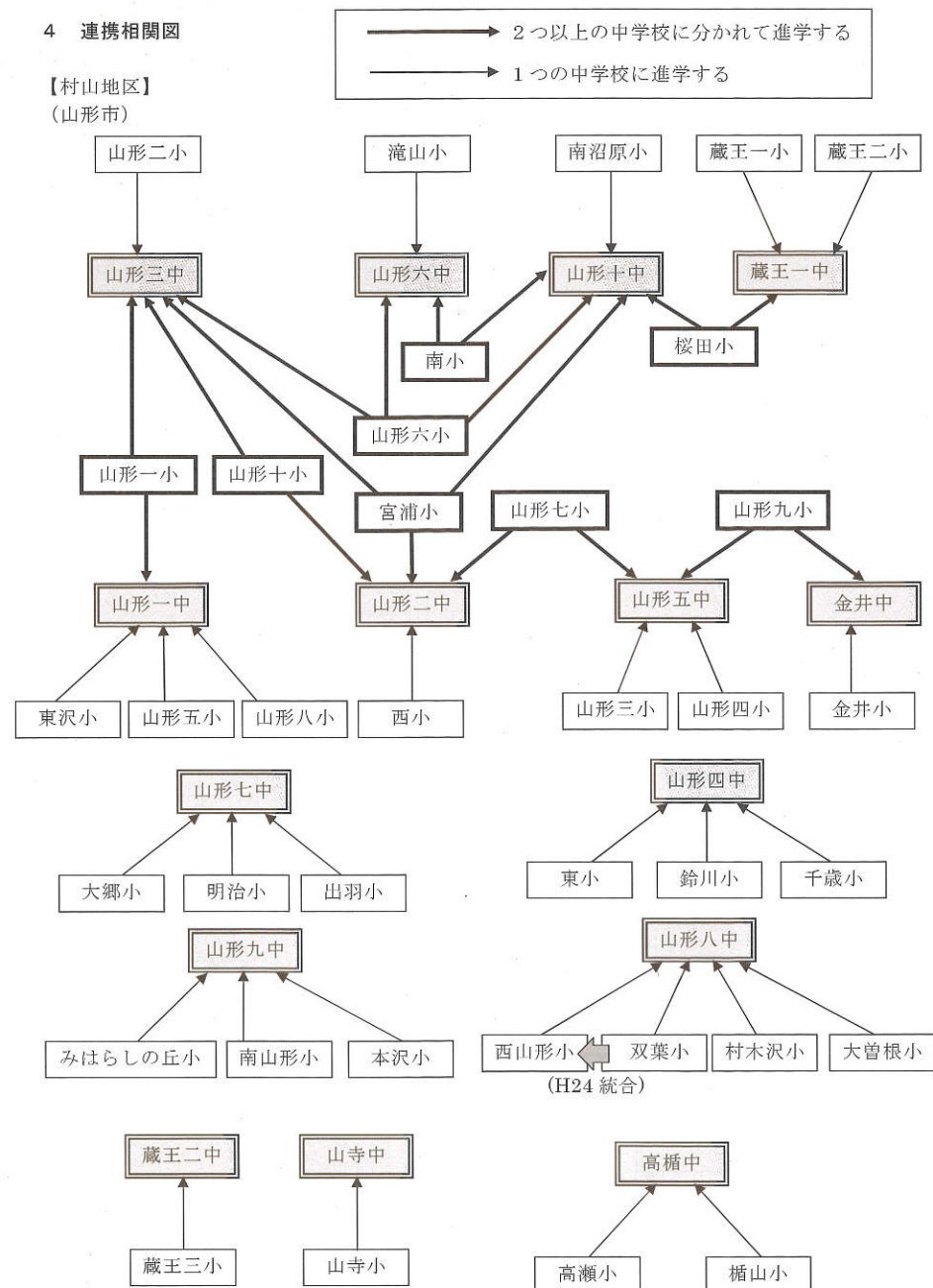
地区別の割合

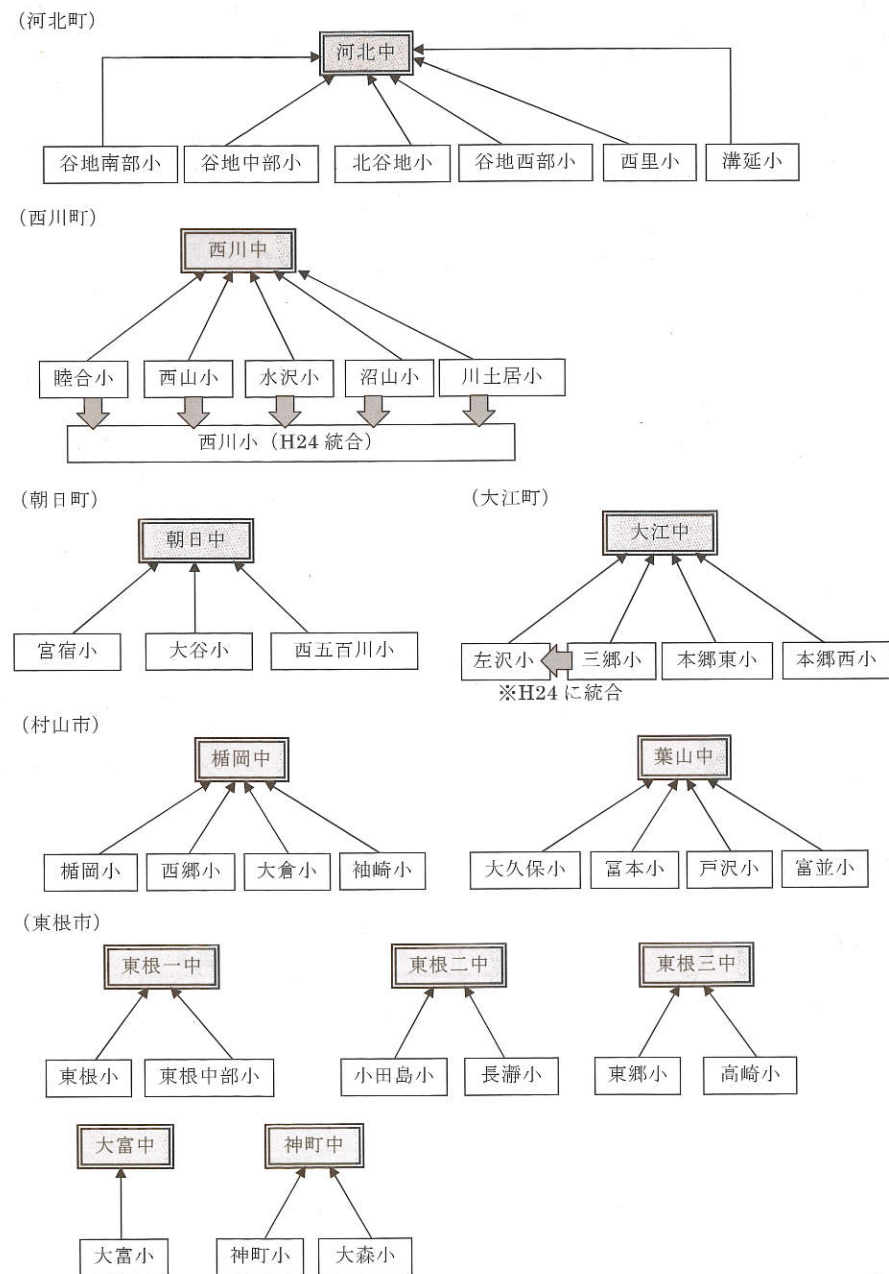
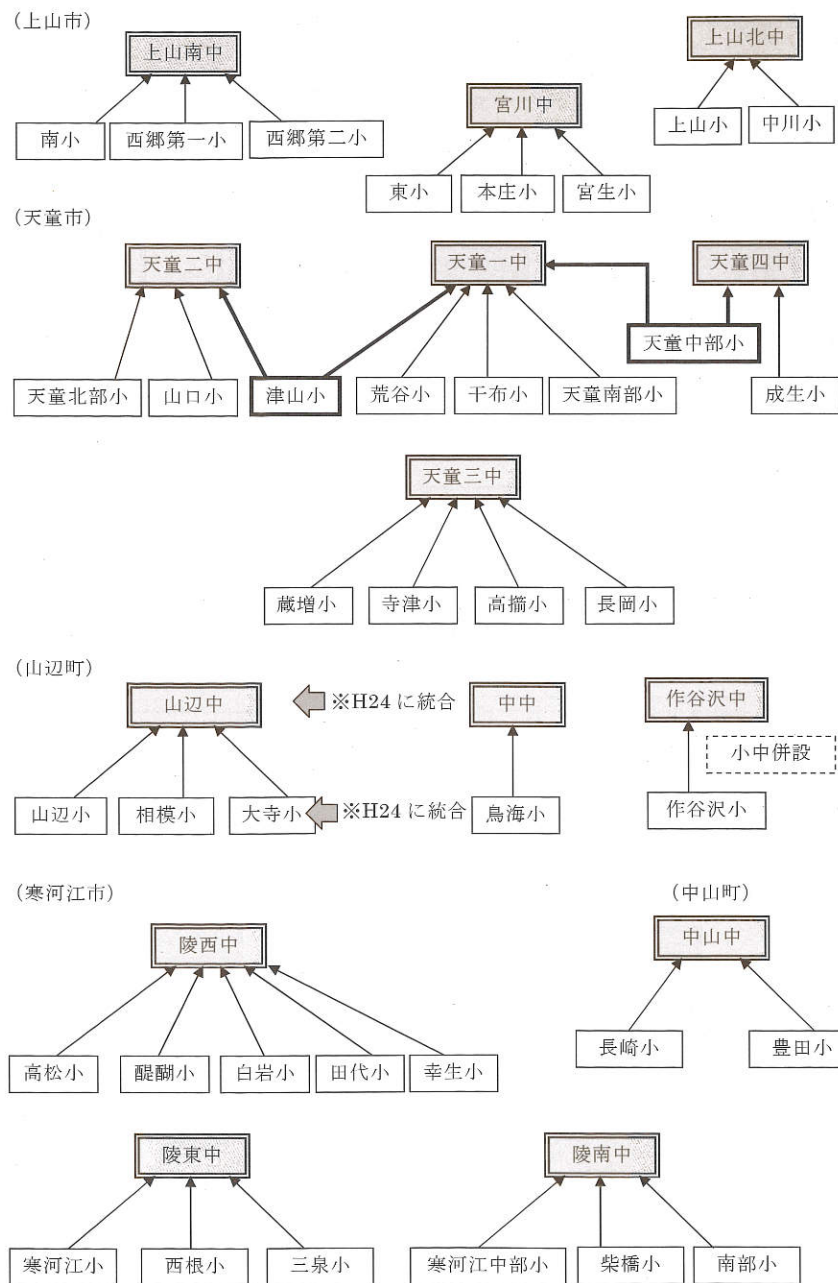


4 連携関連図

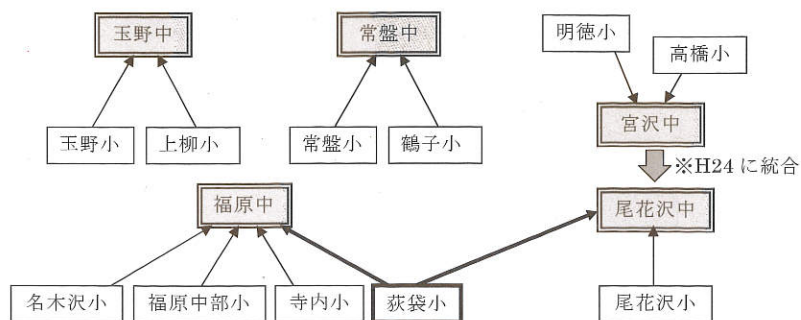
【村山地区】

(山形市)

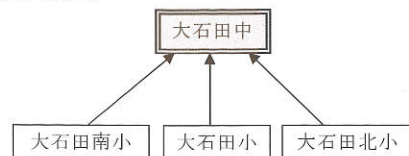




(尾花沢市)

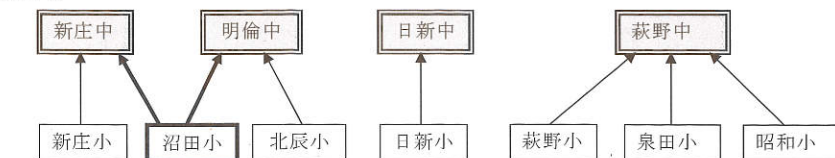


(大石田町)

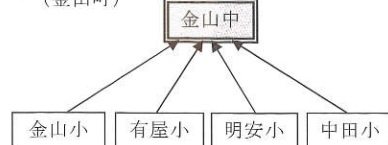


【最上地区】

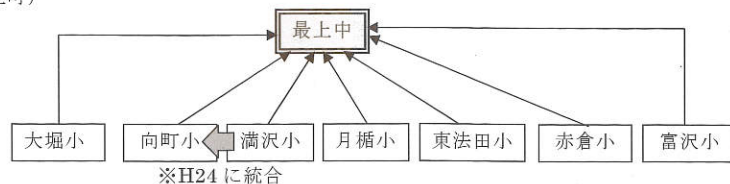
(新庄市)



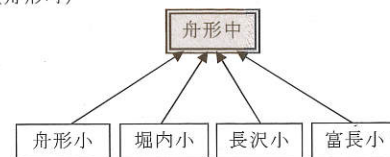
(金山町)



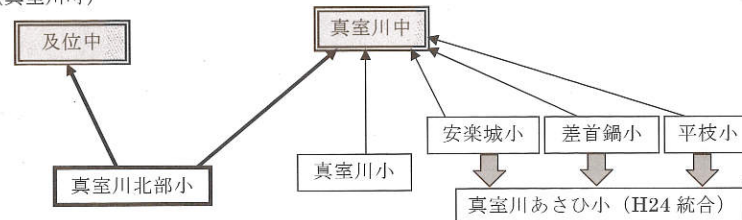
(最上町)



(舟形町)



(真室川町)



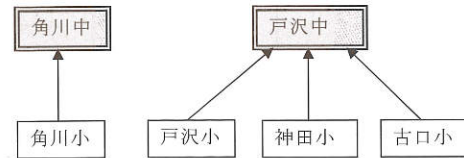
(大蔵村)



(鮭川村)

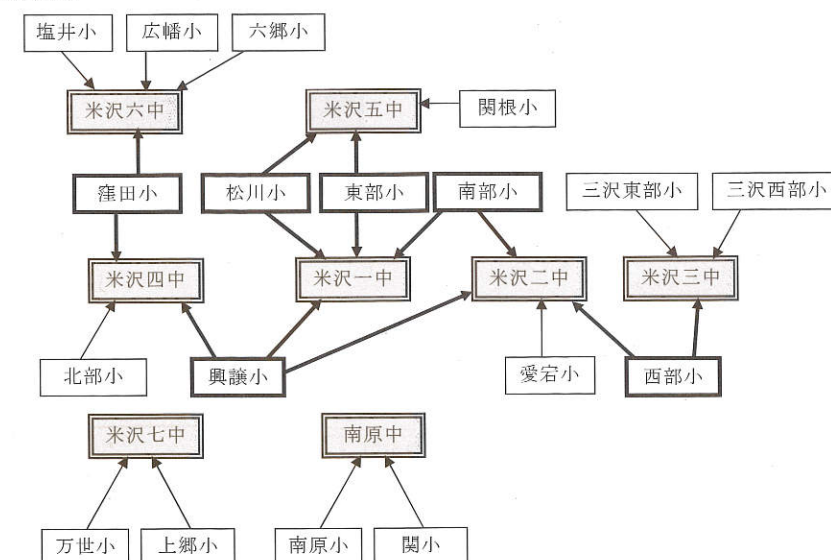


(戸沢村)

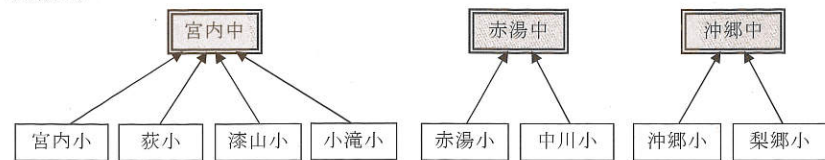


【置賜地区】

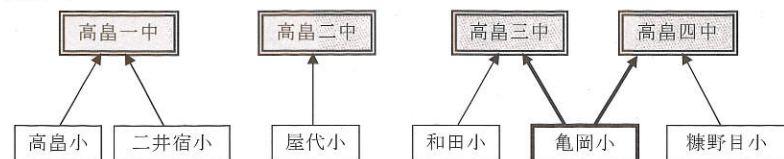
(米沢市)



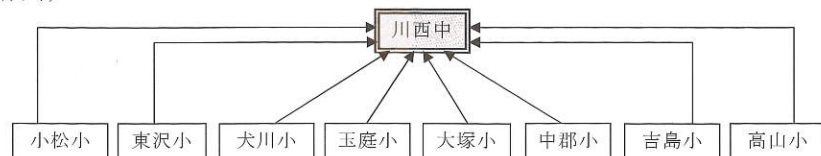
(南陽市)



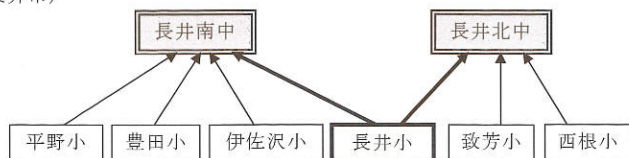
(高島町)



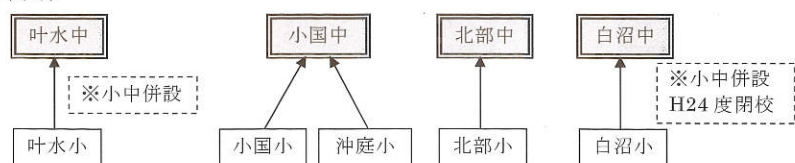
(川西町)



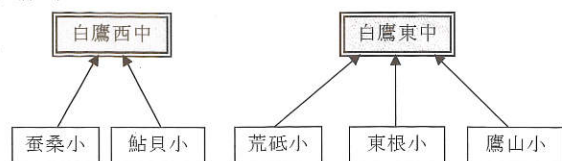
(長井市)



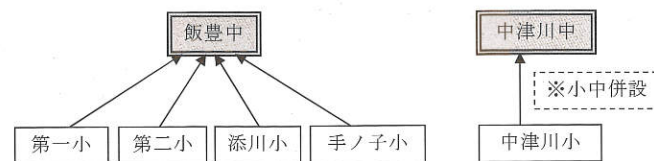
(小国町)



(白鷹町)

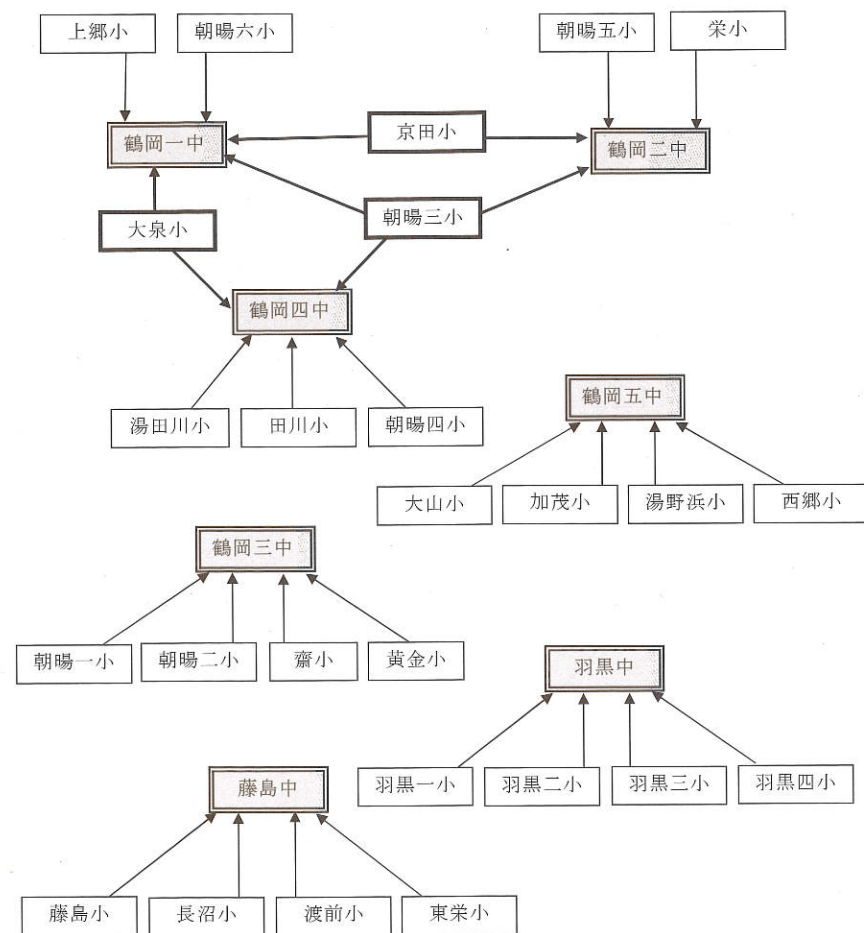


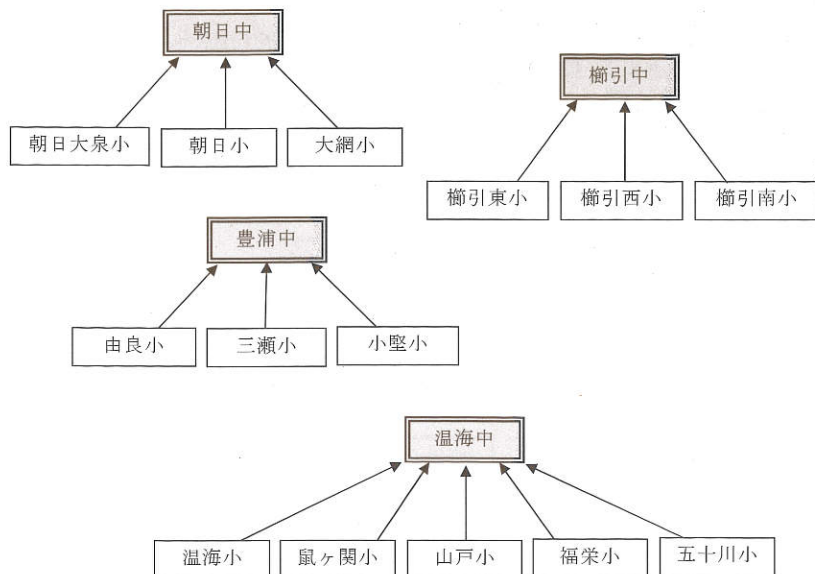
(飯豊町)



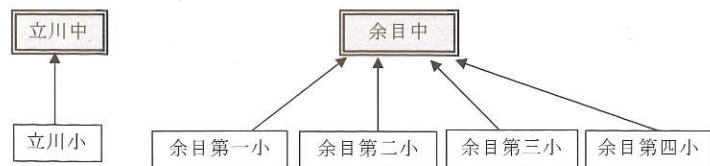
【庄内地区】

(鶴岡市)

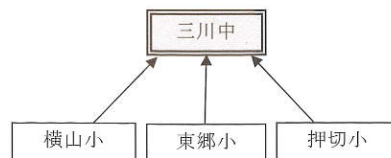




(庄内町)



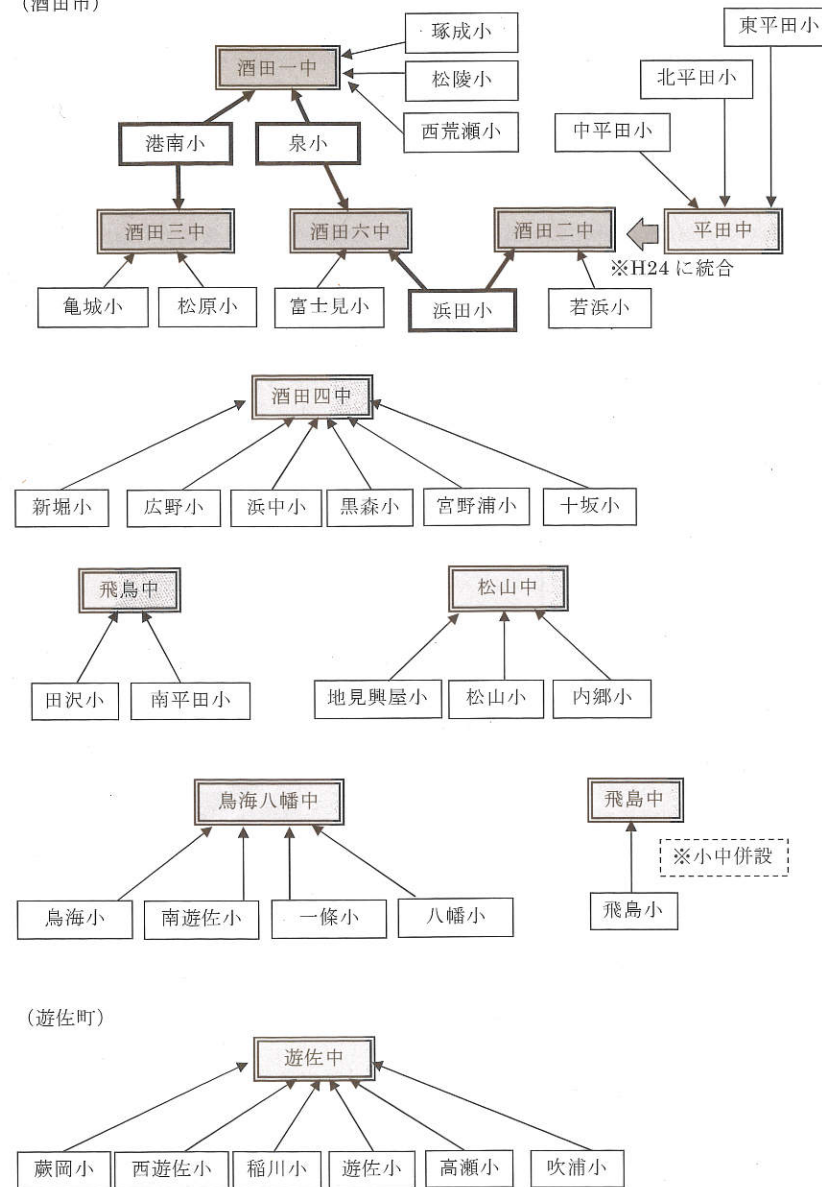
(三川町)



(連携相關図について)

- ・連携相關図は調査アンケートの基礎データをもとに作成
- ・学区外通学等は除く

(酒田市)



(遊佐町)

第3章 アンケートの分析（現状と課題）

第2章において、児童生徒の実態に応じて、多くの中学校区で様々な小中連携の取組が行われていることがわかった。また、各学校がそれらの取組に一定の評価をしつつ、「さらによりよいものをめざしていきたい。」という強い思いをもっていることから、小中連携による児童生徒への指導が有効であることに改めて気付かされた。

各学校から回答いただいたアンケートを分析したところ、取組内容については、「まなび」「そだち」「そしき」という視点で、また取組方法については、「共有」「交流」「一貫」という視点で分類することができた。（それぞれの分類については後述。）これらは、アンケートから読み取れる範囲で分類し、1つの取組に内容や方法が複数含まれる場合は、それぞれ分けて集計するなどして、回答の趣旨から大きく離れないようにした。

1 特色ある小中連携の取組内容の分類

アンケート質問5「特色ある（主な）小中連携の取組」の回答として、紹介いただいた具体的な取組の名称や内容を「学習指導」「生徒指導」「保健安全指導」「進路指導」「その他」に分類した結果は、**図1**のとおりである。

それらをもとに、児童生徒の「まなび」に関する取組、「そだち」に関する取組、「その他」の取組と、大きく3つに分類した。

（1）「まなび」に関する取組

- 小中連携の特色ある取組として「まなび」に関する内容が、全体の1/3以上を占め、中学校教員による小学6年生への出前授業が県内各地で行われていることがわかった。

（2）「そだち」に関する取組

- 生徒指導に関することや保健安全指導に関すること、進路指導に関することを合わせた児童生徒の「そだち」に関する内容が全体の55%となり、小中連携の取組の半数を超えている。これらには、小学6年生による中学校への1日体験入学や小中合同のあいさつ運動、養護教諭部会での情報交換等が含まれる。

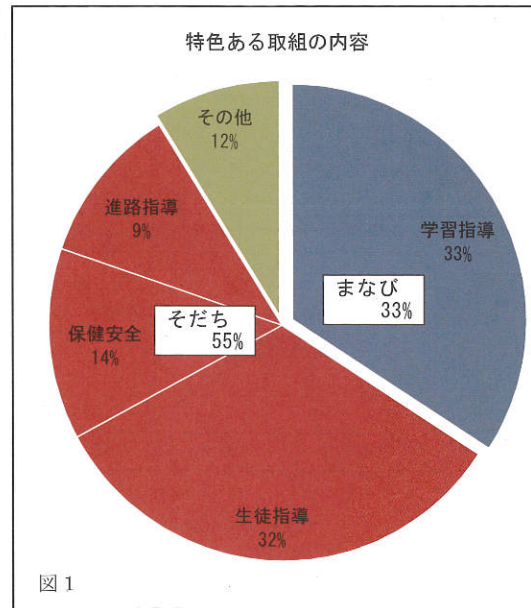


図1

2 特色ある小中連携の取組方法の分類

アンケート質問5の「特色ある（主な）小中連携の取組」の回答をもとに、次のような視点でその実施方法を「共有」「交流」「一貫」の3つに分類した。

（1）「共有」を主とした取組

- 児童生徒の情報の共有や、学習指導における児童生徒の実態や指導方法の共通理解をめざした、教職員間や保護者、地域における取組。
- 小中連絡会等の組織を活用した児童生徒の情報交換や、授業研究会への参加等による学校間での共有の他、地域懇談会のような教職員と保護者、地域による情報交換等。

（2）「交流」を主とした取組

- 児童生徒による協働や、教師による児童生徒への指導等、児童生徒を介した直接的なかわりをもった取組。
- 中学校教師による出前授業のような教職員が直接児童に指導する取組や、小学生と中学生が合同で取り組むボランティア活動やあいさつ運動等、子ども同士の交流を含んだ取組等。
- ※ いずれの場合も活動を仕組む上で、小中学校の教職員による事前の打ち合わせ等を要する取組であるため、「共有」の目的を経て実践されている。

（3）「一貫」を主とした取組

- 発達段階を見通して、地域の子どもの小中学校双方が乗り合いで育てることをめざした取組。
- 小中学校の協働によって教育目標や指導内容が、小中学校双方のカリキュラムに位置付けられている教育活動や、PDCAサイクルを生かした学校行事や総合的な学習の時間における指導計画等。

（4）小中連携の取組方法による分類結果

- アンケートの回答を「共有」「交流」「一貫」の3つの方法にあてはめてみると、**図2**のような結果となった。
- 小中連携の特色ある取組は、「交流」の形が半数以上を占めている。以前から行われてきた新入生オリエンテーションにおける小学6年生への指導の他、中学校教員による出前授業が活発に行われている。
- 特色ある取組の4割は、児童生徒に関する情報の「共有」をめざした取組となっているのがわかる。**図3**から、連携の規模が大きくなればなるほど、「共有」のための取組が大きな割合を占めていることがわかる。
- 「一貫」に分類される取組は、小中併設校や校地が隣接しているなど、連携の規模や学校の規模、取組にかかる時間等と関連していると思われる。

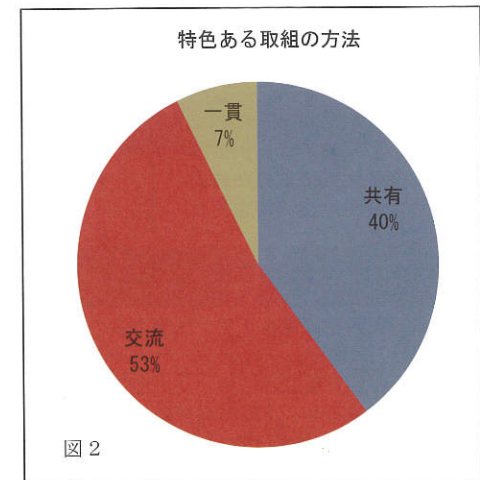
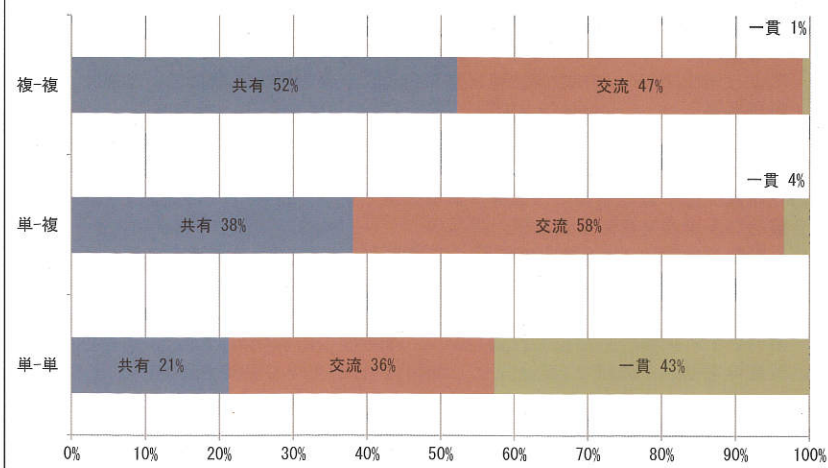


図2

図3 連携の規模にみる特色ある取組の方法



3 取組の内容と方法との関連

(1)「まなび」に関する取組でめざすもの

- 図4から、「まなび」に関する取組の半数が、「共有」をめざした取組となっている。これには、中学校区の全教職員が所属する組織で企画される公開研究会への参加や授業参観が含まれている。
- 「まなび」に関する取組の4割以上は、「交流」をめざした取組となっている。これには、出前授業や特別支援学級在籍児童生徒間の交流が含まれている。
- 小学校における外国語活動の実施に伴い、中学校の英語教員やALTの派遣が多くなっており、継続的に取り組んでいるところもみられる。
- 小学校の統廃合に伴い、小中学校合同のカリキュラム作成に取り組んでいる中学校区があり、市町村教育委員会としての取組で「一貫」に向かっているところもある。
- 小中学校乗り合いで、児童生徒につけたい力や学習に係る約束を明らかにして、発達段階に応じて小中が一貫した指導を行っている取組が8%ある。

「まなび」に関する取組の方法

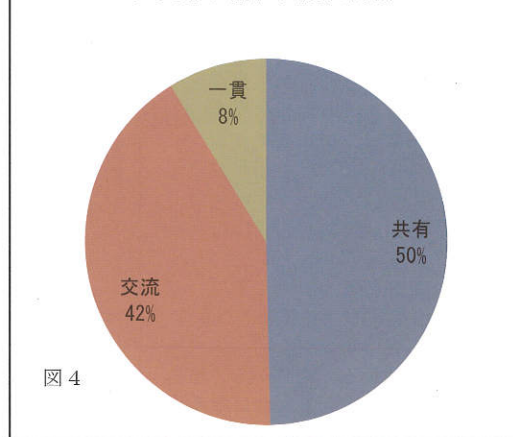


図4

(2)「そだち」に関する取組でめざすもの

- 図5から、児童生徒の「そだち」に関する取組は、「交流」「一貫」の形で行われているものが過半数に上り、教師間の情報交換に加えて、子ども同士の交流が盛んに行われていることがわかる。
- 既存の養護教諭同士のネットワークを生かして、中学校区の児童生徒の健康面に関する情報の共有から課題を明らかにし、PTAを巻きこんでの取組に発展させているところがある。
- 教職員の取組だけでなく、中学校区のPTA役員で実行委員会を結成して、各小学校の6年生の交流を実施し、小学校同士の連携を強めているところがある。
- 東日本大震災を契機に、小中各学校にあった非常時の安全確保の手立てを共有し束ねるといった、安全面での取組を実施しているところがある。

「そだち」に関する取組の方法

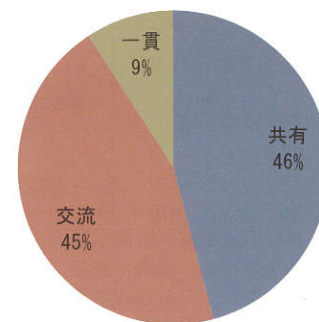


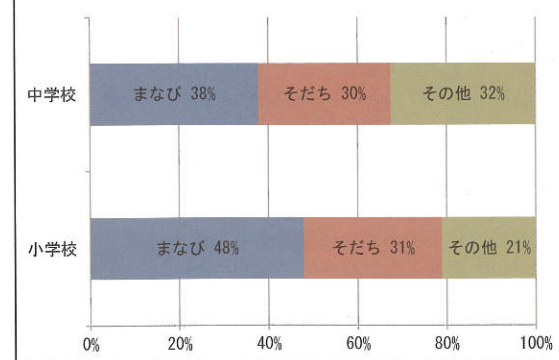
図5

4 小中連携で充実させたい取組内容と方法

(1) 校種別に見る充実させたい取組内容

- アンケート質問7「今後新たに必要である(または充実させていく必要がある)」と考えている小中連携の取組の重点」についての回答を、「まなび」「そだち」「その他」の3つに分類し、図6のように校種別にまとめた。
- 小中学校ともに、「まなび」に関する取組を最も充実させたいと考えているが、割合では小中学校に10%以上の差がある。
- 「そだち」に関する取組については、小中学校ともに、3割以上が「充実させたい」と回答している。

図6 小中連携で充実させたい指導内容



(2) 校種別に見る充実させたい取組方法

- 図7から、小中学校は、ともに充実させたい取組の方向性を「共有」に置いていることがわかる。

- 中1ギャップといわれる中学校への不適応を解消するために、小学校が中学校に子どもの情報を伝達したいという思いと中学校が小学校からの情報をもとに今後の指導を考えていこうとする思いが合致していることから、「共有」をめざす取組の充実を希望しているとともに、その継続と発展をめざしていると考えられる。

(3) 小中学校の意識

- 図6からわかるとおり、小学校の充実させたい小中連携の取組の重点の約半数近くが「まなび」に関するものであるのに対し、中学校が小学校との連携で充実させたい内容は、分類上およそ3つの項目とも約3割になっており、差異がみられない。
- アンケート質問7や質問8の記述内容から、小学校では、外国語活動をはじめ、音楽、美術、体育等の教科の専門性を生かした指導を児童にしていきたいという思いや期待をもっている。そのため、図7からわかるとおり、「交流」「一貫」の取組を求める割合が3割を超えていると考えられる。
- 中学校では、特別支援教育に関することや生徒の家庭生活に関することなど、生徒の実態によって求める連携の取組が異なり、小学校より多岐にわたっている。小学校がもっている情報を共有し、指導に生かすという視点で小中連携をとらえる割合が高いと考えられる。

5 考察のまとめ

(1) 連携の視点の移行

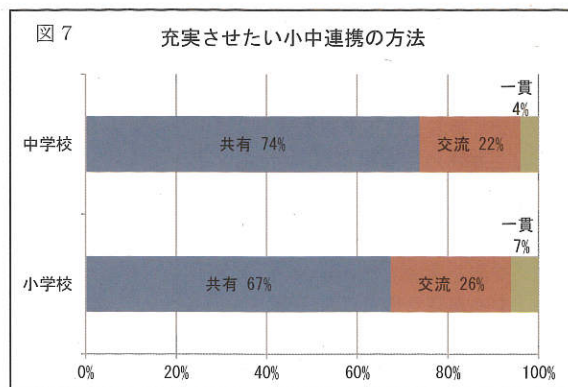
- 図1と図6から、小中連携の今後の視点が、「そだち」に関するものから「まなび」に関するものへ移行しているように感じられる。児童生徒の学力向上をめざす上で、小中学校双方による分析と手立てを考え合うこと、つまり情報や考え方を共有することで課題解決を図ろうとしていると思われる。

(2) 既存の取組の充実と発展

- これまでの小中連携による取組の成果をふまえ、教育課程上の位置付けと実施の方法を工夫しながら、取組の更なる充実と発展をめざすために必要な視点を、小中学校双方が模索しているように感じられる。

(3) 「そしき」という小中連携の取組の視点

- アンケート質問3や質問4の記述内容から、効果的で、円滑な小中連携をめざす上で大きな働きをしているのが、連携組織の確立であることがわかった。「まなび」「そだち」の取組を動かす「そしき」という視点でも小中連携をとらえていく必要がある。



第4章 実践事例の紹介

県内の特色ある小中連携の実践を「まなび」「そだち」「そしき」に分類して紹介する。

まなび

- ・酒田市立第四中学校区「外国語活動出前授業の取組」…………… 28
- ・庄内町立立川中学校区「立川スタンダードの取組」…………… 32
- ・新庄市立明倫中学校区「小中9年間を見据えたカリキュラムの創造」…………… 36
- ・新庄市立八向中学校区「小中9年間を見通したキャリア教育の取組」…………… 40
- ・山形市立高橋中学校区「特別支援合同音楽療法」…………… 44
- ・高島町立第三中学校区「家庭学習の手引き、食育、全体交流等による連携」…………… 45

そだち

- ・村山市立葉山中学校区「葉山中学校区子ども交流事業」…………… 47
- ・鶴岡市立鶴岡第一中学校区 朝陽第三小学校「三陽しぐさの取組」…………… 51
- ・新庄市立明倫中学校区「児童生徒間交流」…………… 54
- ・河北町立河北中学校区「河北中NAVI」…………… 56
- ・新庄市立日新中学校区「生活リズム調査と合同リーダー研修会」…………… 58
- ・寒河江市立陵南中学校区「みんなの5(GO)5(GO)目標」…………… 60
- ・山形市立第十中学校区「養護教諭同士の連携と特別支援教育における連携」…………… 62
- ・最上町立最上中学校区「最上こどもサミット」…………… 64
- ・山辺町立作谷沢小・中学校「小規模小中併設校の取組」…………… 66
- ・長井市立長井北・長井南中学校区「中1ギャップの未然防止に向けた取組」…………… 69

そしき

- ・新庄市教育委員会「新庄市における小中一貫教育の推進」…………… 71
- ・新庄市立新庄中学校区「たくましく生き抜く力を育む小中一貫教育の推進」…………… 73
- ・高島町立第一中学校区「緊急時の児童生徒の安全確保のための体制づくり」…………… 76
- ・鶴岡市立豊浦中学校区「豊浦地区ブロック小中連携の組織と事業」…………… 80
- ・山形市立第八中学校区「西山会の取組」…………… 82
- ・中山町立中山中学校区「校長会・教頭会を核にした小中連携の取組」…………… 84

【実践事例に使われている用語や記号について】

○連携の取組方法の分類について

共有 交流 一貫 ※実践事例が該当するものに色がついている。

○連携の規模について

＜単一単連携＞… 1つの中学校に1つの小学校から進学する
 ＜単一複連携＞… 1つの中学校に複数の小学校から進学する
 ＜複一複連携＞… 複数の中学校に複数の小学校から進学する（学区が交差する）

○学校基礎データについて

生徒数、学級数については「山形県学校名鑑」（H24版）のデータを参照

酒田市立第四中学校区

「外国語活動出前授業の取組」

～川南地区小中連携のさらなる推進をめざして～

■ はじめに

平成24年度に創立55周年を迎えた酒田市立第四中学校は、酒田市の川南地区唯一の中学校であり、規模の異なる6つの小学校から進学してくる。庄内平野を一望し、最上川や京田川が流れる自然豊かな環境の中、以前から川南地区小中連携を進めてきた。

小学校での教科の専門性の活用と、中学校の生徒理解に役立てたいという思いが合致したため、6月に、川南地区小中一貫教育推進会議の外国語活動・英語担当者情報交換会を中学校会場で開催し、前年度から出前授業を年間3回実施することを確認した。

■ 出前授業を支える中学校の体制

○ 中学校英語教諭5名一人一人に通年の担当小学校がある。

○ 外国語活動の授業における中学校教諭の役割を右のように段階的に増やしていく授業構成を計画し、子どもたちの英語に対する興味・関心を高め、中学校での学習への不安を取り除けるように配慮している。

- ここに注目！
- * 1学期：外国語活動T T
(小：メイン・指導案作成、中：サブ)
 - * 2学期：外国語活動T T
(中：メイン、小：サブ・指導案作成)
 - * 3学期：外国語活動T T
(中：メイン・指導案作成、小：サブ)

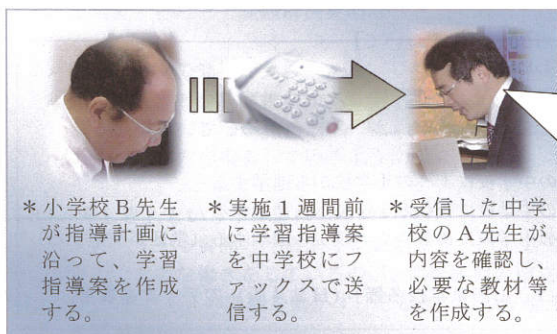
■ 出前授業の様子

○ 授業を実施するまで

・ 6つの小学校の外国語連携担当である教務主任が実施日を調整し、中学校と打ち合わせをする。

中学校教諭の移動時間等を考慮し、授業時間を午後に設定して、移動時間を確保し、中学校の授業に支障のないようにしている。

- ・ 中学校の英語教諭の都合を確認して、実施日を確定する。
- ・ 指導に関する打ち合わせは下記の流れで行う。(2学期の例)



* 小学校B先生が指導計画に沿って、学習指導案を作成する。

* 実施1週間前に学習指導案を中学校にファックスで送信する。

* 受信した中学校のA先生が内容を確認し、必要な教材等を作成する。

ここに注目！
外国語活動の教材である『Hi, friends!』が中学校に準備されています。その他の仕事との兼ね合いを図りながら、いつでも必要な教材・教具を作ることができます。

○ 当日の学習指導案

H24.11.9(金)5校時

酒中46年

Lesson5 What time do you get up? ①

No.1

過程	児童	活動	留意点
1. あいさつ	Hello ~ Hello ~ How are you? I'm fine. And you?	中学校(T1) 小学校(T2)	
2. 1~60の歌	児童に1分間の歌を歌わせ、 (-teen, -tyのうたがいに気をつけさせる。)		
3. 今何時ですか?	Hi, friends! P22 Let's listen! 時計の針で数字を言う。 ① It's 11:15 ② It's 10:45 ③ It's 6:22 「今何時ですか?」→「何時〜分です。」のやりとりを練習する。 手本を見る (What time is it? - It's (何分時刻). 〈時計の針を動かす〉 What time is it? - It's (何分時刻). T1: What time is it? 全席で確認する C: It's (何分時刻) 1人ずつ答える		時計の針を動かす
4. 動作の模範に慣れる	Hi, friends! P22 Let's play! おはははは (兄弟が遊ぶ時や朝の目覚めの時に) ① 兄弟が遊ぶ時や朝の目覚めの時に ② おはははは (兄弟が遊ぶ時や朝の目覚めの時に) ③ おはははは (兄弟が遊ぶ時や朝の目覚めの時に)		おはははは
5. 何時に起きるのか?	何時? と動作を合わせた「今何時ですか?」のやりとりを練習する。 手本を見る (What time do you get up? - At six thirty. T1: What time do you get up? (go to school) (go to bed) 全席で確認する C: At ~. (何分時刻) 1人ずつ答える		At six thirty

過程	児童	活動	留意点
	Hi, friends! P23 Activity ① 兄弟が遊ぶ時や朝の目覚めの時に C: What time do you get up? (go to school) (go to bed) 全席で確認する T1: At ~. 兄弟が遊ぶ時や朝の目覚めの時に		
6. 3分おき	自己採点カードを書く。		
7. 終わりのあいさつ	Thank you. - Thank you.		

○ 1回目の出前授業との関連

- ・ 普段の外国語活動と変わらないように、2回とも『Hi, Friends!』を使用する。
- ・ 子どもたちの抵抗感や緊張感を和らげるために、学習の流れを前回と同じにする。
- ・ 中学校教諭の指示や指導を円滑にするために、前回は使用しなかったDVDを使用する。
- ・ 2回目の出前授業であるため、子どもたちが中学校教諭に慣れていると考え、課題文を2つにするなど、学習活動を増やす。

○ 授業当日の様子

* 13:00 中学校を出発



* 13:20 小学校に到着

ここに注目！

昼休みを利用して小学校への移動時間を確保しています。また、5校時目と6校時目の時間で、小学生に指導して帰校できるように、時間割を調整しています。それによって、放課後の部活動等の指導に影響が出ないように工夫しています。



* 13:23 早速の打ち合わせ



* 13:40
教室で機
材の確認

今日は、中学校の
A先生がメインで、
小学校のB先生がサ
ブに回ります。



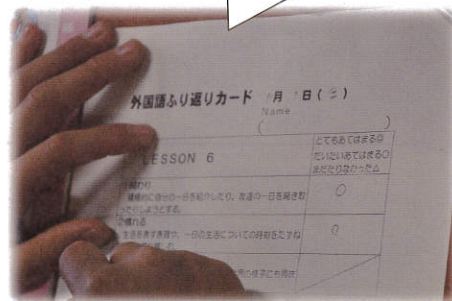
1学期の授業の経験か
ら、小学生の状況に合わせ
て指導しています。

授業の最後に振り返りカ
ードを記入させて、評価は
もちろん、A先生も今後の
指導に役立ちます。

小学生も2度目の授業
で、A先生にすっかり慣
れています。

○ 3回目の出前授業に向けて

- ・ どの単元で、どのような学習活動を設定するか、外国語活動の指導計画に沿って中学校のA先生と事前に打ち合わせする必要がある。
- ・ その打ち合わせをもとに、A先生が学習指導案を作成するため、中学校の英語の授業に近い学習活動が展開されると思われる。
- ・ 2回目の出前授業で明らかになった、活動量やキーセンテンスの設定などの課題を3回目の授業に生かしていく。



■ 取組を行って

○ 中学校A先生のお話から

- ・ 小学校にかかわることで、進学してくる子どもたちの状況を自分の目で見ることができ、入学後、出前授業で知り得た情報を活用できている。
- ・ 小学校での外国語活動がどのような教材で、どのような学習スタイルで展開されているかを把握することができ、小学校の学習経験をもとにして中学校の英語への導入を円滑に図ることができる。



○ 小学校B先生のお話から



- ・ 中学校から始まる教科をALTではなく、中学校の先生から直接学ぶことで、英語だけでなく、中学校の授業に触れるという感覚も味わうことができるため、子どもたちの頑張りが更に引き出される。
- ・ 3回ともA先生から学ぶことで、子どもたちが親しみをもって学習することができ、四中訪問（新入生オリエンテーション）の感想で、「A先生が中学校にいてとても安心した。」という声が聞かれた。

■ まとめ

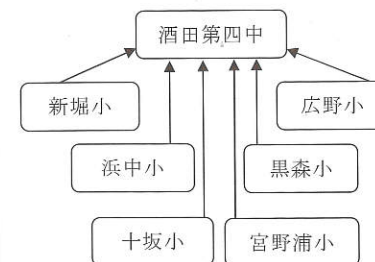
出前授業は、外国語活動の指導を英語の専門性の高い中学校教諭に依頼したい小学校の思いに、中学校が応えたものである。しかし酒田市立第四中学校区では、それを複数回実施することで、新入生への理解の深まりという、中学校にとっても価値のある取組としていくところに、連携への積極性を感じた。

また、6年生に、中学校で経験する小中の学びの違いを1年間かけて3回の出前授業に分散させて、段階的に感じさせることができる。それを小中学校が連携して創出することが、子どもの実態に寄り添った学びを提供することにつながる感じた。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
酒田市立第四中学校	563名（20学級）
酒田市立新堀小学校	127名（6学級）
酒田市立広野小学校	113名（6学級）
酒田市立浜中小学校	116名（7学級）
酒田市立黒森小学校	51名（6学級）
酒田市立十坂小学校	281名（12学級）
酒田市立宮野浦小学校	382名（15学級）

<単一複連携>



庄内町立立川中学校区

「立川スタンダードの取組」

～小中のめざす姿を共有して学力アップ～

■ はじめに

庄内町立立川中学校区には、かつて立谷沢小、清川小、狩川小の3つの小学校があったが、平成21年に統合し、現在の立川小学校1校となることで、統合に向けた小学校間の連携の強化が必要であった。また統合後、小学校からそのまま全員が中学校に進学することになるとともに、小中学校ともに1学年2学級規模であることから、児童生徒の人間関係が9年間継続し、硬直化していくことも危惧された。

そこで平成20年に、小中学校が連携して教務関係や生徒指導、健康安全指導、特別支援教育に関することなどの多岐にわたる、「立川子ども」を育てる1つの指針が作られ、「立川スタンダード」(次ページ参照)と名付けられた。それに合わせて、小中学校全教職員が各部会に分かれて実践に取り組んでいる。本稿では、「立川スタンダード」を基に学習指導にかかわる取組を紹介する。

ここに注目！

■ 立川スタンダードを支える背景

○ 「立川教職員懇談会」の開催

この会は、年度始めの小中学校全教職員による年1回の顔合わせである。そこでは、互いの懇親を深めつつ、小中学校の児童生徒すべてが「地域の子」という意識を共有できる場となっている。小学校の教職員にとっては、「中学生(=卒業生)の姿を見ることで、6年間でつくれる力が明らかになる」場であり、中学校の教職員にとっては、「小学校の丁寧な指導の実践に取り組み、その良さを吸収できる」場として意義深い時間を共有することができる。

そうした小中学校の教職員の顔が見える交流から、お互いに何でも言える雰囲気醸成され、そこから様々な連携のアイデアが生まれている。

○ 庄内町教育委員会による「庄内町立小中学校 学びの連携」の提示

庄内町教育委員会は、連携のねらいを「地域、家庭、学校が連携し、『庄内町らしい子ども』を育てよう」と「9年間を見通した望ましい習慣や態度を身につけさせよう」の2つを設定し、小中学校に提示している。

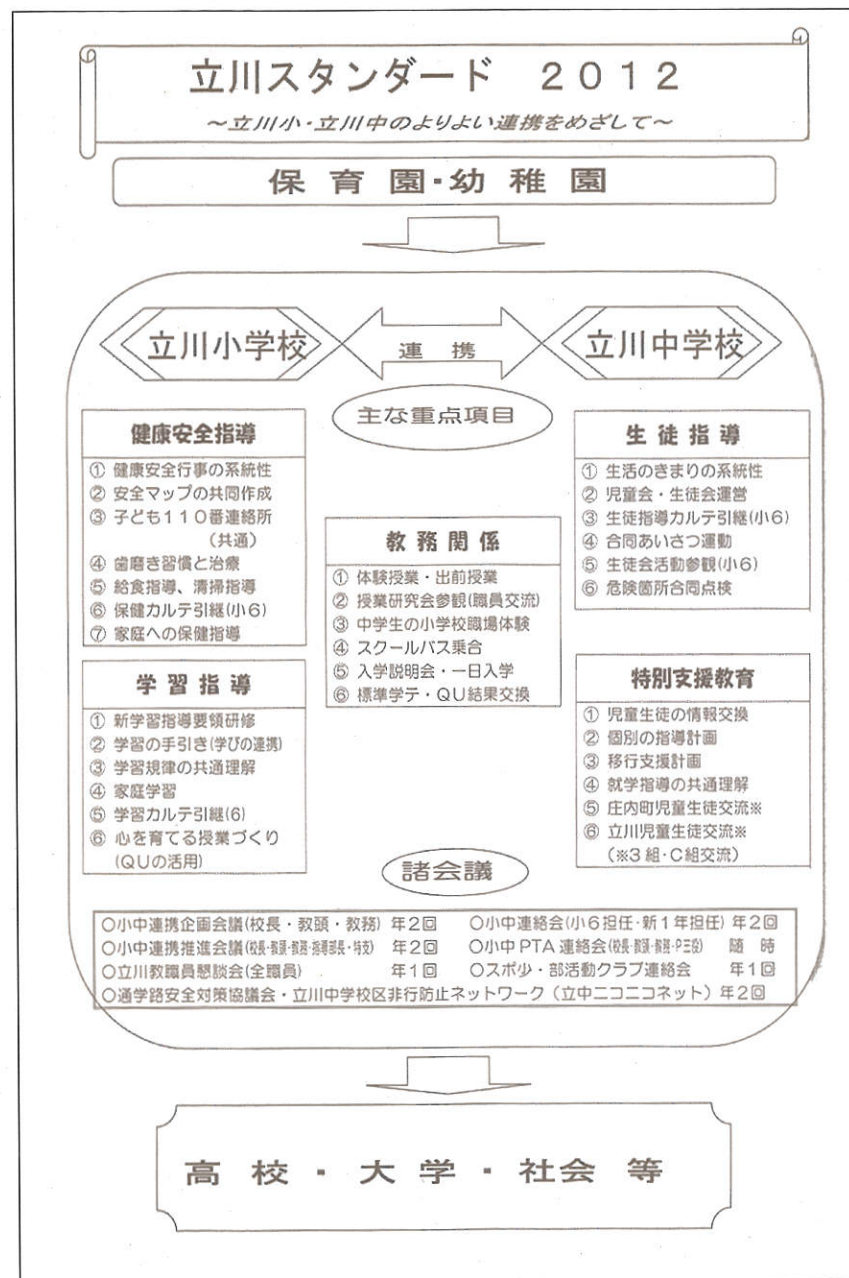
そして、取組の視点を「学習習慣・態度」と「生活習慣・態度」の2つに分けて、それぞれに具体的な行動目標が明記されている。例えば、「学習習慣・態度」の視点においては、右のとおりである。

小中学校ともに、「学びの連携」に掲げられた具体的な行動目標の成果や課題等を教師がもち寄って話し合うため、それぞれがめざす方向性を焦点化しやすくなる。

「学習習慣・態度」の視点

- 1 話を最後まで聞く力と態度を身につける。
- 2 家庭学習の定着を図り、課題に対して最後まで取り組む。
- 3 物を大切にし、身の周りや学校用具の整理整頓をすることができる。
- 4 忘れ物をしない。
- 5 文字は丁寧に、時間内に書く。

○ 立川スタンダード全体図

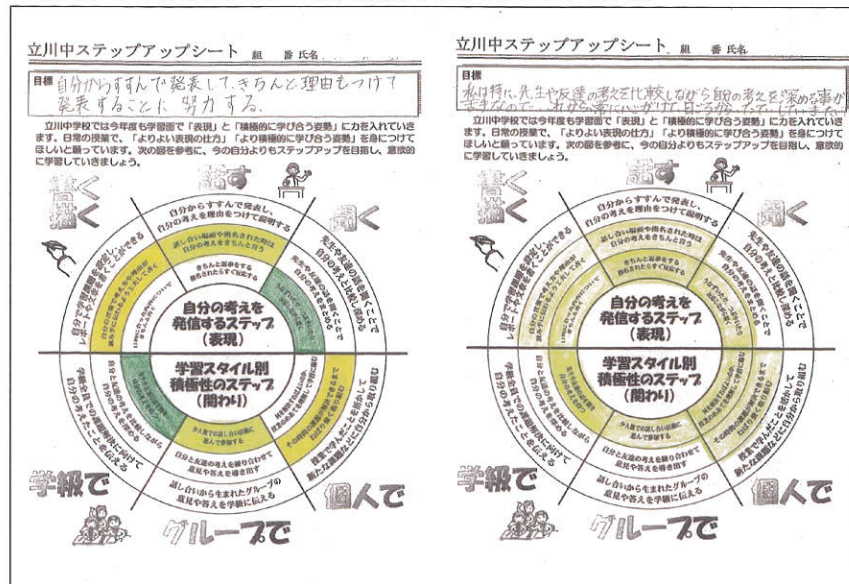


■ 「立川スタンダード」にもとづいた実践例

○ 「立川中ステップアップシート」の小学校での活用

中学校で行われている学習面における重点である「表現」と「積極的に学び合う姿勢」は、小学校においても必要な力であり、教員の児童生徒への願いが小中学校とも合致している。

そこで、小学6年生でも中学校で活用しているステップアップシート（下図）に取り組んで、中学校での学習につなげる意識をもたせることができる。



○ 小中学校互いの必要感に応じた授業づくり

小学生が感じている中学校における学習の不安を取り除くとともに、中学校において伸ばしたい生徒の力を見越した小学校での指導の在り方を考えるために、小中学校互いが必要としている視点を授業の中に取り入れて指導している。

小学校から

立川小学校文化祭の5年生の音楽発表に向けての合唱練習に、中学校の音楽教員が指導者として関わっている。

はじめに、小学生が中学校の音楽室を訪ねて発声の基本等の指導を受けた。（写真1）

その1週間後に、中学校の教員が小学校の体育館に出向いて、前回指導したことの確認と本番を見据えて、合唱の完成度



写真1



写真2

を高める指導に指揮をとりながら関わっている。（写真2）

こうした指導によって、子どもたちの合唱がよりよいものになるとともに、中学校の音楽教員への親近感が湧くことにつながり、中学校の入学式での歌声にその成果が表れている。

中学校から

数学においては「分数の計算」をより正確にできたり、英語の表記に関しては「ヘボン式のローマ字」を習得していたりすることは、生徒が円滑に中学校の学習を進める上では大切なことである。そうした中学校教員の思いを受け、小学校の教員は、卒業していった子どもたちの具体的なつまづきを理解するとともに、日々の授業の振り返りを行いながら、小学生への指導を改善している。

ここに注目！

■ 取組を行って

○ 子どもの姿から

- ・ 中学校の生徒の学びへの意識が高く、学習を楽しんでいる姿が見られる。
- ・ 学力テスト等の結果から、子どもたちの学力の伸びが実感できる。

○ 教職員の姿から

- ・ 小中学校が隣接する立地条件の良さに加えて、教職員が顔の見える交流によって心理的な距離も縮めることで、児童生徒の姿で教育活動を語れるようになり、お互いの良さを理解し合える。
- ・ 小中連携の目的を、「小中学校の間にあるギャップの解消ではあるものの、すべてを除くのではなく残してもよいギャップがあるべきで、解消すべきは悪いギャップである」と認識している。小中学校の教職員が様々なギャップの質を見抜いて、子どもへの指導に取り組むことができている。

■ まとめ

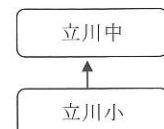
取材中、不登校が次第に減少していることをお聞きした。学習指導面での小中連携の取組が、子どもの変容を促し始め、他の教育課題の改善にまで波及することに改めて気付かされた。

このような成果を上げるには、継続した小中連携の取組が必要である。そのために、「教育課程に影響するほど取り組み過ぎない」と「日々の実践に沿ったものを小中連携に生かしていく」ことが大切な視点になると感じた。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
庄内町立立川中学校	176名（8学級）
庄内町立立川小学校	235名（11学級）

<単一単連携>



新庄市立明倫中学校区

「小中9年間を見据えたカリキュラムの創造」

～総合的な学習の時間における9年間を見据えたカリキュラムと
ふるさと貢献型奉仕活動～

■ はじめに

新庄市立明倫中学校には、隣接する新庄市立沼田小学校、約2km離れたところに位置する新庄市立北辰小学校の2校から進学してくる。平成23年度には、小中一貫教育シンポジウムの発表区校として、これまでの取組を発表し、現在も継続発展させている。こうした取組を推進していくための組織として、明倫中学校区小中連絡協議会を開催し、平成24年度は次のことをねらいに取り組んでいる。

9年間を見据えた小中一貫教育を念頭に、明倫学区の全教職員が相互の理解と交流を進め、子どもたちの課題解決に向けて各教育領域における一貫指導の在り方についての研修・研究・実践を深めることで基本目標の達成をめざす。

また、研究部会として、「校内研究に関する部会」「総合的な学習・キャリア教育に関する部会」「心の育みに関する部会」「様々な課題を抱えた児童生徒への支援に関する部会」「家庭との連携に関する部会」「学校事務の効率化に関する部会」の6部会を設定し、小中一貫教育の在り方を追究している。

■ 明倫学区「総合学習マスタープラン」(次頁を参照)

<以下、明倫学区「総合マスタープラン」より抜粋>

○ めざす子どもの姿

将来に夢を持って、意欲的に学習、生活する生徒の育成

○ 小中連携・一貫をめざしたときに...

- ・ 小学校におけるキャリア教育、情報リテラシーの在り方(計画と指導)
具体的には、望ましい勤労観と職業観の形成と将来設計能力の育成
- ・ 小学校中学年におけるまちづくり学習の高学年及び中学校での活かし方
- ・ 中学校における環境教育の活かし方
- ・ 小中共通の評価の観点と評価規準、そして評価実践

○ 「地域貢献型プロジェクト研究」の概要

小学校時代の環境教育やふるさと学習、農業体験での学習成果を土台に、中学2年生での地域貢献型奉仕活動の視点を発展させ、地域の各領域における諸課題を自ら発見し、その解決方法を探究、研究させることにより、中学生であっても、地域を変えられる、地域を活性化させられる、そんな気構えをもたせたい。(後略)

ここに
注目!

総合的な学習の時間において、めざす子どもの姿を共有し、9年間の子どもの育ちを見通した取組を行っています。

小学校における取組を生かして、中学校ではそれをどのように活用していくのかを考え、プランを作成しています。さらに、キャリア教育やふるさと学習などの視点から、9年間をつなぐ活動を創造しようとしています。

明倫学区「総合学習マスタープラン」

将来に夢を持って、意欲的に学習、生活する生徒の育成

領域	4-3	4-4	4-5	4-6	中1	中2	中3	
沼田小	つたいたち 情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間
明倫中	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間
北辰小	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間	情報処理 環境観察 環境観察 環境観察 ふるさと キャリア 時間

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。旧学習指導要領の適用範囲は、このように変更される。

※ 新学習指導要領の発布に伴い、旧学習指導要領の適用範囲が、このように変更される。旧学習指導要領の

■ ふるさと貢献型奉仕活動

中学2年生が、総合的な学習の時間において、「地域とつながる」をテーマに、ふるさと貢献ボランティアを企画し、小学6年生と中学1・3年生を巻き込みながら企画したボランティア活動を運営していく。

○ ねらい

【小学6年生、中学1・2・3年生】

「ふるさと」のためにできること、誰かの役に立つことについて考えるきっかけとする。

【中学2年生】

奉仕活動を通じて、リーダーとしての自覚と責任をもたせる。

○ 活動の実際

中学
2年生の活動

テーマの決定
※ どのようなボランティアを行うのかを検討。

調査
計画

“ブレ”-プレゼンテーション
※ 内容・方向性の吟味・検討。

プレゼンテーション

※ 沼田小、北辰小に向いて6年生にプレゼンテーションを行う。

※ 中学1年生と3年生にプレゼンテーションを行う。

ここに
注目！



小学6年生にプレゼンを行っています。



中学1年生、3年生にプレゼンを行っています。

中学2年生は、一緒に奉仕活動をしてくれる人たちが集まってくれるのかという緊張感の中でプレゼンテーションを行います。企画理由、活動場所、活動内容、募集人数、持ち物、こんな人に参加してほしいなど、自分たちの伝えたいことをしっかり伝えようとします。

また、そうした中学2年生の姿に小学6年生は憧れを感じ、中学3年生は自分の自分と重ね合わせながらアドバイスをしてくれま。

アクション
～ふるさと貢献型奉仕活動～

※ 中学2年生をリーダーにして、小学6年生、中学1・3年生と一緒に活動を行う。

振り返り

ここに
注目！

清掃活動や畑の草取りなど、地域の実態に合わせた活動を展開しています。



中学2年生のリードで活動を進めていきます。小学生、中学生といった縦のつながりができるだけではなく、地域の方々とのつながりも生まれてきます。

■ 取組を行って

- 9年間を見通した総合的な学習の時間のカリキュラムを創造したことによって、内容が精選され、めざす子どもの姿を共有しながら、活動を展開していくことが可能になった。
- 中学2年生は活動の達成感から自信をもち、小学生は、中学生への憧れを感じたり自分が中学校で行う活動の見通しをもったりすることができている。
- 小中連携での地域奉仕作業が定着してきたことで、地域の方々との結びつきがさらに深まってきた。

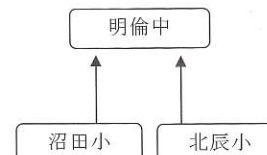
■ まとめ

取材を通して、小中学校それぞれの教育課程の特色を生かしていくことは、連携において大切な視点の1つになると考えた。9年間を通したカリキュラムをつくる過程で、小中学校それぞれがどのようなねらいで、どのような活動を行っているのかを確認し合い、中学校で、小学校での学習をどのように活用していくのかといった見方で、さらなる連携に取り組み始めている。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
新庄市立明倫中学校	295名（13学級）
新庄市立沼田小学校	403名（17学級）
新庄市立北辰小学校	131名（8学級）

<単一複連携>



新庄市立八向中学校区

「小中9年間を見通したキャリア教育の取組」

■ はじめに

新庄市立八向中学校には、新庄市立本合海小学校と新庄市立升形小学校の2つの小学校から進学してくる。新庄市の教育重点である「心の教育」を基盤として『八向の子は9年間で育てる』を合言葉に、三校交流会で研究と実践を重ね、望ましい小中一貫教育の在り方を探っている。特に平成24年度からは、3校で「仲間とともに学び合い、夢に向かって努力できる子どもの育成～協同的な学びとキャリア教育の取組を中心に～」を共通の研究テーマにした。また、運営については各部会をつくり、「学びづくり」部会において「協同的な学び」を、「自分づくり」部会において「キャリア教育」を推進していくように組織し、授業研究会等においても積極的に交流していくことにした。

■ 取組の背景と経過

平成22、23年度の三校交流会「自分づくり」部会において、「小中でキャリア教育のとらえ方が不統一である」「教師のキャリア教育に対する意識の違いが大きい」などの課題があげられ、キャリア教育に関する小中一貫カリキュラムの作成をめざして研究を行った。平成24、25年度は、市教育委員会委嘱小中一貫教育実践研究指定校となり、引き続きキャリア教育の小中一貫カリキュラムの見直しと実践に取り組んでいる。その中でも、特に、①互いに依存し合い高め合える人間関係づくり、②真剣に聴き合い安心して考えや感情のやりとりができるコミュニケーションづくり、③望ましい勤労観の育成の3点に3校共通で取り組み、実践をもち寄り協議している現状がある。

■ 新庄市立八向中学校のキャリア教育全体計画・小学校年間指導計画

○ 全体計画の中に小中連携の視点を位置付けている

- ・ 新庄市立本合海小学校と新庄市立升形小学校のキャリア教育の目標及び内容をふまえて、目標設定がなされている。
- ・ 小中学校9年間を通して、キャリア教育で身につけさせたい力が明記されている。

基礎的・汎用的能力評価の観点	人間関係・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応・課題解決能力	キャリアプランニング能力
	・ 他者理解、思いやり ・ 他者への信頼、感謝 ・ 相互に支え合う力 ・ コミュニケーション能力 ・ 集団での課題解決 ・ 社会貢献意欲 など	・ 肯定的自己理解 ・ 前向きに考える力 ・ 向上心 ・ 主体的行動と忍耐力 ・ 望ましい生活習慣 ・ ストレスの解消など	・ 情報の理解・選択・処理等 ・ 原因の理解 ・ 課題発見・課題設定 ・ 解決・達成への計画立案 ・ 実行力 ・ 評価・改善 など	・ 学ぶことの意義の理解 ・ 勤労観・職業観の獲得 ・ 多様な進路情報の理解 ・ 将来設計 ・ 進路選択 ・ 行動と改善 など

「人間関係・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応・課題解決能力」「キャリアプランニング能力」が、小学校各学年の年間指導計画にも位置付けられています。また、評価の観点を具体的に示すことで、より小中学校で身につけさせたい能力や態度が明確になっています。

平成24年度 八向中学校キャリア教育全体計画

生徒の実態	学校教育目標	関係法令等
素直で落ち着いた態度で学校生活を送っているが、やや主体性に欠ける	1 心身ともにたくましく、思いやりのある生徒を育てる 2 高い価値を意欲的に求め、力強く生きぬく生徒を育てる 3 自ら学び、行動する生徒を育てる。	憲法、教育基本法、学校教育法、学習指導要領、新庄市教育の重点

平成24年度 学校経営の重点

- 1 「いのち」の尊さを実感し、他を思いやる心や自尊感情をもち、生きる喜びを体験できる生徒を育てる。
- 2 「協同の学び」を取り入れた授業改善を推進し、仲間とともに支え合い高め合いながら学ぶことのできる生徒を育てる。
- 3 体験活動やキャリア教育を充実させ、「かかわり」の中で望ましい価値観を醸成するとともに、自らの進路を積極的に切り開いていこうとする生徒を育てる。
- 4 地域に開かれ、地域から信頼され、地域を元気にする学校づくりを推進する。

小中連携

本合海小並びに升形小のキャリア教育の目標及び内容

キャリア教育全体目標

- 1 自らの個性と良さを理解し、集団の中での役割を果たす経験を通し、自立し他と共に生きる態度を育てる。
- 2 毎日の学校生活、進路学習、体験学習、ボランティア活動などを通し、望ましい勤労観と職業観を育てる。
- 3 将来の夢や目標の実現に向けての計画を立案し、達成するために粘り強く努力する態度を育てる。

基礎的・汎用的能力評価の観点	人間関係・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応・課題解決能力	キャリアプランニング能力
	・ 他者理解、思いやり ・ 他者への信頼、感謝 ・ 相互に支え合う力 ・ コミュニケーション能力 ・ 集団での課題解決 ・ 社会貢献意欲 など	・ 肯定的自己理解 ・ 前向きに考える力 ・ 向上心 ・ 主体的行動と忍耐力 ・ 望ましい生活習慣 ・ ストレスの解消 など	・ 情報の理解・選択・処理等 ・ 原因の理解 ・ 課題発見・課題設定 ・ 解決・達成への計画立案 ・ 実行力 ・ 評価・改善 など	・ 学ぶことの意義の理解 ・ 勤労観・職業観の獲得 ・ 多様な進路情報の理解 ・ 将来設計 ・ 進路選択 ・ 行動と改善 など

	1年	2年	3年
学 年 目 標	1 自己と他者の個性を理解し、協力しあいながら生活できる。 2 身近な人の職業について学習し将来についての関心を高める。 3 集団の一員として、役割を理解し果たすことができる。 4 地域への関心をもち、貢献しようとする。	1 互いの立場に立った望ましい言動をとりよりよい人間関係を築くことができる。 2 働くことや学ぶことの意義を理解し、社会の一員として貢献しようとする自覚をもつ。 3 職業に就くまでの方法や上級学校について理解し、自己の適性をふまえた進路計画を立案することができる。 4 地域への理解を深め、貢献しようとする。	1 自己と他者の個性を尊重し、人間関係の向上とより良い集団づくりに貢献できる。 2 働くことの実験を体験し、健全な職業観を身に付ける。 3 様々な情報をもとに、将来を見通した進路を選択し、実現に向けて努力する態度を身に付ける。 4 地域への理解を深め、貢献しようとする。

主な学習活動（学活総合行事を中心に）	I 期	II 期	III 期
全 体	・ 中学生活のスタート ・ 学習と職業の理解 ・ ボランティアについて ・ 自分を知る、友達を知る ○ 神室宿泊学習 ・ 地域の一員 ・ 職業について ・ 働く人に聞く ○ 職場訪問 ・ 職業調べ ・ 10年後の自分	・ 学級生活の充実 ・ 学習と職業の意義 ・ 地域を知る ・ 働く人に聞く ○ 福祉体験学習 ・ 思いやりと人間関係 ・ 職業について考える ○ 修学旅行（企業訪問） ・ 進路情報の活用 ○ 福祉体験学習 ・ 社会に生きる一員として ・ 自己の適性について ・ 将来をデザインしよう ・ 1年後の自分を考える ○ 立志式	・ 中学3年生として ・ 学級生活の充実 ・ 地域の産業について ・ 中学校卒業後の進路 ・ 働くこと生きること ○ 職場体験学習 ○ 高校体験入学 ・ 中学卒業後の進路 ○ 修学旅行（企業訪問） ・ 進路希望先の調査 ・ 進路選択の準備 ・ 将来を見越した進路選択 ・ 自己の振り返りと将来への希望

・ 地域の歴史と文化を学ぶ（本合海エコロジー 9月） ・ 進路講話（年3回）
 ・ JRC加盟登録式（4月） ・ 畑の作物栽培と収穫（春から秋にかけて）
 ・ 生徒会活動や学校行事での生徒活動 ○ 両小学校との一貫性のあるキャリア教育を推進する

キャリア教育年間指導計画（キャリア教育で身につけたい能力との関連も含む）【本合海小 1年】

月	学校行事	生活科 総合的な学習 (体験)	学級活動	道徳・教科	キャリア教育で身につけ たい能力との関連			
					人間	自己	課題	キャ
4	始業式・入学式 1年生を迎える会 前期児童会総会 誕生会(*毎月)	・みんなでがっこう をあるこう ・こうてもたんけん しよう	・たのしみがっこう ・たのしいきゅうしゅく ・そうじをはじめよう	・あかるいこえで(国) ・どうぞよろしく(国) ・おはよう(道) ・あるひのきょうしつ(道) ・みんななかよし(道)	◎			
5	最上川デー 祖父母参観 運動会		・にっちよくとうばん にちゃれんじ ・はじめてのうんどう かい	・ふたりでおはなし(国) ・じぶんのできるよ(道) ・ふわふわことばちく ちくことば(道)	◎			
6	校外学習 陸上記録会 まとめテスト週間	・がっこうをたんけん しよう ・がっこうのひとと なかよくなろう	・かかりをきめよう ・校外学習事前学習	・わけをはなそう(国)				◎
7	神室宿泊学習	・がっこうでみつけ たことをはなそう ・つちやすなであそ ぼう ・みずであそぼう	・おれいのおてがみを かこう	・なんていったらいい のかな(国) ・かけるようになった(国) ・わたしのしごと(道) ・くまさんのなみだ(道) ・おしゃべりしましょう (道)	◎			
8	水泳記録会 まとめテスト週間		・おともだちのいいと ころみつけ		◎			
9	相撲大会	・むしをさがそう ・むしとなかよくな ろう	・1がっきのがんばり をふりかえって ・1がっきのこにこ しゅうかいをしよう	・おはなしきいて(国) ・でも、だあーいすき (道)			◎	
10	マラソン記録会 後期児童会総会 文化祭		・2がっきのめあてを たてよう ・2がっきはじめのか いをしよう	・らいおんのがっこう (道)		◎		
11	まとめテスト週間	・あきをさがそう ・はっぱやみであそ ぼう	・かかりをきめよう	・こころをこめてあり がとう(道) ・みんなかんばってい るね!(道)	◎			
12		・あきのおもちゃを つくろう ・みんなであそぼう		・つとむくんはやさし いんだよ(道) ・くり(道)	◎			
1	まとめテスト週間 書き初め大会	・いえのひとといっ しょにしよう ・じぶんのできるこ とをしよう	・あたらしいとしをむ かえて	・おみせやさんごっこ をしよう(国) ・いいおはけ(道) ・しゅわでうたおう (道)		◎		
2	スキー記録会 新入生一日入学	・ゆきやおりであ そぼう ・もうすぐ2ねんせい		・いっしょにやろうね (道)			◎	
3	6年生を送る会 卒業式		・1ねんをふりかえ て	・おばあさんのけが (道) ・きょうしつさん、あ りがとう(道)				◎

キャリア教育年間指導計画（キャリア教育で身につけたい能力との関係も含む）【升形小 6学年】
(一部抜粋)

月	学校行事	生活科 総合的な学習 (体験)	学級活動	道徳・各教科	キャリア教育で身につけ たい能力との関連			
					人間	自己	課題	キャ
4	始業式 入学式 1年生を迎える会 児童会総会	年間計画作り	◎学級組織作り 一年間のめあて 児童会総会に向け て	◎「1ー(2)理想、 勇気、努力」		◎		
5	運動会	自分たちで育 てよう	◎運動会に向けて いのちの学習①	「1ー(1)望ましい 生活習慣、思慮・節制」 生き物はつながりの 中に(国)	◎			
6	小体連陸上 いのちの週間①	◎地域の良さを 探ろう	小体連陸上に向け	「3ー(1)生命尊重」			◎	
7	養護学校との交流		◎修学旅行に向け	「1ー(6)個性の伸 長」 学級討論会をしよう (国)	◎			
8	水泳記録会		マラソン記録会 に向けて	「4ー(3)集団への 参加と責任」			◎	

■ 取組を行って

○ 人間関係づくり

3校ともに、異学年交流としての縦割り班活動が充実してきている。その中で、自己表現したり、自分の役割を自覚したりする子どもたちの姿がある。

○ コミュニケーションづくり

本合海小、升形小においても同じ考えのもとで取組を行うことで、小小連携も進んできている。また、普段の授業の中で互いの考えを聞き合う児童生徒の姿がある。

○ 勤労観

教科を通して地域の産業や農業にかかわっている方々と交流したり、企業訪問などに取組んだりする中で、徐々に自分の立場や役割を理解していくことができている。

■ まとめ

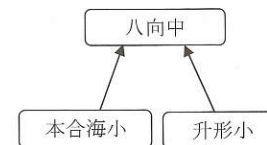
取材を通して、キャリア教育の年間指導計画を3校でそろえたことで9年間のつながりが明確になり、子どもの育ちについても見通すことができるようになっていと感じた。また、人間関係づくりの実践などでは、計画だけではなく、活動を通した子どもの姿も記録に残し、その成果を具体的に残していた。

「人間関係づくり」「コミュニケーションづくり」「勤労観」を視点にすることで、中学校では教科を越えて、また、小学校と中学校という校種を越えて、お互いの授業を検討し合える環境が整いつつあると感じた。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
新庄市立八向中学校	54名（5学級）
新庄市立本合海小学校	54名（6学級）
新庄市立升形小学校	47名（6学級）

<単一複連携>



山形市立高楯中学校区 「特別支援合同音楽療法」

■ はじめに

「高楯地区三校連絡会」は、高楯中学校区の小中学校の全教職員で組織されており、子どもたちのより良い成長をめざし、長年にわたり活動を行っている。ほぼ同じ規模の小学校2校から中学校に進学してくるので人数的な規模からも連携がしやすい環境である。

■ 特別支援合同音楽療法の実践

平成18年から実施されており、今年も3回の交流会を行っている。ねらいは、特別支援学級の子どもたちが音（音楽）を楽しみながら、心をひらいて交流を深めることにある。

この取組は、3学期（1～2月）に高楯中学校の特別支援学級で開催する音楽療法の時間に、小学生も合同で参加する形をとっている。もともと高楯中学校が単独で行っていたものに、小学校が参加するような形で始まり、現在も続いている。講師の工藤恭子先生は老人ホームなどでも活動している専門家で、交流会の時には毎回、子どもたちが喜ぶような、いろいろな楽器を準備してくる。



試行錯誤しながら、子どもたちに合わせた様々な活動を工藤先生が仕組んでくれています。
楽器をならしたり、音楽に合わせて体を動かしたりします。

■ 取組を行って

- 特別支援学級の子どもの中には音楽が好きな子が多く、楽しんでくれている。
- 音楽を通して、中学校を身近に感じているようで、毎年楽しみにしているようである。小学校の先生からの評価も良い。

■ まとめ

特別支援教育における小中連携に、音楽療法を取り入れることで、子どもたちが楽しみながら中学校という場所に慣れていくということが、この取組への取材を通してわかった。小学校から中学校への滑らかな接続を意識しながら、特別支援教育の活動としても成立している点が工夫されている。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
山形市立高楯中学校	216名（9学級）
山形市立高瀬小学校	188名（8学級）
山形市立楯山小学校	222名（10学級）

<単一複連携>



高島町立第三中学校区 「家庭学習の手引き、食育、全体交流会等による連携」

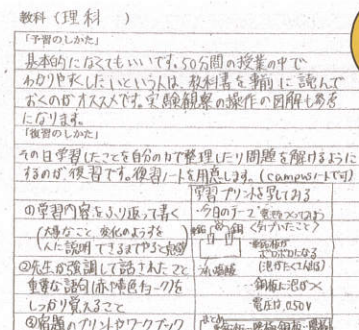
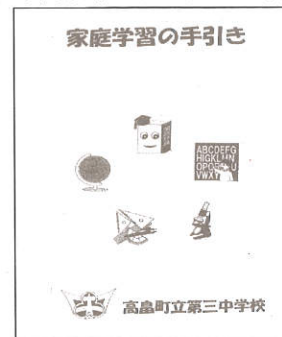
■ はじめに

平成28年度に町内の中学校が1校に統合されることが決まっている。高島町立第三中学校区では、高島三中、和田小、亀岡小の3校の校長、教頭、教務主任で構成する「三中校区連絡協議会」で連携の全体計画を審議し、9年間で子どもたちを育てていくという共通理解のもと、具体的な連携が行われている。

主なものは、生徒による「家庭学習の手引き」作成配付、「弁当の日」の実践、「みんなで育てよう地域の子」ポスター作成全戸配付、「三中校区全体交流会」の実施、「音楽・英語・体育等の出前授業」の実施等である。

■ 生徒がつくる「家庭学習の手引き」の実践

「中学校の勉強はどうやったらいいんだろう」という疑問に答える形で、高島三中の生徒が中心になり先生方のアドバイスを受けながら、「予習や復習の仕方」「ノートの取り方」「自主学習のまとめ方」などについて学習の手引きとしてまとめた。昨年度から小学校に配付し、さらに今年度は、これをもとに小学校でも手引きを作成する予定である。



ここに注目！

■ 食育「子どもがつくる弁当の日」の実践

三中校区連携事業の1つとして、子どもが弁当をつくって集い、会食を行った。また、中央講師を招いての講演会を行い、子どもの成長のために子ども、親、教師がどうかかわっていけばよいか、どんな変化が生まれるかを学んでいく実践を行った。高島三中を会場に、三中の生徒と保護者、和田小、亀岡小の5年生以上の親子が希望参加で行われた。食育を通して、親子の絆、地域の絆を育み、感謝の心と生きることの根源にかかわる考え方を学ぶ機会となった。

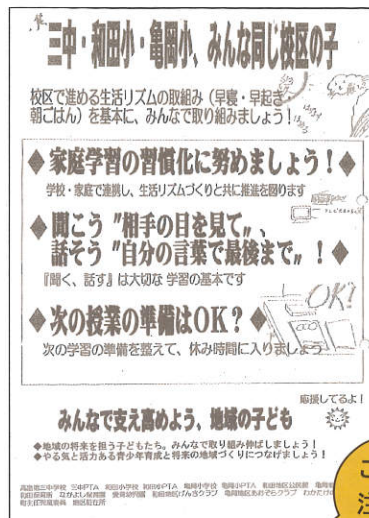
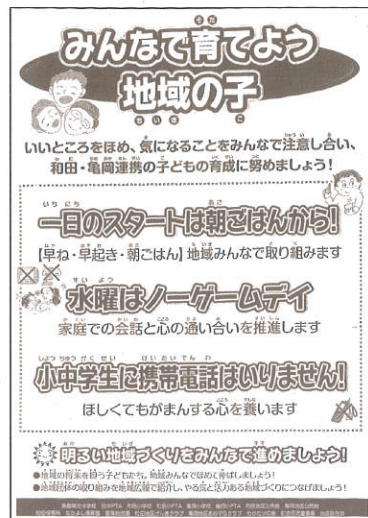
■ 「三中校区全体交流会」と「出前授業」の実践

「三中校区全体交流会」は、高島町立第三中学校区の3つの小中学校の教職員とPTAが授業参観と分科会を通して、子どもをどう育てていくか意見を交換しながら交流を深め、ともに育てる大人として共通の意識を醸成する場となっている。

また、出前授業では、音楽・英語・体育などを中心にしながら、高島三中の教員が小学校に出向き授業を行い、各小学校の6年生の心構えをつくるのに役立てている。

■ 「みんなで育てよう地域の子」ポスター作成・全戸配付の実践

三中学校区PTA懇談会は、学校・PTA・公民館・保育園・学童保育・わかたけの会・主任児童委員・地区駐在所などが構成員となって組織されている懇談会で、平成20年から毎年、その年毎に共通の教育目標を定め、「みんなで育てよう地域の子」のポスターを作成して全戸配付し、地域で子どもを育てる意識の啓蒙を続けている。



ここに
注目!

■ 取組を行って

- 全体交流会での授業参観、その後の研究協議、出前授業、校内研修会における講師派遣等の連携を通して、お互いの顔が見える関係を築きあげ、共通理解のもとに指導を行うことができるようになった。
- 小中連携が単なる話し合いに終わらず、具体的な活動がしっかりと位置付けられているので、反省を加えながら年々改善が図られてきている。
- 「家庭学習の習慣化」を小中学校が連携して進めるとともに、家庭の協力も呼びかけられているがまだまだ十分であるとはいえない。
- 生徒指導についての情報交換、連携強化を図っていきたい。

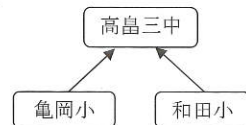
■ まとめ

既存の組織を活用して、保護者や教師同士の共通理解を深めながら、地域みんなで9年間の子どもの育ちを支えていこうとする着実な活動で小中連携が図られてきている。

□ 学校基礎データ (平成24年度)

学校名	児童生徒数(学級数)
高島町立第三中学校	141人(7学級)
高島町立和田小学校	177人(7学級)
高島町立亀岡小学校	88人(8学級)

<単一複連携>



共有

交流

一貫

そだち

村山市立葉山中学校区

「葉山中学校区子ども交流事業」

～進学前の児童同士のつながりをめざして～

■ はじめに

村山市では、少子化に伴い、最上川以西3校が平成16年に葉山中、以東3校が平成17年に楯岡中にそれぞれ統合され、現在は2つの中学校となっている。

統合がスムーズに行われるよう様々な取組がなされたが、その1つとして、それぞれの中学校区において、子ども会育成会が中心になり「子ども交流事業」が実施された。同じ中学校に進学する小学6年生が全員集まって交流し、中学校進学前にお互い顔見知りになることをめざした事業である。中学1年生のみならず、2年生、3年生を含む全学年の生徒がこの事業を経験して統合を迎えられるよう、期間は統合までの3年間という計画で実施された。

葉山中学校区では、統合後、中学校の生徒会が主催するなどの様々な形で継続されたが、一旦、諸事情により中止となっていた。しかし、ぜひ復活してほしいとの要望が多く出され、PTAや子ども会育成会を中心に「葉山中学校区子ども交流実行委員会」を立ち上げ、現在も継続して行われている。

■ 実践

○ 実行委員会

この事業を復活させるにあたり、実行委員会が組織された。構成メンバーは小中学校のPTA会長・副会長・学年委員長、市連合子ども会育成会役員等で構成されている。本事業が次年度以降も継続して行われるよう、次期会長候補者や小学校の5学年委員長も組織に加わっている。

<実行委員会組織>

役職	所属・役職
実行委員長	葉山中PTA会長
副実行委員長	葉山中PTA副会長(次期会長候補者)
実行委員	各小学校(大久保小・富本小・戸沢小・富並小)PTA会長・6学年委員長・副委員長・5学年委員長等から3名ずつ
事務局	市連合子ども会育成会

ここに
注目!

- 副実行委員長は、次年度、実行委員長を務めることになっている。また、実行委員には各小学校の6学年委員長だけでなく5学年委員長等にも入ってもらっている。この事業が単発で終わることなく、次年度以降も継続して実施しやすいよう配慮がなされている。

- 会議は年2回に精選し、負担のないように運営されている。



また、村山市教育委員会が共催となり、生涯学習課が事業全体の事務局として支援している。

できるだけ実行委員の負担を減らすために、会議の内容や回数を精選し、2回の話し合いで済むようにしている。会議の内容としては、交流会運営の確認といった事務的なことのみならず、児童がより良く交流するための配慮についても議論がなされている。

さらに交流会の会場となる体育館に移動し、交流会当日に行うレクリエーション（ドッジビー）を体験し、運営や安全面の配慮等の確認も行うなど、これまでの経験を踏まえた改善がみられる。

○ 「子ども交流事業」の様子

例年、12月第1日曜日に、葉山中学校体育館を会場に実施している。

運営は、実行委員会その他、子ども会育成会から当日スタッフ（平成24年度は6名）の協力を得て行っている。



実行委員が集まり、打ち合わせを行っています。
生涯学習課担当者を中心に当日の流れを確認中です。

各小学校（大久保小、富本小、戸沢小、富並小）の6年生が、葉山中のスクールバスで集合します。



初めはまだ緊張している様子で、体育館の四隅に離れて集合していましたが、徐々にうちとけて一緒に遊び始めました。



葉山中学校の体育館に向かいます。
今年は雪になりました。



開会行事には、村山市教育委員会教育長、各小学校長が出席した。教育長は挨拶で「今日の交流会は、たくさんの友達を作る会です。自分の学校の友達とはいつも話をしているので、できるだけ他の学校の友達と話をして仲良くなりましょう」と語った。

開会行事の後、最初の交流となるアイスブレイクが行われた。ファシリテーターは、副実行委員長が担当し、ゲーム感覚でグループを作って、自作の名刺を交換し合いながら自己紹介を行った。グループは何度も作り直して、多くの人と交流できるよう配慮がなされていた。後半は、その後行われるドッジビー大会のメンバーでグルーピングし、仲間と協力し合うゲームを通して交流を深めていた。

最後に、メンバーで協力してジグソーパズルを完成させる競争を行った。パズルは、市販のものではなく、新聞広告を5センチ四方程度に切り分けたものである。お金をかけずに楽しくやれるよう工夫しているとのことであった。



ゲームを通して少人数グループを作り、自己紹介をします。自作の名刺交換も行います。



児童一人一人が、自作の名刺を持参しています。



後半は、ドッジビーのグループになり、手拍子を合わせるゲームをやりながら、チームワークを高めていきます。



グループのメンバーで協力してジグソーパズルに取り組みます。パズルは新聞広告を切り分けたものです。

ここに注目！

○ 児童が自作した名刺や、広告で作ったジグソーパズルなど、できるだけ費用をかけずに交流できる工夫がなされていた。

後半は、グループ対抗でドッジビー大会が行われた。グループは、4つの小学校混合メンバーである。審判は実行委員の他、子ども会育成会からの当日スタッフが協力している。

以前は、チーム対抗大縄とび大会を行っていたが、運動の得意不得意にかかわらず、全員が楽しめる内容が望ましいということで検討し、数年前からドッジビーを実施しているとのことである。

ここに注目！

○ 以前から、運動系のレクリエーションを行ってきたが、運動が得意な児童も苦手な児童も楽しめるものということで検討し、現在はドッジビー大会を行っている。



■ 取組を行って

- 中学校への進学時、年度当初からの生徒同士の仲の良さは、葉山中でも実感している。少しでも不安なく進学できることで、中1ギャップも起こりにくいと感じている。
- 児童間の交流事業を通して、担当する各小中学校の保護者同士の連携が強くなることも大変意義が大きいと感じている。

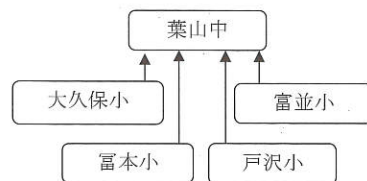
■ まとめ

取材を通して、児童間の交流事業であるが、それを運営する実行委員会を中心にした保護者間の連携を強く感じた。本事業が単発で終わることなく継続して行われるよう、実行委員会のメンバー構成等においても配慮がなされ、次期リーダーとなる保護者の意識も高まっているようであった。

□ 学校基礎データ (平成24年度)

学校名	児童生徒数 (学級数)
村山市立葉山中学校	240名 (11学級)
村山市立大久保小学校	96名 (7学級)
村山市立富本小学校	76名 (6学級)
村山市立戸沢小学校	161名 (8学級)
村山市立富並小学校	49名 (5学級)

<単一複連携>



そだち

共有

交流

一貫

鶴岡市立鶴岡第一中学校区

朝陽第三小学校

「三陽しぐさの取組」

■ はじめに

鶴岡市立朝陽第三小学校からは、鶴岡第一中学校、鶴岡第二中学校、鶴岡第四中学校の3校に進学する。現在は、市教育委員会の区分により鶴岡第一中学校区ブロックに属し、校長会や教頭会、生徒指導関係の各会議に参加し活動している。鶴岡第二中学校及び鶴岡第四中学校との連携は、拡大ブロック校長会、教頭会、その他の分科会で行うほか、必要に応じて連絡を取り合いながら連携している。ここで紹介する「三陽しぐさ」については、中学校区ブロック校長会等でも紹介しており、中学校でもその趣旨を汲み取った教育活動が行われている。

■ 三陽しぐさの実践

「三陽しぐさ」は、朝陽第三小学校の子どもたちに身に付けてほしい礼節やマナーとして、教職員、児童、保護者に募集したものの中から「江戸しぐさ」に倣って選定したものであり、それぞれの思いが込められている。ブロック校長会や小中連絡会等で、朝陽第三小学校の取組として紹介したり、新入児童保護者への手引きの中にも掲載したりしている。学校新聞でも、毎回「三陽しぐさ名人」を紹介するコーナーがあり、児童の生活にしっかりと根付いている。また、ポスターやのぼり旗を用いて、保護者や地域の方への周知、協力の働きかけを積極的に行っている。

■ 実際の活動の様子

○ あいさつ運動

児童みんなが、あいさつ名人です。



毎月3のつく日は「三陽しぐさ」の日として、特に意識しながら過ごす日になっています。

ここに注目！



通学路にはいつも元気なあいさつが響きます。



これは下駄箱用のミニのぼり旗です。校内のあちこちに、このミニのぼり旗が置かれています。

○ ポスター

さんよう え があかがや いき さんよう こ
三陽しくさで笑顔輝く“粋な三陽の子”になろう!

見つけひろい(福祉) 落とし物やごみを見つけて進んで拾おう
 あい(愛)言葉(言葉遣い) 相手を思いやる温かい言葉をつかおう
 道具もどし(整理整頓) 使った物はもとの場所へきちんとかたづけよう
 やさしさ返し(思いやり) 自分がしてもらってうれしいことを他の人にも返そう
 聞(効)き目パッチリ(聞き方) 話を目と耳で聞けば勉強への効き目もパッチリ!
 こまめ消し(エコ) 使わない電気はこまめに消してエコ生活
 サンキュウ食(給食) おいしい給食がいただけることに感謝し残さず食べよう
 そろそ廊下(廊下歩行) みんなが通る廊下や階段はしすかに右側を歩こう
 ズックいたわり(使い方) ズックのかかとをつぶさずひもも結んで大切にこう
 先あやまり(仲良く) 相手をせめる前に自分の悪かったところを先にあやまろう
 ニコニコ愛さ2(あいさつ) 笑顔いっぱいあいさつでお互いに元気をとけよう
 目うえしゃく(会釈) 目上の人とすれちがう時は「こんにちは」と軽くおじぎを
 目と目語り(対話) 話すときは目と目を合わせて心が通い合う会話を
 にっこり、ありが10(感謝) 1日10回は笑顔を添えて「ありがとう」
 先ゆずり(相手への気遣い) 「お先にどうぞ」と譲り合う気持ちを大切に
 さわやか美直し(美しく) そろえたりかたづけたりして気持ちよい環境に
 自分語り(記名・返事) 持ち物にはしっかり記名、名前を呼ばれたらしっかり返事

毎月3のつく日は“三陽しくさの日”(3日・13日・23日・30日)

鶴岡市立朝陽第三小学校

○ 学校新聞での取組…三陽しぐさ名人を紹介したり、特集として取り上げたりしている。



■ 取組を行って

- 「三陽しぐさ」により、生活指導の重点が子どもと教師で共有されている。新年度の学校経営や学級経営の重点となる「三陽しぐさ」の内容を、年度当初に校長はじめ教職員が児童の思いも踏まえて検討している。また、児童会の活動の振り返りの視点としても活用され、学校生活の様々な場面で子どもたちの口から「三陽しぐさ」が語られている。掃除の反省会や終わりの会などでも、子どもたちが「三陽しぐさ」の言葉を用いて、日常の活動の振り返りを行っている。
- 校舎内にはもちろん、学区町内会の協力により通学路にものぼり旗が立ち、地域の方々にも取組を知ってもらっている。
- 「～してはいけません」という禁止の言葉での教師の指導が減り、「三陽しぐさ」で用いられている言葉で子どもの行動の変容を促している。

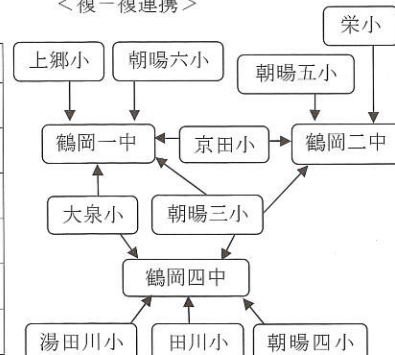
■ まとめ

取材を通して、朝陽第三小の児童、教職員、保護者が「三陽しぐさ」の作成にかかわっていることにより、日常生活に溶け込んでいることが感じられた。子どもたちには行動指針として意識され、自他を大切にする行動につながっている。学校生活のみならず、家庭や地域での生活にやさしさやゆとりをもたらしてくれるものになっている。こうして作られた取組をもとに、小中学校で情報交換することにより、互いの生徒指導に生かすことが連携を進める1つの工夫になっている。

□ 学校基礎データ(平成24年度)

学校名	児童生徒数(学級数)
鶴岡市立鶴岡第一中学校	704名(25学級)
鶴岡市立朝陽第三小学校	656名(27学級)
鶴岡市立朝陽第六小学校	817名(29学級)
鶴岡市立大泉小学校	99名(6学級)
鶴岡市立京田小学校	88名(7学級)
鶴岡市立上郷小学校	119名(7学級)

<複一複連携>



新庄市立明倫中学校区

「児童生徒間交流」

～小体連陸上記録会壮行式における中学校応援団からの激励～

■ はじめに

新庄市立明倫中学校には、隣接する新庄市立沼田小学校、約2km離れたところに位置する新庄市立北辰小学校の2校から進学してくる。平成23年度には、小中一貫教育シンポジウムの発表校区としてこれまでの取組を発表し、現在も継続発展させている。こうした取組を推進していくための組織として、明倫中学校区小中連絡協議会を開催し、平成24年度は次のことをねらいに取り組んでいる。

9年間を見据えた小中一貫教育を念頭に、明倫学区の全教職員が相互の理解と交流を進め、子どもたちの課題解決に向けて各教育領域における一貫指導の在り方についての研修・研究・実践を深めることで基本目標の達成をめざす。

また、その運営は、「研修・研究部門」「交流部門」「適応部門」に分かれて組織されている。その中で「交流部門」は、児童生徒間交流と教職員間交流を推進する役割を担っている。

■ 小体連陸上記録会壮行式で激励の応援をする中学校応援団を追って

平成24年度は、6月7日（木）に沼田小、8日（金）に北辰小に出向いて、明倫中3年生の応援団員が小体連陸上記録会壮行式で激励の応援を行った。



小学校での壮行式は、朝の全校朝会の時間で行われます。

中学3年生の応援団員は、始業前に準備して出かけます。沼田小へは徒歩で、北辰小学校へは自転車で向かいます。

壮行式を終えて、応援団の生徒たちが明倫中に戻ってくるのは、1時間目が始まる前です。

陸上記録会に出場する小学6年生の前に、中学生の応援団が入場します。堂々とした姿です。

明倫中学校には伝統の応援があり、今年度の応援団長は、小学校で見た中学生の応援に憧れて、応援団長に立候補したそうです。



中学生の応援団のみなさんが、小学生による応援を見守ります。中学生の姿勢を崩さない姿に、応援団として、そして、先輩としての役割と責任を感じます。



小学6年生の選手たちは、真剣な表情で応援を受け止めています。

いよいよ明倫中学校応援団による応援が始まります。応援団員の堂々とした応援の声と激しい太鼓の音が体育館中に響き渡ります。

1～5年生は、中学生の応援の迫力に圧倒されています。中には、応援の様子をまねる子どももいます。



応援をやりきった満足感が生徒の表情に表れています。

小学校の先生方もたくましく成長した中学生の姿をうれしそうに見つめています。

ここに注目！

■ 取組を行って

- 小学生は、中学生の姿に憧れを感じている。
- 中学生は、応援団としての自覚、先輩としての自覚をもって応援をやりきったことで、自信を高めている。
- 中学生として小学生の前に立つことで、自分の姿を客観的にとらえ、まわりに気を配りながら行動する姿がある。

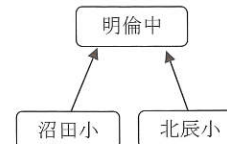
■ まとめ

小中学校ともに1時間目の授業が始まる時間前に活動を終わることができるように教育課程を工夫していた。「授業の時間を犠牲にしてまでの連携の活動は長続きしない」という視点は、これまで小中連携の取組を継続してきたからこそその言葉であった。また、小学校の先生方が、中学生の成長した姿を肌で感じることができ、小中学校のつながりの中で成長を見通すことができるのも児童生徒間交流の意義の1つであると感じた。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
新庄市立明倫中学校	295名（13学級）
新庄市立沼田小学校	403名（17学級）
新庄市立北辰小学校	131名（8学級）

<単一複連携>



河北町立河北中学校区

「河北中NAVI」

～生徒・保護者・教職員の信頼関係を築くガイドブック～

■ はじめに

河北町立河北中学校は、町に1校の中学校であり、町内の全小学校6校（西里小、溝延小、谷地中部小、谷地南部小、谷地西部小、北谷地小）から進学してくる。

平成20年に、創立30周年の事業の一環として「河北中NAVI」が創刊された。愛知県名古屋市立城山中学校の「城山中学校NAVI」の実践を視察し、河北中学校でも生徒・保護者・教職員が共通理解を図れる冊子を作りたいという願いのもと作成に取りかかった。その後、毎年更新され、平成24年度で第5号の発行となる。

■ 編集委員会の構成

以下のメンバーからなる編集委員会により作成されている。

編集委員会役職名	職名・校務分掌等
編集事務局長	事務総括
編集委員	教務主任、教育相談担当、生徒指導主事、養護教諭
監修	校長、教頭

「河北中NAVI」は、「城山中学校NAVI」が事務職員を中心に編集されたことに倣って作成されている。そのため、編集の中心となる編集事務局長を事務総括が務めている。学校集金等、事務室からの情報発信もあり、学校運営に積極的にかかわれるメリットが大きいということである。

■ 掲載内容と活用の仕方

「河北中NAVI」は、河北中の生徒・保護者・教職員の共通理解のためのガイドブックであり、3年間の中学校生活を道案内（ナビゲート）するものとして発行されている。

例年12月初めに行われる「新入生オリエンテーション」において配付され、進学前に児童と保護者が中学校生活について理解を深めるのに役立っている。さらに、オリエンテーション資料としての位置付けだけではなく、中学校生活の基本的なことを確認できるものとして、卒業までの3年間使用する冊子となっている。

保護者が、学校に相談や問い合わせ、連絡等があるときには、学校と保護者が互いに「河北中NAVI」を見ながら話をすることで、共通理解を深めることができる。

河北中
NAVI

第4号

ここに
注目！

- 事務総括が編集事務局長を務め、事務室からの積極的な情報発信がなされている。

ここに
注目！

- 中学校進学時だけでなく、卒業までの3年間使用する冊子である。
- 保護者と学校とが互いにこの冊子を見ながら話をすることで、共通理解を深めることができる。

ここに
注目！

- 冊子の始めに「メニュー紹介」として、内容ごとに分類して記載ページが示され、知りたい情報が探しやすくなっている。

メニュー紹介

() の数字はページ

連絡したいときは

欠席の連絡（裏表紙）
転校するときは（21, 22）

河北中学校のこと

校歌・校章（1～5）
河北中の教育（6）
通学路（15～17）
学校平面図（7, 8）
毎日の学習（10, 11）
日課表（9）
服装と持ち物（13, 14）
学校からのお知らせ（20）

相談したい時は

相談したい時は（47, 48）
スクールカウンセリング（50, 51）
教育相談（49）
学校以外の相談窓口（45, 46）

必要な費用のこと

学校集金（56, 57, 59）
就学援助（59）
給食（39, 40）

学校行事・教育活動

学校行事（73）
総合的な学習（11）
学校図書館（35）
生徒会（22～32）
部活動（33, 34）

健康のこと

健康に過ごすために（19）
保健室から（41～43）
ケガしたら（44）
特別な状況での欠席（45, 46）

いろいろな手続きは

就学援助（59）
学割乗車券の申込み（60, 77）
日本スポーツ振興センター（44）
PTA安全互助会（44）
転出入（転校）の手続き（21, 22）
集金口座振替依頼書（58, 78）
給食（39, 40）

学習のこと

毎日の学習（10, 11）
日課表（9）

安全のこと

安全に過ごすために（18）

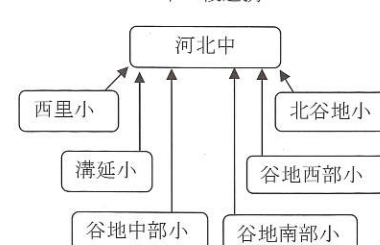
■ まとめ

取材を通して、児童生徒や保護者にとっての、中学校進学前の不安や進学後の戸惑いを解消するためにも「河北中NAVI」の意義は大きいと感じた。今後は、生徒や保護者にも編集にかかわってもらふ方針だということで、さらなる内容の充実が期待される。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
河北町立河北中学校	526名（18学級）
河北町立西里小学校	94名（7学級）
河北町立溝延小学校	129名（7学級）
河北町立谷地中部小学校	425名（17学級）
河北町立谷地南部小学校	236名（10学級）
河北町立谷地西部小学校	50名（6学級）
河北町立北谷地小学校	89名（7学級）

<単一複連携>



そだち

新庄市立日新中学校区

「生活リズム調査と合同リーダー研修会」

■ はじめに

■ **新庄市立日新中学校区**は、市内で最も児童生徒数が多い学区となっている。日新小学校が徒歩5分のところに隣接し、また、比較的大規模学区で市街地にあるにもかかわらず、日新小学校1校からのみ中学校へ進学してくるために、地理的な条件や連携の規模など充実した環境のもと小中連携の取組が進められている。また日新学区教育振興会という地域の学校教育への後援会組織の支援が土台にあり、地域と小中学校が密接にかかわりをもっている学区でもある。

小中学校共通で小中一貫教育の研究テーマを掲げ、年3回の合同研修会を行い、3部会（「いのち」「まなび」「かかわり」）に分かれて様々な取組を行っている。また3分野（教員の交流、児童生徒の交流、PTAの交流）も視点に入れて連携に取り組んでいる。

■ 生活リズム調査

【中学校生活リズム調査】
 小中学校同歩調で家庭・地域をあげて望ましい生活リズムを児童生徒に育成することを目的に、小中学校同じ項目で生活リズム調査を行っている。その結果を小中学校で共有し指導に生かしている。

また、結果は町内座談会の議題としても活用し、家庭を巻きこんでの取組となっている。小学校で9のつく日（9、19、29日）に「さわやかグッデイ」と称してノーテレビ・ノーゲーム運動を実施し、それに合わせた調査を行っている。

平成24年4月 「生活リズムチャレンジカード」

※活動した日付を記録し、
1ヵ月振り返ります。

「早寝・早起き・朝ごはん、テレビ・ゲームの約束(週間)」

☆目標掲げを先しませう。
朝起きる時間： 時 分
寝る時間(ふとんにはいる)： 時 分
※朝・夜 起床 寝る 朝食

☆朝に起床後毎日しっかり食べよう。
※テレビ・ゲームのやくそく (テレビは、
大人用は原則的に控えてください) (ゲームは、)

起床・朝寝・テレビ・ゲーム (おてぎまででき、①、②おてぎでできなかった：×)

	準備起床		朝ごはん (※おてぎOKでOK)	テレビ・ゲーム		おうちの人のサイン	型写印
	作休日の時間 (起床7:30、起床)	起床時間		テレビ	ゲーム		
8月27(月)			朝ごはん(何?) () 起床す () お茶(スプ) ()				
8月28(火)			朝ごはん(何?) () 起床す () お茶(スプ) ()				
8月29(水)			朝ごはん(何?) () 起床す () お茶(スプ) ()				
8月30(木)			朝ごはん(何?) () 起床す () お茶(スプ) ()				
8月31(金)			朝ごはん(何?) () 起床す () お茶(スプ) ()				
9月1(土)			朝ごはん(何?) () 起床す () お茶(スプ) ()				
9月2(日)			朝ごはん(何?) () 起床す () お茶(スプ) ()				

ほくむだしの足跡(→お茶としてご利用ください)
→お茶を飲むときにお茶を飲むときにお茶を飲むとき

おうちの人のサイン(→お茶を飲むときにお茶を飲むとき)

【取組を行っての児童生徒の変容】

- 「早寝・早起き」についてはだいぶ浸透してきており、早めに就寝しようとする傾向が見られる。
- 「朝食」についても、食べる習慣が身に付いてきている。早起きすることで朝の生活に時間的な余裕が出てきて、食事を摂る時間が増えていることが要因として考えられる。

■ 取組を行って

- 小学校のうちから取り組んでいるため、中学校に進学した後も指導が浸透しやすい。
- 小中一貫教育全体研修会の際に小中両校の傾向について検証し対応策を検討することで、共通の指導ができ、改善されやすい。
- 保護者に小中両校の資料を配布することで、取組への協力を得やすいものとなっている。家庭によって取組への意識に差が見られるので広報活動を工夫し、広く取組を浸透させていく必要がある。

■ 小中合同リーダー研修会

春休みに小学校の児童会役員と中学校の生徒会役員が合同でリーダー研修会を行っている。子どもたちに主体性をもたせるために、共通のスローガンを決めたり、その年度に同歩調で行う取組を考えたりする。(ペットボトルキャップ集め、壮行式激励、あいさつ運動等)



■ 取組を行って

児童会・生徒会の新役員が小中学校合同の活動を計画・立案することを通してリーダーとしての自覚が高まり、計画に沿って実践することで、小中学校合同で行う良さを実感している。特に小学6年生との交流を積極的に行うことが、中学校入学への不安を和らげ、中学校生活への期待感を高めている。また、生徒指導上の問題の減少にもつながっている。

ここに
注目！

～日新中学校の教頭先生へのインタビューから～

- 小中連携にはとにかく多忙感が付きまとうこともあるが、児童生徒間交流は、生徒の成長の姿がよく見られるので、教員の達成感が多忙感を上回っている。
- 児童会・生徒会役員の意識と他の一般生徒との意識にまだ差があるので、今後は、活動の意義や良さを広げていく工夫が必要になっている。
- 小中連携全体については、それぞれの活動を効率的に改善し、日常的に継続できるようにしていきたい。

■ まとめ

取材を通して、小中学校同歩調で行う生活リズム調査はまさに9年間での「そだち」を支える土台となっていると感じた。児童生徒間交流である「合同リーダー研修会」は児童生徒の主体的な活動として成り立っている。特に小学生にとっては、中学校への接続をスムーズにする活動になっている。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
新庄市立日新中学校	404名（14学級）
新庄市立日新小学校	732名（28学級）

＜単一単連携＞

日新中

日新小

寒河江市立陵南中学校区

「みんなの5(GO)5(GO)目標」

～小学校・中学校で一貫した共通目標～

■ はじめに

寒河江市立陵南中学校は、寒河江中部小学校、南部小学校、柴橋小学校の3つの小学校から進学する、寒河江市でもっとも生徒数の多い（平成24年度640名）中学校である。

陵南中学校区では、「陵南学区小・中学校教育懇談会」が、これまでも長年行われてきている。平成23年度より、共通の指針をもって児童生徒を育てようということが話題になり、陵南中学校が事務局としてひな形を作成し、学区内の小学校との意見交換を通して「みんなの5(GO)5(GO)目標」ができあがった。

■ 各学校での取組

児童生徒や家庭も一緒になり、中学校区内のすべての小中学校で取り組んでいる。

目標は各教室に掲示し、家庭には各校のPTA総会で保護者に伝達し、各家庭に配付している。内容としては、最低限これだけは共通して取り組んでいこうというものに絞り込んでいる。

小学校低学年用のものは、内容を変えずに表記をひらがなにし、わかりやすいものにしている。また、教職員用には、「教師の指導意識」ということで、具体的な指導のポイントが示されている。

■ 取組の推進

校長、教頭、教務主任、小学校旧6年担任・現6年担任、中学校1年担任等による「陵南学区小・中学校教育懇談会」を開催し、授業参観や話し合いを行っている。5月は中学校、11月は小学校を会場にして行われ、「みんなの5(GO)5(GO)目標」についても、取組状況の反省と次年度に向けた話し合いが行われている。

■ 取組を行って

- 中学校の新入生オリエンテーションでも使用しており、新入生のみならず、保護者も中学校の基本的なことを理解することができ、安心して入学を迎えることができる。
- 小学校での指導と、中学校での指導に一貫性があり、児童が中学校に入学してから戸惑うことなく学校生活に入っていくやすい。
- 交通安全に関する意識が高まり、小学校のうちから自転車に乗る際のヘルメット着用の意識が高まった。
- 今後は、児童会、生徒会で重点を決め、生活目標にさせるなどの取組につなげていきたいと考えている。

ここに注目！

- 「最低限これだけは共通して取り組もう」というものに絞り込んだ目標になっている。
- 小中連携の会議における話し合いの視点となり、成果と課題についても検証されている。

※陵南中学校区「みんなの5(GO)5(GO)目標」児童生徒配付用

陵南学区小中学生の皆さんへ

平成24年度版「みんなの5(GO)5(GO)目標」

生活

- ・正しいことは正しい、悪いことは悪いと言える人になろう
- ・1日の生活を通して 元気なあいさつ をしよう
- ・「はい」「ありがとう」が言え、場に応じた言葉づかいをしよう
- ・交通安全に気をつけよう いのち自分で守ろう
- ・身だしなみや、よりよい生活リズムに気をつけて生活しよう



学習

- ・まなび合う姿勢を大事にしよう
- ・発表ははっきりと、話は「目」で聞こう
- ・学習道具をしっかり準備して、えんぴつで正しい字を書こう
- ・家庭学習でも、やる気を持って取り組み、努力を続けよう
- ・本をたくさん読もう



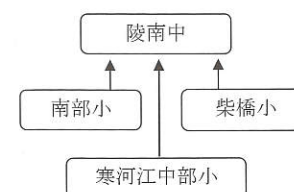
■ まとめ

取材を通して、この目標は、「陵南学区小・中学校教育懇談会」における話し合いのポイントになり、成果と課題についても検証を行うなど、陵南中学校区の小中連携の核となっていることを感じた。また、小中学校共通の指導を行うことは、中学校進学時の戸惑いを少なくする意味でも大切なことである。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
寒河江市立陵南中学校	640名（23学級）
寒河江市立寒河江中部小学校	628名（24学級）
寒河江市立南部小学校	351名（14学級）
寒河江市立柴橋小学校	285名（15学級）

<単一複連携>



山形市立第十中学校区

「養護教諭同士の連携と特別支援教育における連携」

■ はじめに

山形十中学区は、生徒数が非常に多い学区である。定期検診時の学校医の連絡調整など、小中学校の養護教諭が連絡を取り合う場面はあるが、山形十中学区では養護教諭同士が共同研究を行うなど、一歩踏み出した連携を行っている。また、特別支援学級に在籍する児童の保護者には様々な葛藤が生じるため、保護者の不安の軽減や小学校の特別支援教育に関する高いスキルを中学校側が学びたいという思いから、平成22年度より、最も多くの児童が山形十中に進学する南沼原小学校との間で、特別支援教育における小中連携も始めている。

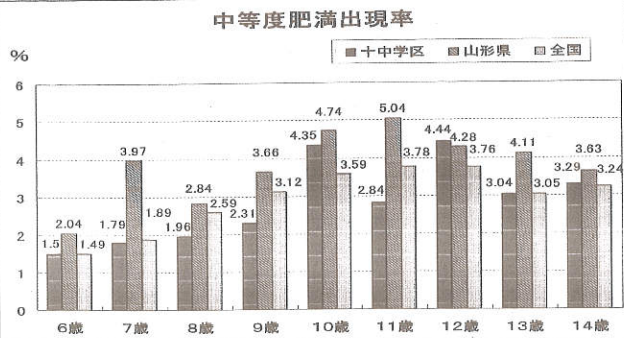
■ 小中養護教諭による共同研究

児童生徒の健康維持に関する課題解決には、生活リズム、食習慣など、長期間にわたる環境要因が関係してくるため、小中学校の養護教諭8名で共通のテーマを掲げて共同研究を行っている。アンケートも6歳から14歳まで小中の区切りを設けずに分析をし、児童生徒の健康維持行動を支える小中一貫した体制づくりをめざしている。

平成23年度の研究テーマ 「子どもの肥満」を考える

【山形十中学区の現状】

- ◇肥満傾向出現率は減少傾向、痩身傾向出現率は増加傾向。
- ◇環境要因（家庭生活・食生活など）が関与。
- ◇肥満指導の受診状況：小学校 51.7% 中学校 42.9%



取組を行って（教頭先生へのインタビューから）

- 小中学校の養護教諭で共同研究を行うことにより、学区の小中学校が同じ視点で健康維持に関する生活指導を行うことができるため、指導が浸透しやすい。
- 現在は教師同士の共同研究であるが、今後は研究の結果を生徒に還元する場面（食育に関する講演会の合同開催や生徒保健委員会の活動など）での小中学校の児童生徒同士による交流活動なども期待できる。

ここに注目！

児童生徒の現状を各学校単位ではなく、中学校区単位で考え、9年間にわたって統一した健康指導をめざしています。

■ 特別支援教育における連携

中学校入学前のオリエンテーションでは、中学校生活に関する丁寧な説明が行われている。また、南沼原小学校特別支援学級に在籍の児童と保護者は、年に5～6回ほど中学校の授業を定期的に参観している。そのため、小学生の保護者が中学校の先生に相談しやすい環境になっている。特に、進路（高校入学や就職など）は保護者にとって大きな悩みであるため、中学校の教員は、中学校卒業後の進路まで一緒に考えるという姿勢で小学校の保護者とかがかわっている。

さらに、中学校の特別支援学級担当教員は、小学校の指導方法を学ぶためや生徒の情報共有のために定期的に小学校の授業参観を行っている。

ここに注目！

(4) 若草学級の説明

- ① 学級について
- ② 授業などについて
- ③ おもな行事について
- ④ 一日の生活について（部活動を含む）

時間割や教育課程、年間行事予定、テストの計画など具体的な数字も示した細やかな資料が配付されています。

平成24年度入学予定
山形市立第十中学校
若草学級新入生オリエンテーション

日時 平成24年2月25日(土) 10:30~12:00
場所 若草1組教室

内容

- (1) 開会のあいさつ 向部
- (2) 教頭あいさつ 佐藤教頭
- (3) 自己紹介 参加者全員
- (4) 若草学級の説明
 - ① 学級編成について 鈴木
 - ② 授業などについて 鈴木
 - ③ おもな行事について 鈴木
 - ④ 一日の生活について（部活動を含む） 鈴木
- (5) 質疑 向部
- (6) 若草学級の教室案内 向部
- (7) 次期新入生 向部
- (8) 開会のあいさつ 向部

取組を行って（教頭先生へのインタビューから）

- この分野は小中学校ともにニーズが高い。山形十中学区では、丁寧なオリエンテーションを行ったり、教員間の情報や指導方法の共有を図ったりしている。
- 保護者も含めた定期的な授業参観などにより、小学校の保護者と中学校の相談の機会も設けており、それが保護者に安心感をもたらしている。

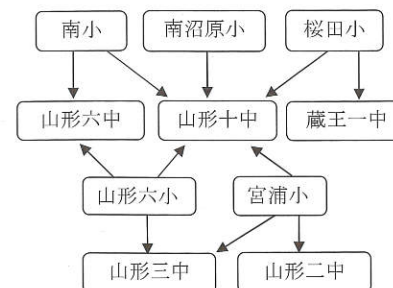
■ まとめ

取材を通して、5つの小学校から進学してくるという学区事情などもあり、児童生徒の生活指導に重点を置いた連携が、無理のない形で行われていると感じた。特別支援学級に在籍する子どもの保護者に安心感を与え、小学校段階から中学校卒業後の進路を見通して話し合うことなどは、小中連携における新しい切り口になりうると感じられた。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数
山形市立第十中学校	744名（25学級）
山形市立南沼原小学校	986名（37学級）
山形市立桜田小学校	542名（20学級）
山形市立南小学校	617名（22学級）
山形市立宮浦小学校	370名（15学級）
山形市立第六小学校	506名（21学級）

<複一複連携>



最上町立最上中学校区

「最上こどもサミット」～小中高校の連携を通して～

■ はじめに

最上町は町をあげて幼保小中高連携教育を推進している。町内の中学校を最上中学校に統合して平成24年度で27年目を迎えるが、統合当時は生徒指導面での課題が多かった。そこで、小中連携の取組を通して、地域に子どもが出向いていく機会を増やし、地域とともに子どもを育てることに積極的に取り組んでいる。

平成24年度より満沢小が向町小に統合され、6つの小学校から進学してくることになった。6つの小学校は学校規模にかなりの違いがあるが、小中連携が充実している。年3回の「小規模校集合学習」や「修学旅行（宿泊研修）」も一緒に行っている。また規模の異なる小学校間での交流も行われている。このような小中連携の充実により小中連携もスムーズに行われている。

■ 最上こどもサミットの様子

年に1度、最上中学校を会場に、6つの小学校児童会役員、最上中学校の生徒会役員、県立新庄北高等学校最上校（資料での参加）が一堂に会し、アイスブレイクや協議を行っている。協議内容は、最上こどもサミット開始当初から続く「共同行動宣言」を共通テーマとして、各校でその宣言にむけて取組を行い、それぞれの特色ある活動を共有している。また、小中高ボランティア活動についても話し合いがなされ、小中学生の主体的な活動として長い間継続している。



最上こどもサミットの様子

共同行動宣言

テーマ「声でつながる最上っ子」

1. あいさつをしっかりしよう
2. 自分の気持ちを相手に伝えよう
3. 礼儀を大切にしよう

現在の高校3年生が中学3年生の時から最上こどもサミットが始まりました。「共同行動宣言」はスタート時から継続しています。



小中高合同ボランティアの様子

ここに注目！

【最上中学校の教頭先生へのインタビューから】

教育委員会の方針を受けて、町をあげて連携の取組を推進している。その中で、“一緒に学ぶ姿勢”を大事にしている。連携のイメージとして、“一緒に学んでいきましょう”“一緒に活動していきましょう”という姿勢で、縦と横のつながりを大切にしている。

平成24年度

第1回 最上こどもサミット

日 時：2012年6月16日（火）
午後3時～4時30分
場 所：最上町立最上中学校 4階多目的ホール

全体進行（事務局長 大塚新祐）

（生徒会副会長 今井翔加）

1. 開会のあいさつ

（議長 菅原優雄）

2. アイスブレイク
【メバリ 当てましよう！】

（生徒会長 草野寛大）

3. 諸君説明

議事進行（議長 菅 勇平）

4. 協議

（1）各小学校での取り組み説明

- ① 最上中
- ② 大堀小
- ③ 月橋小
- ④ 向町小
- ⑤ 東法田小
- ⑥ 富沢小
- ⑦ 赤倉小
- ⑧ 新庄北高等学校

（2）意見交換

5. 小中高合同ボランティアについて

（JRC委員長 古岡龍樹）

6. 閉会のあいさつ

（生徒会副会長 菅 勇平）



【協議内容（抜粋）】各校の報告書より

○取り組んでいくうえでの目標

- ・あいさつ運動に意欲的に参加して、普段の友達や先生方、地域の方々へのあいさつが向上していくようにしていきたい。（最上中）
- ・24人の児童みんなの笑顔がいっぱいになって、楽しいと思える学校。（月橋小）
- ・みんなが楽しく、いつでも笑顔で生活できるようにしたい。（東法田小）
- ・さわやかなあいさつと明るい歌声がひびき合う学校。（富沢小）
- ・明るい声であいさつ運動を定期的に行い、ポスターを掲示して呼びかけ合う。（新庄北最上校の共同行動宣言への取組）
- 取り組んでいくうえでの悩み
- ・あいさつに対する一人一人の意識にまだ差がある。（最上中）
- ・あいさつ運動を通してあいさつの大切さを理解させ、しっかりとあいさつする意識を高めていきたい。（大堀小）
- ・あいさつをしてもなかなか返してくれない人がいる。（向町小）
- ・友達同士、地域の方々へのあいさつもできるようにあいさつ運動を工夫する。（赤倉小）

■ 取組を行って

このサミットは、中学生がアンケートをとり企画・立案から運営までを行い、主体的な活動として定着してきている。今後は「共同行動宣言」なども見直しを図ったり、協議内容の充実を図ったりするなど、サミットの内容を充実させる時期に入ってきている。

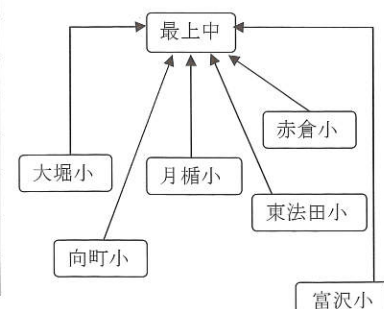
■ まとめ

取材を通して、規模が違う6つの小学校、中学校、そして高等学校までの児童生徒の交流を中心とした取組であり、町全体で取り組んでいる背景や“一緒に学んでいこう”という教員間の意識が連携を支えていることがわかった。特にサミットの運営では、中心である中学生が主体的に活動していこうとする姿が見られた。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
最上町立最上中学校	244名（10学級）
最上町立大堀小学校	143名（8学級）
最上町立月橋小学校	24名（3学級）
最上町立向町小学校	192名（8学級）
最上町立東法田小学校	18名（4学級）
最上町立富沢小学校	67名（7学級）
最上町立赤倉小学校	32名（4学級）

<単一複連携>



山辺町立作谷沢小・中学校 「小規模小中併設校の取組」

■ はじめに

山辺町立作谷沢小・中学校は、小規模の小中併設校である。運動会や文化祭といった大きな行事については、小中学生が一緒に企画・準備・実行までの取組を行っている。また、授業においても、音楽科は、1人の教員が小学1年生から中学3年生までの授業を受けもつなど、日常的に小中学校の教員が校種を越えて授業を行っている。

また、学校教育目標「オンリーワンの教育による『さくやざわ』の子ども育成」のもとに、校内研究のテーマを、「主体的に学ぶ子どもをめざして～小中9年間の学び方に焦点をあてて～」として小中学校の教員が協働して研究を進めている。

■ 小規模小中併設校の良さと課題～校長先生へのインタビューより～

【良さ】

- 小学生は、毎日、中学生のくらしぶりや責任感ある姿を目にすることになる。そこから中学生に憧れの思いを寄せている。
- 中学生は、中学生の自分を自覚し始めたときに、小学生としての下級生の存在を意識し、さらに中学生としての自覚を高めていくという姿がある。
- 中学生は、行事の企画・運営や普段の生活の中で判断・行動していく際の根拠として、小学生の生活や今の育ちを考えると当たり前になっている。「小学校の時間は～だから、この活動は、○曜日の△△時からしよう」「この場面では、中学生ではなく小学生にがんばってもらおう」などといったことを、中学生が自分自身の経験と重ねながらよく話している。小学生を意識することで、中学生である自分の成長も感じることができている。
- 小中併設校ならではの「なだらかな校種の移行」が行われている。その中で、「中学生である」という意識を小学生との関係性の中で意識的に感じさせていくこと、そうした「心地よいギャップ」が、子どもを育てることに大きく機能している。

【課題】

- 9年間、もしくは、幼稚園から考えれば12年間に、人間関係が固定化したり、個人への一方的な見方が定着してしまったりすることがあると、子どもの自己実現の障害にもなりかねない。また、小集団であるがゆえに、一人一人の子どもの様子や心の内面をよくみていかなければならない。

■ 小中合同の活動（一部）

○ Welcome花壇づくり

小学校児童会、中学校生徒会が合同で取り組んでいる。小中学生のグループ「ちょボラ班」でプランターに花を植え、小学生が朝に、そして、中学生が放課後の水かけ当番になって世話をしている。

○ 地区民大運動会

小中学生がそれぞれの役割をもちながら、一緒に企画・準備・実行していく。小中学生一緒になった応援合戦や全員リレーを行う。また、地区民の運動会を兼ねるため、地域の方々と交流もある。



ここに
注目！

■ 小中9年間の学び方に焦点をあてた校内研究

学び方の視点としている「基本的な学習スキル」と「課題を解決する能力」について、「子どもに付いた力」と「教師の指導」の側面から小中学校教員全員で授業研究会を行っている。その拠りどころとして「基本的な学習スキルを身に付ける段階的な目標」（別紙資料）や「教科領域別系統表 作谷沢小・中学校版」を作成している。

○ 「オンリーワンカルテ」をもとにした授業の構想

(2) めざす子ども像に迫るために(6年)		
めざす子ども像 自ら課題意識を持ち、見通しを持ちながら解決していく子ども		
【指導における手立て】		
	T男	T女
解決する	・ 交流活動では、自分の思いやアドバイスを積極的に出せるように声かけをする。 ・ アドバイスを生かせるようにメモをとることを促す。 ・ 段書を作成する上で、「過去（事実）・現在（考え）・未来（意図）」の3つのポイントを示す。 ・ 「現在・過去・未来」などの構成があることを学習し、児童は自分にはどのような書き方がいのかを考えられるようにする。 ・ イメージマップで、事実と自分の考えを色別カードに区別して書けるように準備し、後の段書構成に生かせるようにする。 ・ リーダーを中心に自分たちで交流活動ができるようにする。	・ 学習リーダーとなり、交流活動を進められるよう支援する。意欲が高いので、話し合いを整理して進められるように、テーマ・構成・文章表現の3つのポイントを示す。
【児童の国語科におけるレディネス】		
	T男	T女
興味関心	十分な時間が保障されれば、じっくり読んだり書いたりという態度が見られる。	文章を読んだり書いたりすることに興味はある。
書くこと	言葉が豊富でもしつこい文章が書ける。説明をする文章でも、順序を表す言葉や要点のある程度押さえ分りやすい文章を書くことができる。文章のまとまりを考えることが課題である。	自分の思いや悩みを文章で書き表すことで吐露することが多かった。素直に自分を出すことができる。思いついたことを次々と書いていくので、文章としてあまり整理されていない。
読むこと	読中に苦手意識を持っていたが、日々練習を積み重ねているので正しく読めるようになり自信になっている。	自分の考えを待ちながら読み進めることができるが、思い込みで誤読してしまうことがある。
話し合うこと	テーマをつまみながら読み取っていくことは難しい。友達との読み取りや考えを聞いて、自分の考えを広げたり深めたりしながら学習していく。	自分の考えを待ちながら読み進めることができるが、思い込みで誤読してしまうことがある。
【学び方のオンリーワンカルテ】		
	T男	T女
聞き方	話の内容を大まかに聞き取ることはできる。自分の意見と似ているかどうかということ意識して聞いている。	話の内容は大体聞き取ることができる。集中力には波がある。
話し方	4月当初は、積極的に自分の考えを話すことができなかったが、話し方でリーダーを務める経験を積み、人前で積極的な話ができるようになってきた。	意欲を持って積極的に自分の意見を発表しようとしている。リーダーの経験を通して、さらに自信をつけている。
話し合い方	自分から話を進めようとはなかなかできないが、何とかしなければならないという意識は持っている。	リードして話を進めようとする姿勢が見える。また、話題からそれないように意識しながら話合っている。
書き方	ていねいに書くことができる。物事の特徴をとらえ、順序に気をつけながら文章を書くことができる。	物事を大まかに捉えることはできるが、考えを整理することが難しい。ていねいに書く意識は高くなっている。

作谷沢小・中学校 学習指導案（一部抜粋）

児童生徒の実態を基盤にしたボトムアップの考え方で、授業を構想している。

課題解決能力の育成を強く意識して、めざす子ども像に近づくため、主体的な問題解決過程に必要な手立ては何か考えます。

教科のレディネスを把握し、きめ細やかな指導をめざします。

ここに
注目！

「オンリーワンカルテ」は、一人一人の学び方の実態、短期目標、長期目標と個別の配慮事項や指導の手立て、変容などを記載したものです。この「オンリーワンカルテ」をベースに一人一人の子どもの実態に合った授業が構想されていきます。

■ まとめ

取材を通して、小規模小中併設校だからこそできる小中連携のように感じるが、一人一人の子どもの実態を丁寧につなぎ合わせながら9年間を見通して育てていくことは、学校規模に限らず、大切な視点である。また、小学校から中学校に進学する際の不安は解消していく必要があるが、「憧れの中学生のような自分になりたい」という子どもの思いを「心地よいギャップ」として学校生活に位置付けていくことも大切であると感じた。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
山辺町立作谷沢小・中学校	小学校 12名 中学校 8名（すべて複式学級）

[illegible]

長井北中学区及び長井南中学区では、「まずは、中学校の様子を見て知ってほしい。」「夢と希望をもって入学してほしい。」という思いから、小中連携活動を進めている。実際の連携活動としては、「小学生の中学校運動会への参加」や「部活動見学会」「あいさつ運動」「小中連携懇談会」「中学校便りの小学6年生への配付」などを計画的に推進し、中1ギャップの未然防止を図っている。

長井北中学校、長井南中学校ともに、学区小学校の6年生に案内状を出して運動会に招待している。

長井南中学校では、「100m 公認記録会」と地域ふれあい種目としての「まり入れ」に小学生が参加できる機会をつくっている。100 名ほどの参加者があった。各組の競技得点にも加わることになる。競技前に自己紹介などを行って交流を深めるきっかけにもなっている。文化祭にも案内をしている。

ここに
注目！

小中学校のみなさんへ!      

第31回 北中運動会

ぜひ見に来て下さい!!!

長井北中大会開催実行委員会

今年度の北中地区大会は、「北風」をローガンに掲げ、小学校でのあいさつ運動、地域でのボランティア活動等を行ってまいりました。今回、北中地区との交流を深め、北中について知ってもらい、お互いに「北風」を吹かせたいと考えたので、応援合戦が中心となりますが、ぜひ見に来て頂きたいと思います。

1. 時間： 9月1日(土)を前夜祭は9月2日(日)に延期になります。
2. 時刻： 13:00~14:00 各2校ずつ出場を行います。
当日は9:10~16:00まで観戦者の方の姿を見たいです。
お好きな時間においでを願っています。観戦者の方は13:00にならざるをかけるので集合して下さい。

3. 集合場所： トラッド西側(リカールビル前) 持参物：筆記用具
4. 持ち物： 色紙、数珠、長井小中学校地区のTシャツ等
5. 当日の配布： 当日は開催実行委員会の主催が案内します。
13:00~13:10 開典(トラッド西側) ※当日の持ち物を説明します。
14:15~13:50 応援合戦の順番(トラッドビルを周ります)
赤組、白組、青組がそれぞれ30秒の制限時間のなか
各組のテーマに3秒、構えながら応援合戦を行います。
13:55~14:10 〇応援発表へ 各学校12人の人々にその場な
( 1) 各、応援係を任命していただきます。
〇投票→次の組が1番よいと、たのび隊員さんには投票
券(画面上)に応援合戦のなかで最もよいと思うチームを
に書いてもらって発表するのだからぜひ参加して下さい!!!

長井北中学校の部活動部長会の企画で、10月23日の土曜日に3小学校の6年生の希望者41名の参加を得て、部活動見学会を行った。当日は、参加小学生で4～5人の小グループをつくり、中学3年生の部長が案内役となって各部の活動を紹介し見学して回った。



新庄市教育委員会

「新庄市における小中一貫教育の推進」

～全中学校区における市委嘱研究による取組～

■ 取組の背景と現状

新庄市では、過去に起こった市内中学校での痛ましい事案以来、「いのちの教育」の充実を図り、小中の接続の連携から一貫教育へと市全体で力を入れている。平成18年度より市のすべての中学校区において、小中一貫教育に関する2年間の委嘱研究を輪番で行っている。平成27年には山形県初となる施設一体型小中一貫教育校の設立が萩野中学校区で決定している。平成18年度より新庄市の推進していた「もみの木教育プラン21」のもと「新庄市小中一貫教育基本方針」を定め小中一貫教育を市全体で推進している。

ここに注目！

- ・「新庄市小中一貫教育基本方針」が定められており、市内全中学校区で小中一貫教育を推進している。(すべての中学校区で統一されている)
- ・山形県初の施設一体型小中一貫教育校が平成27年度よりスタートする。

新庄市小中一貫教育基本方針概要

平成22年3月

- これまでの小中連携一貫教育の実践を土台として、5中学校区で特色ある小中一貫教育をすすめます。
- 小中一貫教育を中学校区の実態に応じて、3つの型で推進します。
 - 単線連携型小中一貫教育 ～ 新庄中学校区・日新中学校区
学区を同じくする一つの中学校と一つの小学校が一貫教育を行います。
 - 複線連携型小中一貫教育 ～ 明倫中学校区・八向中学校区
1つの中学校と中学校区内の複数の小学校とで一貫教育を行います。
 - 施設一体型小中一貫教育校 ～ 萩野中学校区(仮称:萩野小学校)
同一校舎で小学生と中学生が生活を共にしながら一貫教育を行います。
- 小中一貫教育のねらいを以下のように設定します。
 - 学ぶ意欲を高め、夢や希望に向かって努力する子どもの育成
小中学校教員が9年後を見据え共通理解に基づき指導を継続することで、「生きる力」の中核をなす将来につながる確かな学力を育成します。
 - 「ふるさと新庄」を愛し、誇りに思う子どもの育成
地域の人の、ものを、ことを学ぶ「ふるさと学習」を通して郷土への愛着を深め、地域を支えようとする人材の育成を図ります。
 - よりきめ細かな支援の充実
小中学校の教員の連携・交流により、個性豊かな児童生徒一人ひとりの教育的なニーズに応じた指導を共通理解に基づき継続的に進めます。
- 各中学校区に「小中一貫教育推進協議会」(仮称)各学校に「地域の学校づくり協議会」(仮称)を設置し、中学校区で一体となった教育環境づくりをすすめます。
- 定められた学習指導要領の範囲内で、小中学校9年間の連続したカリキュラムを軸に、地域の特色を生かした教育課程を編成します。
- 義務教育9年間の指導上前期4年、中期3年、後期2年の区分とし、発達段階に応じた適時な指導と「ゆるやかな接続」を実現します。
- 「施設一体型小中一貫教育校」をモデル校とする小中一貫教育の「モデルカリキュラム」を作成します。
- 小学校と中学校の児童生徒の異学年交流を授業、行事、児童会生徒会活動等で計画的に位置付け、積極的に推進します。
- 小中学校間の教職員の壁をとりはらい、小中の複数教員による協力指導や小学校高学年への教科担任制を計画的に推進します。
- 異学年交流や地域との協働により、多くの人の関わり場を設定し、「こころの教育」の充実を図ります。
- 上記の考えをもとに「新庄市立小中一貫教育基本計画策定委員会」を学識経験者、学校関係者、保護者、地域の代表等で組織し、小中一貫教育基本計画を策定します。
- 基本計画の策定状況について、「小中一貫教育推進協議会」等を通して周知広報、意見聴取を随時行っていきます。

【全中学校区において】

- ・小中連携(小中一貫)に関わる部会構成された組織が存在し、すべての教職員が連携の取組に携わっている。
- ・年に2～3回の小中連携(小中一貫)に関する全職員研修会が設定されている。
- ・交流授業のみならずボランティアなどの地域を巻き込んだ取組が多数みられる。
- ・小中連携が日常化し、教職員の小中連携に対する意識が高い。

【小中連携と小中一貫のイメージ】

「小中連携」
小中学校の接続を中心に強化した取組

「小中一貫」
共通の教育目標、基本方針の下、9年間を見通して継続して続けるなど、系統性がある取組

■ 学校便りの6年生への配付 (長井南中学校便り)

長井南中学校では、平成17年から学校便りを全小学校6年生に配付している。中学校の教育活動の様子や生徒のがんばりなど、多くの方々に知ってもらい、入学前に少しでも夢や希望をもって入学できるようにしている。毎年60号以上にわたり発行配付し、日常化している。



■ 支援カードの活用を図った「小中連携懇談会」の実施

長井北中学校と長井南中学校では、共通した形式の「支援カード」が使われ、困り感を抱いている児童についての引き継ぎを行うことにしている。1月下旬と6月に小中学校の関係職員が一堂に会して、個々の児童に関する引き継ぎや小規模校から進学してくる児童について学級編制に関する配慮など相互に情報交換する場になっている。

ここに注目！

■ 取組を行って

- お互いの学校の教育活動や児童生徒の様子が見える関係が大切である。それを互いに理解した上で、連携を行うことができるようになった。
- 児童と生徒の交流が、憧れや中学校生活への夢を与えることができるような具体的な活動がしっかりと位置付けられるようになってきた。
- 反省を加えながら年々改善が図られてきている。
- これ以上の連携事業は、時間的に難しい面が多いため、質を高めていきたい。

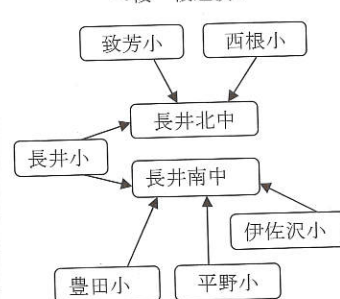
■ まとめ

児童生徒の交流が自主的になってきている。中学校への夢と希望をもって入学でき、子どもたち同士で支え合えるように「そだち」をつないでいこうとする着実な活動で、小中連携が図られている。

□ 学校基礎データ(平成24年度)

学校名	児童生徒数(学級数)
長井市立長井北中学校	344人(13学級)
長井市立長井小学校	728人(26学級)
長井市立致芳小学校	193人(11学級)
長井市立西根小学校	165人(8学級)
長井市立長井南中学校	450人(18学級)
長井市立豊田小学校	184人(7学級)
長井市立平野小学校	178人(8学級)
長井市立伊佐沢小学校	63人(9学級)

<複一複連携>



■ 委嘱研究の年度

委嘱研究年度	中学校区	中学校へ進学してくる小学校
平成18・19年度	新庄市立新庄中学校区	新庄小学校
平成20・21年度	新庄市立日新中学校区	日新小学校
平成22・23年度	新庄市立萩野中学校区	萩野小学校 泉田小学校 昭和小学校
平成24・25年度	新庄市立八向中学校区	本合海小学校 升形小学校
平成26・27年度	新庄市立明倫中学校区	沼田小学校 北辰小学校

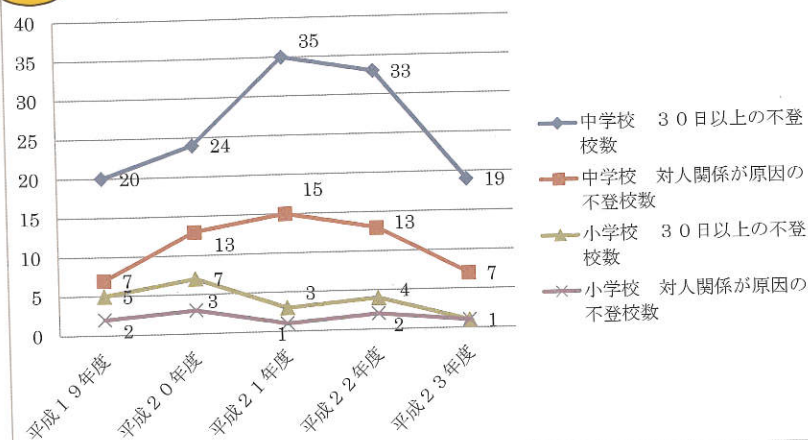
※委嘱研究2年目に研究発表会を行う。

■ 取組の成果

- 子ども同士の交流・学び合いを大切に授業改善の視点を小中学校で共有できた。
- 特に中学生の生徒指導面での成果(生徒の自尊感情の高まり、心の醸成)がみられた。
- 不登校児童生徒が減少した。(いじめの認知件数も減少) ※下図参照
- 中学校区を単位とする生徒指導体制が同一歩調で進められた。
- 児童会・生徒会の交流活動により子どもたちの主体的な活動を促すことができた。

ここに注目!

不登校数(内、人間関係が原因の不登校数)



■ まとめ

県内全体で統廃合が盛んに行われている。最上地区も例外ではない。その中であって、市教育委員会が中心となり、市全体で小中一貫教育に取り組んでいる。各学校では、研究の委嘱を受けることで確実に取組の質の向上が見られ、様々な工夫や取組が市全体で共有されることで最終的には不登校数が減少するという目に見える形の成果が出てきている。

共有

交流

一貫

そしき

新庄市立新庄中学校区

「たくましく生き抜く力を育む小中一貫教育の推進」

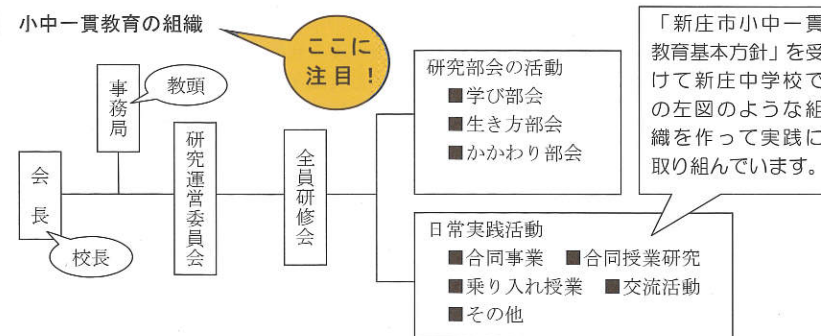
～他とのかかわりを通じた自尊感情の醸成をめざして～

■ はじめに

新庄市立新庄中学校は、新庄市の中心部となる新庄城址・最上公園に隣接し、市の学術・文化的な情報発信の拠点に位置する学校である。恵まれた教育環境にあるものの、内在した悩みを抱える生徒も少なからず見られ、生徒指導上の様々な課題を抱える学校でもあった。

こうした中で、新庄中学校では、新庄市で策定した長期教育プラン「いのち輝く新庄もみの木教育プラン21」に基づく小中連携・一貫教育を、平成18年度から組織的に整備し、平成18、19年度において市教育委員会より委嘱を受け、平成19年度にその取組を発表している。その後も新庄小学校との交流及び一貫教育の共同研究を積極的に進めている。

■ 小中一貫教育の組織



各部会の取組

- 学び部会 …… 学習指導を中心とした研究及び協議
- 生き方部会 …… 保健・安全指導を中心とした研究及び協議
- かかわり部会 …… 生徒指導を中心とした研究及び協議

■ 生き方部会の実践 ～小学生とのかかわりを通して～

○ 実践Ⅰ「合同あいさつ運動」

生徒会が中心となり、小学校玄関前でのあいさつ運動を展開している。当初は、役員の生徒が小学校を訪問して実施していたが、その効果や価値を自覚した生徒達の要望もあり、広く学級単位で取り組むようになってきた。

あいさつ運動が実施される日は、登校前の生徒が個々に新庄小学校の玄関前に集合する。そして、終了後そのまま中学校に登校する。

小学生と笑顔でハイタッチを交わす中学生の表情は、大変柔らかい。中学生への憧れを感じながら登校する小学生の表情も、非常に明るい。



○ 実践Ⅱ「低学年児童への読み聞かせ活動」

生徒自らが、小学校に出向いて低学年児童を対象にした読み聞かせに取り組む活動を仕組んでいる。この大きなねらいは、生徒一人一人の「自尊感情」の醸成である。いつもは、暗い表情の生徒ほど、小さな小学生を見る目がやさしく、にこにこした笑顔で読み聞かせに取り組んでいる。さらに、こうした小学生との触れ合いが、内面に問題を抱えている生徒ほど、有効であることが明らかになってきている。小学生への読み聞かせについては、小学校との連携協力が不可欠であるが、これまでに築かれた「小中一貫教育」をめざした取組の一環として定着してきているため、事前打ち合わせも円滑に行われている。



■ かかわり部会の実践 ～地域とのかかわりを通して～

○ 実践「小学生との奉仕活動」

学区内を流れる「指首野川」は、新庄小中学生の学習エリアとして、地域の人々に広く愛されている河川である。この河川沿いの環境保護を目的とした「指首野川親子クリーン作戦」は、新庄中の生徒が小学生と共に活動する貴重な機会となっている。小学校では、3年生の親子と4年生以上の児童を対象に呼びかけがあり、保護者が参加できない小学生は、参加した新庄中の生徒と活動を共にしている。回を重ねる毎に認知度が上がり、早朝からの活動にもかかわらず、多くの中学生が参加している。



また、毎年、夏季休業中に展開されている「小中合同ボランティア」も、親子クリーン作戦同様、小学生と共に清掃活動に取り組む貴重な機会である。ここでは、自分の住む町内単位での活動を、各町内のリーダーとなる中学生が中心となって展開している。

小学生や地域の方々と一緒に近隣の清掃活動に取り組む生徒の表情には、自信と誇りが満ち溢れている。

■ 学び部会の実践 ～教員の相互交流を通して～

○ 実践「中学校専科教員による小学生への出前授業」

中学校の教員が小学校に足を運び、専門教科の出前授業を行う機会は、教員にとっても児童にとっても、貴重な機会である。中学校教員が、授業を通して小学生の実態を理解すると同時に、小学生にとっては、未知の中学校生活に対する不安感を取り除く絶好の機会となるからである。

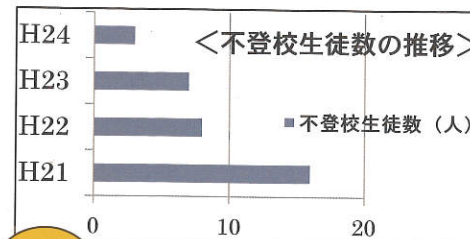


専科教員による質の高い授業に、小学生が目を見開いて参加する様子が見られ、今後も積極的に展開していきたい取組である。

■ 取組を行って

組織的に小中一貫教育を推進することで以下のような成果が見られた。

- ・ 各部会や全体研修会を通して、小中学校の教職員のつながりが太く確かなものになってきている。
- ・ 様々な面で、小中学校間の共通理解が図られてきたことで、生徒指導の方向性やビジョンが共有されてきている。
- ・ 深まった教職員間の絆が、日常的な情報交換や意思疎通を充実させ、児童生徒の個性や心の動きを重視した指導が実現している。
- ・ 組織的に部会ごと様々な取組を行った成果が、総合的に不登校の未然防止となって現れてきている。(下図参照)



ここに注目！

～新庄中学校教頭先生へのインタビューから～

- 小中連携から一貫教育をめざした取組は、生徒一人一人に「やって良かった。」「自分は認められている。」という実感を味わわせることで、自尊感情を醸成させていくことがねらいである。その結果、学校の仲間や、異年齢の小学生や地域の大人の人々との交流による他者とのかかわりが、生徒の自尊感情を育んでいくためにどれほど重要なものであるか、実践を通して再確認することができた。
- 今後は学習面においても連携を進め、めざす生徒の姿を、授業づくりの視点から小学校と共有していくことが強く求められる。学習面での取組自体は始まったばかりであるが、日常の授業を真摯に見つめていきたいものである。

■ まとめ

取材を通して、「新庄市小中一貫教育基本方針」に基づいて、部会構成された組織がきちんと整備され、それぞれの部会での実践や全教員の全体研修会などを通して、日常的に連携が推進されていることを実感した。例えば、「合同あいさつ運動」や「読み聞かせ」等、当初は部会としての取組として位置付けられていた活動が、現在では日常の実践活動としてごく当たり前に実践されるようになっている。今後は、それぞれの取組を振り返り、修正や児童生徒の考えを入れることで、さらなる活動の充実を図ろうとする意欲と工夫を感じた。

□ 学校基礎データ (平成24年度)

学校名	児童生徒数 (学級数)
新庄市立新庄中学校	268名 (11学級)
新庄市立新庄小学校	514名 (20学級)

＜単一・単連携＞



高島町立第一中学校区

「緊急時の児童生徒の安全確保のための体制づくり」

■ はじめに

高島町の4つの中学校は、平成28年に、1校に統合されることが決まっている。そのため、4つの中学校区の各小中学校においては、足並みをそろえて児童生徒への指導や対応ができるように、小中連携について町をあげて取り組んでいる。

特に、高島町立第一中学校区では、「緊急時の児童生徒の安全確保のための体制」について、東日本大震災後に見直しと再構築を図った。再構築にあたっては、高島小学校、高島第一中学校の連携から端を発し、町内のあらゆる組織・事業所までも巻き込む形で、案の検討・作成・広報・周知を行って安全確保を図り、世代を超えて「地域全体で子どもを見守る」という高い意識を生み出している。

■ 震災時の体験と振り返りから、新たな緊急時の安全確保体制の整備へ 【震災後の振り返り】

- ・ 学校毎まちまちな安全確保体制で対応したため、混乱した。
- ・ 教職員が付き添って下校したが、停電、保護者不在で子どもの安否確認ができず、保護者も教師も子どもも不安になった。
- ・ 緊急連絡網は、電話回線が不通のため使用できなかった。

【改善への強い願い】

- ・ 最悪の事態を想定した小中学校統一した基本的な安全確保体制の確立を図る。
- ・ 学校だけでは真の安全確保にならない。

【地域の組織を巻き込んで広げる】

町内にある多くの組織や会合・会議と連携して、世代や組織を超えて、真に児童生徒の安全確保に取り組もう！

ここに注目！

● 検討・作成・広報・配付

- 1 小中学校で整備したもの
 - ・ 緊急連絡網（学級、登校班）
 - ・ 一斉メール配信システム
 - ※緊急時・安全確保の体制
 - ・ 学校支援ボランティアの結成
- 2 地域で整備したもの
 - ※安全マップ（防犯協会）
 - ・ 地区別詳細マップ（防犯協会）
 - ・ 隣組回覧（全戸へ）

※は、掲示用として作成し全戸配付。（次項以降参照）

ここに注目！

中学校区統一

● 町内組織

高島小、高島一中、各PTA、学校支援ボランティア（見守り隊）、地区区長会、子ども育成連絡協議会、地区公民館、防犯協会、自治公民館連絡協議会、民生児童委員、老人クラブ連絡協議会、青年会議所、商工青年部、たかはた子ども園、地域の企業 etc

● 町内の会合（34年目毎年6月開催）
高島地区教育懇談会（保護者と地域住民）

掲示用

緊急時・児童生徒の安全確保の体制について

H23

高島町立高島小学校・高島町立第一中学校

■ 学校にいる時間帯に災害が発生した際の帰宅について

一斉集団下校する場合

暴風雨や吹雪などの異常気象状況等で、個々に帰宅するのが危険な場合は、職員引率のもと、登校班（地区）ごとに集団下校します。下校時刻を早めることもあります。
帰宅後、家に誰もいない児童生徒については学校で預かります。（電話連絡しますので、迎えにきてください。）

一斉メールシステムで連絡します。

学校待機をし、保護者に引き渡す場合

家屋倒壊等の大地震、洪水、原発事故による「屋内退避」の指示が出た場合など、集団下校も困難な場合は、学校待機とし、保護者に直接引き渡します。待機場所は、体育館かグラウンドになります。担任が確認しながら引き渡しますので、指示に従ってください。

一斉メールシステムで連絡します。

被害が大きい場合、停電等で連絡がとれないことが考えられます。その時は保護者の判断で迎えにきてください。

■ 災害発生の場合の学校からの連絡について

臨時休校・登校時刻を遅らせる場合

台風の接近、大地震の翌日など、前日から臨時休校等が分かっている場合や、当日、緊急事態により臨時休校等にする場合。

登校班（地区）連絡網もしくは学級連絡網、一斉メールシステムで連絡をします。電話が不通の場合は、教員が登校班の代表（地区代表）の家庭に出向きます。あとは登校班（地区）の連絡網で、家庭から家庭へ連絡してください。

※なお、突然の雷や強風など、登校の安全が確保できない場合は、学校からの連絡を待たずに、保護者の判断で自宅待機をし、安全を確認した時点で登校させてください。その際は学校にご連絡ください。または、保護者が学校に送ってきてください。

■ 登下校途中での緊急事態について

近くの大人に助けを求め、帰宅する。

学校が近いときは、学校に戻る。

（地震の場合は、建物・扉・崖下・川岸から離れ、かばんや持ち物で自分の身を保護する。）

- ★ 緊急連絡網（学級、登校班（地区））がいつでも使えるようにしておいてください
- ★ 一斉メールシステムへの登録を是非お願いします

○ 安全マップ（左半分抜粋）



○ 元町三区防災詳細マップ（一部抜粋）



■ 取組を行って

- 災害発生時の帰宅方法や学校からの連絡手段にかかわる取組について、保護者からは、大変わかりやすく、ありがたいと好評を得ている。子どもがいつ帰宅するのかが判断しやすく、緊急時の安全確保の体制について掲示物として全戸配付するなど、一斉メールでは連絡できない家庭に対しても、緊急の動きが見えやすくなった。
- 互助や地域の連帯が、子どもを守ることをきっかけとしながら促進されている。
- 地区行事の中でも、地区運動会や夏祭り、空き缶回収や花植えなどの地域ボランティア活動により、休日は部活動一辺倒だった中学生も帰属意識が高められている。
- 高小小学校では、PTA総会への保護者の出席率が極めて高く、積極的に教育にかかわろうとする姿勢が見られる。
- 取組をさらに発展させるために、安全や防災の面では、町全体で統一された方向にもってきたい。
- 子どもたちが親になったとき、今度は自分たちも何かをやりようという「循環する心」や地域を愛する気持ちを育むことに、つなげていきたい。

■ まとめ

学校の緊急時の安全確保の取組から、PTA、地域の様々な組織の人々との連携に広がり、地域で子どもを育てる「循環する心」の育成にまで発展していくことが期待される。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
高小町立第一中学校	292人（12学級）
高小町立高小小学校	452人（19学級）
高小町立二井宿小学校	47人（6学級）

<単一複連携>



鶴岡市立豊浦中学校区

「豊浦地区ブロック小中連携の組織と事業」

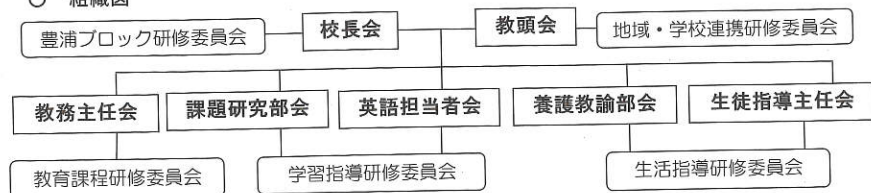
■ はじめに

豊浦中学校は、三瀬、小堅、由良の3つの学区から成っている。豊浦地区の小中学校、保護者、地区が連携して子どもたちを育成すること、子どもたちの課題を共有し、その解決に向けて研究や実践を重ねていくことをねらいとして、開校当初から協力態勢を築いてきた。

子どもたちは素直で穏やかであり、また保護者や地区の方々は、地域の小学校及び中学校への期待が大きく、教育活動の様々な面で協力的である。

■ 小中連携を推進する組織

○ 組織図



鶴岡市全体の校長会や教頭会などの他に、豊浦中学校区独自にもそれぞれの部会会議を年間複数回開催し、小中連携を密にしています。

ここに注目！

○ 各部会の事業内容

組 織	事 業 内 容	開催回数
校長会	1. 各組織の運営方針等協議 2. 地域連携・小中連携の在り方検討 3. 小中学校の教育活動や子ども理解と情報交換 4. 課題解決に向けた研修と連絡調整 5. 校長会主催ブロック研修の推進	5回
教頭会	1. 地区PTA連携事業の推進(校長・教頭連絡協議会、PTA連絡協議会及び歓送迎会懇親会) 2. 豊浦ブロック研修の推進 3. 小中連携の推進強化	6回
教務主任会	1. 教育課程編成・諸行事等の調整 2. 授業参観、出前授業の推進、研究授業参観の調整 3. 小中連携の推進(小中担当者会、連絡会、入学説明会、学級編制会議)	3回
課題研究部会	1. 重点課題への取組推進 2. ブロック研修の円滑な推進 3. 学力向上の推進	3回
生徒指導部会	1. 生徒指導に関する情報交換と指導の推進 2. リーダー交流会の推進	2回
養護教諭部会	1. 健康診断、保健指導の連携推進 2. ノーメディアにかかわる啓発活動と取組推進 3. 児童生徒の情報共有と指導の連携	2回
英語担当者会	1. 英語指導の情報交換と共有の推進 2. 授業参観と出前授業の推進	2回

■ 取組の実践

○ 学習指導に関する実践

- ・ 教職員交流授業研究
- ・ 英語出前授業の実施

○ 生徒指導に関する実践

- ・ 児童会、生徒会リーダー交流会

生徒指導主任会が指導して、児童会、生徒会が活動報告やレクリエーション交流、ボランティア活動を行っている。中学生は小学生の模範となって行動しようと頑張ったり、小学生が中学生への憧れを感じたりする機会になっている。

- ・ 新入生と保護者対象入学時学校説明会

○ 地域との連携に関する実践

- ・ 地区のお祭り、地区運動会への参加や運営の手伝い
小学校区ごと開催する祭りに、地区担当教員、児童生徒、住民のほとんどが参加し、小中学生も運営の一役を担っている。児童生徒が地区住民との交流を通して自己肯定感を育み、地区の大人が協力して取り組む姿を間近に見ることで、地域参加の大切さを感じる機会になっている。

- ・ 4校合同PTA研修会

平成20年度より、家庭での「ノーテレビ、ノーゲーム」について取り組んできた。家庭で約束事を決める話し合いを通して、家族のコミュニケーションを深め、子どもたちの生活習慣の改善をねらっている。

- ・ 同窓会との連携による教育環境整備
- ・ 地域の森、山、海岸の散策と地元の自然を知る活動及び地域の清掃活動

■ 取組を行って

児童生徒が、保護者や地区住民の方と協働して活動する中で、地区の一員として一役を担う機会があり、地区を意識して日常の生活を送っている。地区全体で子どもたちを育てようという意識が共有されている。

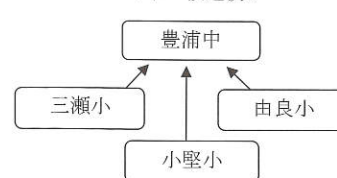
■ まとめ

取材を通して、校長会の強力なリーダーシップのもとに、具体的な推進役を教頭会や各担当部会が担うという、組織的な連携が強固であると感じられた。地区の児童生徒、教職員の減少に伴い、1人の教員が複数の担当を抱えているという実情から、地区との連携の在り方について今後検討が必要になってきている。今後、これまでの継続した取組を引き継いで、保護者や地域との一層の協力関係を構築していくことが期待される。

□ 学校基礎データ(平成24年度)

学校名	児童生徒数(学級数)
鶴岡市立豊浦中学校	117名(7学級)
鶴岡市立三瀬小学校	75名(7学級)
鶴岡市立小堅小学校	29名(4学級)
鶴岡市立由良小学校	48名(4学級)

<単一複連携>



山形市立第八中学校区

「西山会の取組」

～地域の子どもを9年間連携して育てるために～

■ はじめに

第八中学校区の3つの小学校は、いずれも単学級の小規模校であり、卒業生は全員第八中学校に進学している。昭和58年度に小中学校の校長・教頭が中心となり「西山会（せいざんかい）」が発足した。小学校間では授業の交流を中心に、中学校では各部会ごとの活動を中心にスタートし、翌年には通知表配付を小中同日に設定し、また、その翌年からは小学校学年担任会の発足が提案されるなど、年次を経るごとに充実した取組となってきた。

■ 「西山会」の歩み（沿革資料より抜粋）

西山会の歩み

1. 名称 山形市西部地区小・中学校連絡協議会
2. 組織 山形市第八中学校ブロックの小・中学校
 □山形市立西山形小学校 □山形市立双葉小学校 □山形市立村木沢小学校
 □山形市立大曾根小学校 □山形市立第八中学校 *23年度末双葉小閉校
 *当番幹事校は、小学校4校が年度ごとにローテーション

3. 発足と経緯

○ 昭和58年度…5校により発足（校長・教頭が中心）

*教職員の資質向上と親睦交流

*地域性（欠落している面）の打破

*無気力・無感動・固定概念等からの打破

◇ 小学校は、理科・図工・体育面での交流

◇ 中学校は、「部会」に精を出す

◇ 年間計画・生徒指導・レクリエーション等の連絡・調整

○ 昭和59年度

行事調整…通知表配付を、小学校（午前）・中学校（午後）にする。

5月の行事調整は困難なので、2月の教頭・教務主任会で調整を図る。

ここに
注目！

昭和58年の発足から
約30年間続いており、学
区の小中学校全教職員や保
護者に浸透している。

■ 取組の実際

○ 西山会総会

毎年春に1回、午後の時間帯を使い西山会総会が行われる。当番校の授業参観の後、部会ごとに協議がもたれ、子どもの生活・学習面での情報の共有化と小中学校での指導実践の相互理解ができる貴重な場となっている。

また、PTAも含めた顔合わせ会なども年3回行われている。

西山会の組織図

校長教頭会（年2回）
 部長会 ——— 学習指導部会（年2回）
 — 生徒指導部会（年2回）
 教務主任会（年3回）
 養護教諭部会（年3回）
 事務部会（年3回）
 小中担任連絡会（年2回）

○ 八中生活一日体験事業

11月に3つの小学校の6年生全員が学級担任の引率のもと、午後から第八中学校に登校し、中学生の生活を体験する。児童は英語と理科から選択した授業を受けた後、音楽の授業で各校の校歌を披露するなど合唱指導を受ける。その後体育館で中学生から中学校生活について説明を受け、体験活動終了後小学校担任の引率で下校する。

○ 学校保健委員会の合同開催

年2回の学校保健委員会のうち1回を西山会の取組として合同で開催している。平成23年度は、『「西部地区小中学生の生活リズムを考える」～メディアと上手につきあっていくためには～』をテーマに、アンケート調査とその分析を行い、地域、家庭、学校のそれぞれの立場でできることをまとめた。



○ 発達障がい理解に関する小中連携

小中で共通認識をもちたいという養護教諭部会の発案と各部会からの要望をうけて、第八中学校主催の講演会「小中連携に望むこと～発達障がいについて理解し、授業ではどのように対応するか～ 講師：山形大学医学部横山浩之教授」の案内を小学校の教職員にも配付した。今年度から始めた取組で、同一テーマでの講演会を複数年にわたって計画している。

■ 取組を行って

長年にわたる継続した取組により、保護者の年代も「西山会」を土台とした小中連携を経験した世代になり、小学校区ごとの地域の特色を大切にしつつ、第八中学校区としての連帯感ができている。そのため、子どもだけでなく保護者も中学校への進学に戸惑いが少なく、円滑な接続ができている。

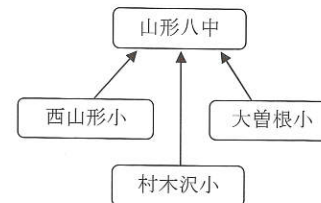
■ まとめ

取材を通して、長い歴史をもつ西山会の存在により、小中学校の教員が密に情報を共有し合えることができていると感じた。互いに顔のわかる関係性の中で、共に地域の子どもを9年間で連携して育てようという意識が高く、交流行事などの運営も大変スムーズに行われていた。また、部会から要望があった新規の取組などもすぐに実行に移しやすい土壌ができている。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
山形市立第八中学校	161名（7学級）
山形市立西山形小学校	104名（7学級）
山形市立村木沢小学校	119名（7学級）
山形市立大曾根小学校	74名（7学級）

<単一複連携>



中山町立中山中学校区

「校長会・教頭会を核にした小中連携の取組」

■ はじめに

中山町には、中山中学校と長崎小学校と豊田小学校の3校がある。

中山町立中山中学校区では、「中山の子どもはひとつ」というスローガンで、小中連携委員会を組織して活動を進めている。核となるのは、月1回の割合で行われる校長会・教頭会である。ここで、教育にかかわる町の課題解決に向け、情報が密に交換され、かつ基本的な方向性が確認されて、小中連携委員会の「まなびプロジェクト」「つなびプロジェクト」「すこやかプロジェクト」等の実際の活動に町一体となって組織的に取り組めるようになっていく。

他にも、小中連携委員会の趣旨を生かしながら、学校便り、校内授業研究会などの案内等については、町内の各学校へも送付すると共に、中学校の学校便りは6年生全員にも配付している。

■ 中山町小中連携委員会の組織

現在の3つのプロジェクト体制の組織になったのは平成19年度からである。

【中山町小中連携委員会の組織から抜粋】

- ・委員長：中山中学校長
- ・委員：教育委員会主任指導主事・事務局：各校教頭
- ・各校委員：校長、生徒指導担当者、教育相談担当者、研究主任、教務主任等

ここに注目！

校長会・教頭会の方向性を捉えてプロジェクト毎にテーマを決め活動を企画・展開し、全教員を巻き込んだ活動も仕組んでいます。

【まなびプロジェクト】・・・「9年間を見通した授業の実践」

【つなびプロジェクト】・・・「9年間の育ちに視点を当てた幼保小中連携の充実」

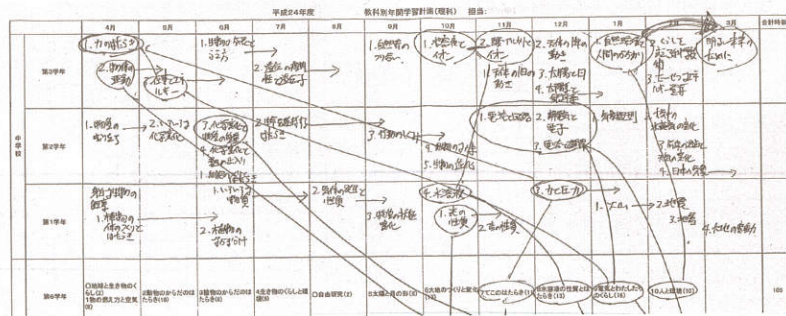
【すこやかプロジェクト】・・・「学校・家庭・地域の連携による『中山町の子ども』の育成」

・特別支援教育部会（山辺町と合同）・養護教諭部会・事務部会・音楽会や小体連他

■ まなびプロジェクトによる「各教科の連携カリキュラムの作成等」の実践

各学校の学習指導部長や研究主任が中心となりプロジェクトを構成している。今年は、「9年間を見通した授業の実践」のために、3校の全教員が参加する夏季研修会で各教科の連携カリキュラムの作成作業を行った。また、重点教科「算数・数学」の学力向上のための方策の検討、町主催の授業公開半日研修に向け、授業指導案の検討会を行ったり、実践の検証をしたりしながら、町全体の子どもたちの学力向上のために活動している。

<例 理科連携カリキュラム>



■ つなびプロジェクトによる「9年間の育ちに視点を当てた幼保小中連携」の実践

教務主任を中核にしなが、様々な学校行事等の日程調整をはじめ、全ての連携活動の調整を図るようにしている。

特に、平成24年度は、「小1プロブレム」や「中1ギャップ」の未然防止・早期発見・早期支援を図るため、幼保小中の連携活動の企画運営に重点を置いて活動している。県の「幼保小連携推進アドバイザー派遣事業」を活用しながら、町内2つの小学校を会場に2回ずつ連絡会や研修会を開催したり、園児が入学前に進学先の小学校を訪問する園児学校訪問を企画・実施したりしている。

また、小中連携活動や6年生への出前授業、職員研修の企画・運営にあたり、顔の見える連携をしていくためにも大変役立っている。ここ4年ほど3校の全教員で続けて取り組んだ「小中学校の教科書をもとにしたワークショップ研修」の成果を踏まえ、各教科の9年間を見通した連携カリキュラムづくりを「まなびプロジェクト」の活動につないでいる。

■ すこやかプロジェクトによる「町スクールカウンセラー（SC）配置事業」の実践

各学校の生徒指導や生活指導の主担当者、教育相談担当者等が中心にプロジェクトを構成している。このプロジェクトの平成24年度の重点は、スクールカウンセラー（以下SC）の配置事業について一層の充実を図っていることである。

中山町では、町単独でSCを配置していることが特徴であり、年々充実を図ってきている。特に、平成24年度は、町単独で2名のSCを専門機関から招聘し、年間各80時間程度、延べ約160時間のSC配置事業を行っている。本プロジェクトでは、SC来訪年間計画を作成し、各小中学校の要望や緊急性を勘案しながら日程等を調整し、児童・生徒・保護者・教員が、小学校から中学校まで、継続してカウンセリングを受けることができる体制を充実させている。

■ 取組を行って

プロジェクト毎に、9年間を見通した各教科の連携カリキュラム作成や幼保小中連携活動、SC事業等活動の重点化を図りながら進めることができた。また、町の全教職員を巻き込んだ取組のおかげで、小中学校の教員同士の顔の見える連携が可能になっている。さらに、夏季研修、町長や教育委員会関係者も参加する夏の全員懇親会などを通じ、教員同士の懇親が進み、気軽に相談し合える関係が進んでいる。「できるところから、無理なく」を合い言葉に小中連携を行ってきた。具体的な活動がしっかりと反省を加えながら年々改善が図られてきている。今後の課題として、小中連携は学年毎に行っているが、学校規模が違うので配慮が更に必要である。また、連携カリキュラムを学校毎にどう捉えて、どう活用を進めて児童生徒の学力向上に結びつけていくかが課題である。

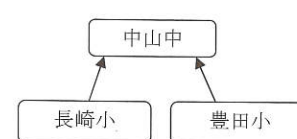
■ まとめ

「中山の子どもはひとつ」という共通理解のもと、校長会や教頭会と小中連携委員会が機能的に働き、全教職員を巻き込んだ具体的なカリキュラム連携と教職員の意識の連携が図られていた。

□ 学校基礎データ（平成24年度）

学校名	児童生徒数（学級数）
中山町立中山中学校	341人（14学級）
中山町立長崎小学校	466人（20学級）
中山町立豊田小学校	144人（8学級）

<単一複連携>



第5章 研究のまとめ

本章では、山形県内の先進的・実践的な取組から見えてきた小中連携を推進していくための視点を考察する。また、第4章で紹介した優れた実践事例から、小中連携を推進するための方法及びその成果を整理して示す。

1 小中連携を推進していくための視点

小学校から中学校へ進学するという校種間の接続期に、小中学校間の様々な違いから、子どもにとって無用な戸惑いや不安を与えることが課題とされている。こうした課題について、小中連携が進んでいる中学校区においては、子どもの立場から見た校種間の違いからくる感情や感覚等が、子どもにとって無用な戸惑いや不安を与えているかどうかを見極めて指導していくことが肝要だと考えていた。例えば、小学生とかかわることで、中学生は「自分は中学生である」という自覚を高めることになり、自尊感情を高めていく契機になることが多いという。こうした校種間の違いからくる子どもの成長の契機となる感情や感覚等を、ある中学校の校長は、「心地よいギャップ」と呼び、子どもを成長させていくきっかけとして、子どもの実態を見極めながら活用していきたいと語っていた。また、様々な取組を通じて成長していく子どもの姿は、小中連携の取組を推進する原動力になっていることもわかった。教師が子どもの成長を実感できることは、取組を更に充実させる工夫につながり、小学校と中学校の教職員が互いに協働して、長く続けられてきた実践も数多くあった。

このように、小中連携が進んでくことによって、校種間の接続期だけに目を向けるのではなく、児童生徒一人一人の具体的な9年間の成長へ目を向け、その成長を支えるための取組へと転換していく中学校区の実態があった。そこで、ここでは、9年間の子どもの成長を支えるための小中連携を推進していくための視点を、「共通理解の形成」「組織や体制づくり」「継続性の確保」の3点に整理して述べる。

(1) 共通理解の形成

小学校と中学校の教員が、9年間の子どもの成長を見通しながら目の前の子どもの成長を支えるためには、小中連携の取組の意図や意義を共通理解していくことが大切である。そこで、共通理解を形成していくために、次のような考え方が参考になる。

- ・ 小学校と中学校の教員が、互いに顔がわかる関係を築いていくことで、連携の意識が高まる。
- ・ 小学校と中学校の教員が「一緒に学んでいこう」という意識をもつ。
- ・ 小学校の教員が中学生となった卒業生の成長した姿を見ることで、小中学校のつながりをより意識するようになる。
- ・ 小学校と中学校の教員が互いの実践を知ること、それらを互いの教育活動にどのように生かしていくのかを考える契機になる。
- ・ 小中学校共同で研究を進めることで、めざす子ども像や子どもを見取る視点を共有する。例えば、キャリア教育において、「人間関係づくり」「コミュニケーションづくり」「勤労観」を視点に、校種や教科を越えて互いの授業を検討し合うことが可能になる。
- ・ 小中学校で生活や学習についての共通の目標を設定することで、それが連携のための話し合いの柱となり、成果と課題を検証することが可能となる。
- ・ 学校間だけの共通理解を進めていくのではなく、児童生徒・保護者・教職員の3者で、共通理解を図っていく。

取材の中で、共通理解を形成し児童生徒間交流を行ったところ、教員が子どもの成長をその場で感じることに、連携の取組に対する達成感が多忙感を上回ったという声を聞いた。小中学校の教員が、ともに目の前の子どもの成長を願い、具体的な子どもの成長を共有し、見通していくことが大切になると考える。その際、小中学校の教員の関係性の良さが、小中連携の取り組みやすさにつながってくるようである。また、そうした教員の意識や姿勢、保護者や地域の方々とも共通理解の形成をしていく契機ともなる。さらに、児童生徒・保護者・教職員の3者で小中連携の意義や良さなどの共通理解を形成していくことによって、小中連携がより効果的に機能することになると考える。具体的な取組の中では、小学校と中学校において共通の生徒指導を行うことにより、中学校進学時の子どもの戸惑いの解消が図られたり、小学校教員と中学校教員の密な交流によって、保護者に安心感が生まれたりといったことが成果としてあげられていた。

(2) 組織や体制づくり

小中連携を推進していくためには、その取組の土台となる組織や体制づくりが不可欠である。組織としては、市町村教育委員会等の教育行政、中学校区を基盤にした学校間の連携組織、保護者や地域の方々の連携組織などが考えられる。また、そうした組織をもとに小中連携が具体的に機能していくための体制づくりが必要になる。そこで、組織や体制づくりについて、次のような考え方が参考になる。

- ・ 市町村教育委員会が主体となって基本指針を示したり、委嘱研究指定を行ったことで、取組の質の向上が見られたり、その取組の工夫が市町村全体で共有されたりする。
- ・ 市町村教育委員会が示している基本指針に基づく組織が、小中学校にきちんと構成されることで、日常的に連携が推進されていく。
- ・ 中学校区における校長会や教頭会の強力なリーダーシップによって、組織的な連携が強固なものになっていく。
- ・ 中学校区のPTA組織が連携し、保護者主体の連携活動を行うことで、地域で子どもを育てようといった保護者の意識が高まる。

教育行政のかかわりは、小中連携の大きな推進力となる。それは、小中連携の目的などが明示されることによって、取組の土台が安定するからである。また、学校独自の取組が、市町村という単位の中で活用・発展されていく可能性がある。ただし、地域の規模や「複一複連携」などの複雑な連携規模などの中学校区による現状の違いから、すべての学校が一律に同じような連携を推進していくことは難しい。それだけに、地域や子どもの実態に合わせて、校長会、教頭会における共通理解とリーダーシップが必要になってくると考える。また、地域や保護者の協力は、小中連携を支える基盤となることから、組織や体制の中に地域や保護者を巻き込んでいくことも大切である。

(3) 継続性の確保

小中連携を積極的に推進しているどの中学校区においても話題になっていたのは、取組の継続性ということであった。長年、組織的に小中連携に取り組んできた中学校区からは、「保護者が小中連携の活動を経験した世代となり、取組への理解が進んでいる」「地域を巻き込み、地域の方々のサポートがより得られるようになってきた」ということが語られていた。息の長い取組を行ってきたからこそその成果である。また、今の取組をさらに目の前の子どもや学校、地域の実態の変化に対応させていくことが、継続性の確保につながると考える。そこで、継続性の確保について、次のような考え方が参考になる。

- ・新しいものを創り出そうとするのではなく、今現在行われている連携の取組に小学校と中学校の特色を生かしていく。
- ・日々の実践に沿ったものを小中連携に生かしていく。
- ・授業の時間を犠牲にしてまでの連携は長続きしない。例えば、朝会や朝の活動の時間を有効に活用するなど、教育課程を工夫する。
- ・中学校教員や生徒が、小学6年生との交流を積極的に行うことで、中学校教員が新入生の実態を把握する機会になったり、児童の中学校入学への期待感が高まったりする。
- ・中学校教員の出前授業を行う際には、1回だけでなく数回行うことで、子どもの実態に合わせた授業が可能になり、子どもとの関係性も形成されていく。

小学校と中学校の教員が、それぞれの校種の特色やその学校独自の特色をお互いに生かしていこうとする意識を共有することは大切である。「させられている」「しなければならない」などといった思いは、多忙感に拍車をかける。小中学校双方にとっての良さを見出していくことは、こうした多忙感を解消することにつながるのではないかと考える。さらに、時間を有効に使っていく工夫をしていくことは大切である。必要に応じて必要な時間を適切に位置付けていく教育課程の工夫が求められる。また、小中連携の成果は、児童生徒の姿に表れてくる。小中学校の教員が、無理なく、同じ目線で、9年間の子どもの成長を支えていながら、具体的な子どもの成長した姿を共有し、積み重ねていくことも、継続性の確保のためには大切である。

2 小中連携を推進するための方法及びその成果

(子：主に子どもにとっての成果 教：主に教職員にとっての成果)

(1)「共有」を主とした取組

	取組例	成果
まなび	立川スタンダードの取組 (実践事例 P 3 2)	子：中学生の学習への意識が高く、学力テストの結果が伸びてきている。 教：小中学校の教職員が校種間の違いによる感情や感覚等の質を見抜いて、子どもの指導にあたっている。
そだち	児童生徒・保護者・教職員の共通理解を図る冊子等の作成 (実践事例 P 5 1、P 5 6)	子：自分の生活をふり返る視点になっている。 子：中学校入学時に基本的なところは共通理解できているので、子どもに安心感がある。 教：学校と保護者が同じ冊子を見ながら話をすることで、共通理解が深められる。
	小中合同生活リズム調査の実施 (実践事例 P 5 8)	教：小中学校共通で指導することができるため、指導が浸透しやすく、改善されやすい。
	養護教諭の連携 (実践事例 P 6 2)	教：同じ視点で健康に関する生活指導を行うことができる。
	特別支援教育にかかわる情報交換 (実践事例 P 6 2)	教：校種を超えて、専門性の高い教員から学ぶ場をつくることができる。
そしき	中学校区による教職員間交流 (実践事例 P 8 0、P 8 2)	子：子どものみならず保護者も進学への戸惑いが少ない。 教：教師も地域の方々も「地域で子どもを育てる」という意識が共有される。

(2)「交流」を主とした取組

	取組例	成果
まなび	小学校外国語活動への中学校教員の出前授業 (実践事例 P 2 8)	子：中学校の先生から授業を受けることで、中学校の授業に触れるという感覚を味わうことができる。 子：3回の出前授業が行われることから、中学校の先生に親近感をもつことができる。 教：進学してくる子どもの状況を中学校教員が自分の目で確かめることができる。 教：中学校教員が小学校で行われている学習スタイルを把握することができ、それを中学校入学後に生かすことができる。
	ふるさと貢献型奉仕活動 (実践事例 P 3 6)	子：小学生は中学生に憧れを感じたり、中学校での活動のイメージをもったりすることができる。 子：中学生は、企画・準備・運営の中でリーダーとしての自覚を高めることができる。 子：小中学生として地域との結びつきが強くなった。
	特別支援音楽療法 (実践事例 P 4 4)	子：小学生が中学校を身近に感じるようになった。
	家庭学習の手引き、食育による連携 (実践事例 P 4 5)	教：保護者や教師同士の共通理解を深めながら地域みんなで9年間の学びを支える着実な活動ができている。
そだち	こどもサミットの取組 (実践事例 P 6 4)	子：中学生が企画・立案・運営と主体的な活動を行っている。
	小中合同リーダー研修会 (実践事例 P 5 8)	子：リーダーとしての自覚が高まる。
	小学校陸上記録会壮行式での中学校応援団の激励 (実践事例 P 5 4)	子：小学生は中学生の姿に憧れを感じる。 子：中学生は、立場の自覚、使命感から自信を高められる。また、まわりへの気配りのある行動が見られる。
	小小連携子ども交流事業 (実践事例 P 4 7)	子：交流を通して顔なじみになれるので、出身小学校が違っても入学時から仲がよい。 子：保護者が企画運営するため、中学校区内の保護者同士の連携が強くなる。
	中1ギャップの未然防止に向けた取組 (実践事例 P 6 9)	子：中学生への憧れや中学生生活への夢を与えることができる具体的な活動がしっかり位置付けられている。
そしき	校長会・教頭会を核にした小中連携の取組 (実践事例 P 8 4)	教：町の全教員を巻き込んだ取組ができ、小中学校教員同士の顔の見える連携が可能になった。

(3)「一貫」を主とした取組

	取組例	成果
まなび	総合的な学習の時間における9年間のカリキュラム (実践事例P36)	教：内容が精選され、また、めざす姿が共有されることで、9年間のつながりが明確になった。 教：カリキュラムを作成する際に、小中学校それぞれの取組が共有され、互いの取組の良さを生かしていこうという意識がつくられていった。
	9年間を見通したキャリア教育カリキュラムの作成 (実践事例P36)	子：自分の立場や役割を自覚して行動する姿や自己表現する姿が増えてきた。 教：校内での異学年交流が盛んになってきた。 教：小学校同士の連携が進んできた。
そだち	小学校・中学校で一貫した共通目標の作成 (実践事例P60)	子：中学校に入学する子どもはもちろん、保護者にとっても安心して入学を迎えることができる。特に、子どもにとっては、戸惑いが少ない。 子：交通安全に対する意識が高まり、小学校のうちから自転車に乗る際のヘルメット着用率が高い。
そしき	市教育委員会における小中一貫教育の推進と中学校区の取組 (実践事例P71)	子：自尊感情の高まり、心の醸成が見られる。 子：不登校児童生徒が減少している。 教：小中学校の生徒指導体制が同一歩調で進められる。 教：小中学校で子ども同士の交流、学び合いを大切にした授業改善へ向かっている。 教：子どもの自主的な活動を促すことができる。 教：小中教職員のつながりが強くなってきたことで、児童生徒の個性や心の動きを重視した指導が実現されてきている。
	緊急時の児童生徒の安全確保のための体制づくり (実践事例P76)	子：子どもを守ることをきっかけに互助や地域の連帯が促進された。

「共有」「交流」「一貫」それぞれを主とした取組において、子どもの「まなび」「そだち」そして、それらを支える「そしき」に関する取組が行われていた。それほど多様で数多くの取組が山形県内で行われているということである。それだけに、さらに小中連携を充実させていきたいと考えている各学校にとって、現状に合わせて取り組むことができるヒントがここにあるのではないかと考える。また、成果に目を向けると、「共有」「一貫」を主とした取組では、主に教職員にとっての成果が見られ、「交流」を主とした取組では、主に子どもにとっての成果が多く出されていた。

3 おわりに

小中連携の調査研究を通して最も印象的であったことは、山形県内に優れた実践が数多くあること、そして、それらが実に多様な取組であったということである。その多様性は、目の前の子どもの実態や地域の実態などの違いがもとになっている。しかしながら、それぞれの取組には、「目の前の子どもが育つ」ということを願う教員の思いが共通していることもわかった。

本研究においては、小学校、中学校で過ごす9年間の子どもの成長に焦点をあてている。小中学校9年間は、思春期を迎え、子どもから大人へと心も体も大きく変化する大切な時期である。こうした9年間であるからこそ、子どもの「まなび」と「そだち」に目を向け、小学校と中学校、さらには地域を巻き込んで小中連携を進め、子どもの成長を支えていくことは、子どもの未来をつくることになると考える。

本研究に取り組んだ2年間で、山形県内すべての小中学校を対象にアンケート調査を実施し、また、先進的・実践的な取組を行っている学校の取材をさせていただいた。前述したように、本報告書には、山形県内の多様な実践事例が掲載されている。協力いただいた各小中学校及び関係各位に、改めて感謝したい。私たちの共通の願いである目の前の子どもの成長を支えるために、本報告書を参考にいただければ幸いである。

引用・参考文献

- ・貝ノ瀬滋著「小・中一貫コミュニティー・スクールのつくりかた」ポプラ社 2010
- ・呉市教育委員会編著「呉市の教育改革 小中一貫教育のマネジメント」ぎょうせい 2011
- ・高階玲治編集「幼・小・中・高の連携・一貫教育の展開」教育開発研究所 2009
- ・三宅基之編著「学校に求められる経営力 子ども発達支援マネジメント」パレード 2007
- ・「不登校・長期欠席を減らそうとしている教育委員会に役立つ施策に関するQ&A」
文部科学省 国立教育政策研究所 平成24年6月

実践事例取材協力校等

(平成24年度)

山形市立第八中学校	山形市立第十中学校	山形市立高楯中学校
山辺町立作谷沢小・中学校	中山町小中連携委員会	寒河江市立陵南中学校
寒河江市立寒河江中部小学校	河北町立河北中学校	村山市教育委員会
村山市立葉山中学校	村山市立大久保小学校	村山市立富本小学校
村山市立戸沢小学校	村山市立富並小学校	
葉山中学校区子ども交流事業実行委員会		
新庄市教育委員会	新庄市立新庄中学校	新庄市立明倫中学校
新庄市立日新中学校	新庄市立八向中学校	新庄市立沼田小学校
新庄市立北辰小学校	最上町立最上中学校	
高島町立第一中学校	高島町立第三中学校	高島町立高島小学校
長井市立長井南中学校	長井市立長井北中学校	小国町叶水小・中学校
鶴岡市立鶴岡第一中学校	鶴岡市立豊浦中学校	鶴岡市立朝陽第三小学校
鶴岡市立由良小学校	庄内町立立川中学校	酒田市立第四中学校
酒田市立島海八幡中学校	酒田市立新堀小学校	酒田市立浜中小学校
酒田市立南遊佐小学校	遊佐町立遊佐中学校	遊佐町立高瀬小学校

研究協力者

(平成24年度) 山形大学大学院教育実践研究科 准教授 三浦 登志一

調査研究担当者

1 年次 (平成23年度)			2 年次 (平成24年度)		
○……主担当			○……主担当		
○指導主事	尾崎 惣		○指導主事	尾崎 惣	
主任指導主事	岸 純一		主任指導主事	岸 純一	
指導主事	長沼 政直		指導主事	馬場 賢	
指導主事	須藤 真		指導主事	須藤 真	
指導主事	今野 栄治		指導主事	地主 佳子	
指導主事	地主 佳子		指導主事	星川 仁一	
指導主事	鈴木 武志		指導主事	鈴木 武志	
指導主事	大竹 純		指導主事	大竹 純	
			指導主事	安日 恵子	

発行 平成25年3月
 発行者 山形県教育センター
 天童市大字山元字犬倉津 2515
 TEL 023 (654) 2155
 URL <http://www.yamagata-c.ed.jp>
 印刷所 坂部印刷株式会社
 山形市流通センター1丁目5-3
 TEL 023 (631) 2056

